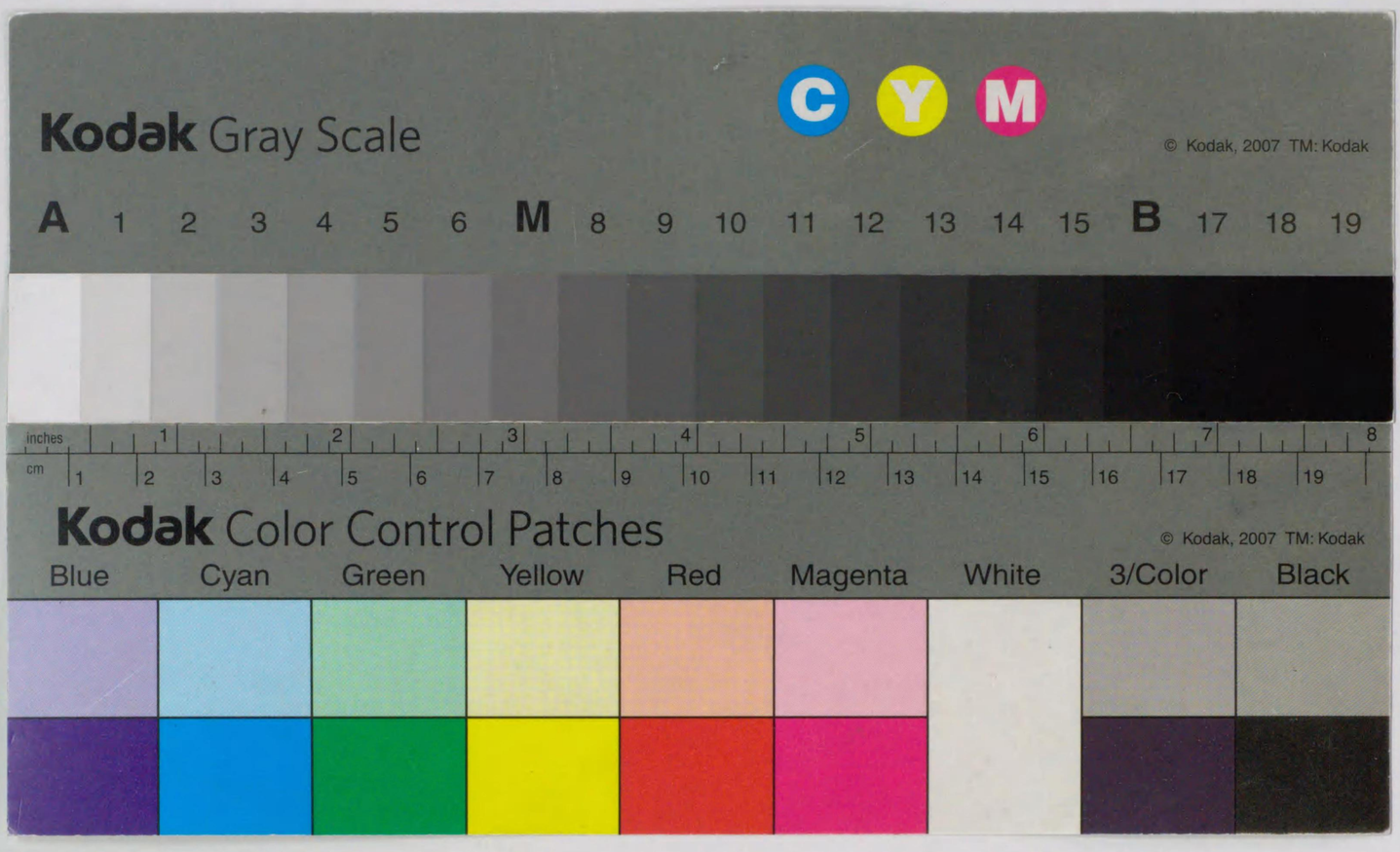


577-106
12005015204115

宿城縣志

全

26.12.26

2149

宮城郡誌

全

九・内交・昭和三・〇一・

夜長

吳清影

夜長

是清影

河北遂伯

獨昭龍

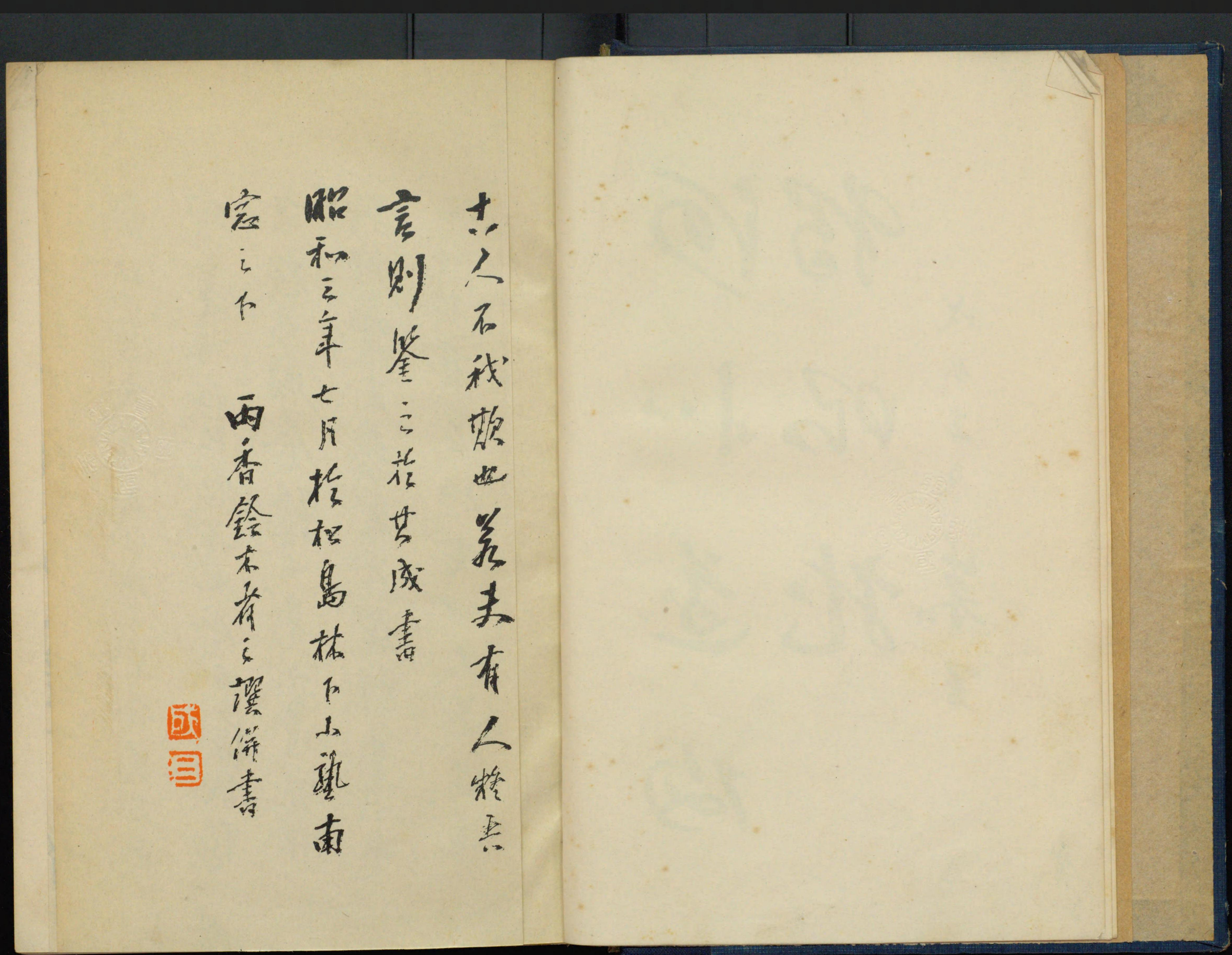
戊辰春日

朱王

河水遂向獨昭龍

戊辰春日

朱子



古人石秋類也若夫有人將焉
言則鑒之於其成書
昭和三年七月於松島林下山藝南
窓之下　丙香鈴木脊之選併書

凡物後而成者能為大也徵之花卉
乎在春後而大成志為牡丹富貴
之資無闕在秋後而大衆為
菊花隱逸之節備矣秋宮城縣
十六郡中郡史成志寶十二郡
龍中其大成志以登米郡史為巨
擘是可以比牡丹也今也宮城郡
史將大成金雖未見其內容可
伯仲登米郡史云然則是亦
可以比菊也如古曰大器晚成
其人不我欺也義夫有人將焉
言則鑒之花其成書
昭和三年七月於松島林下小熟南
窓之下　丙香鈴木齊之選併書

577-106

序

明治四十二年十月早川智寛翁宮城郡敎育會長の任に就くや切に宮城郡誌編纂の必要を感じ之を友部錬軒君に委囑す。友部君鋭意事に從ひ其の大半を成功せしが不幸にして病歿せるを以て遺言して鈴木省三君を委託し、更に今泉篁洲君に委囑して編纂の事を續行す。早川翁大正七年一月易簀し、清野宮城郡長敎育會長の任に就き前會長の遺志を繼ぎて郡誌編纂事業を促進し、今泉君亦孜々として完成を期したりと雖、爾來頻々として會長の交迭に遭ひ遂に完璧を見ること能はざりき。糟谷郡長會長たるに至りて偶〻大正十四年十月　今上陛下東宮として東北地方陸軍特別大演習を統監あらせられ鶴駕を本郡に廻らしたまふ盛事あり、此の光榮を記念せんが爲郡誌を完成すべきことを唱道し、梅森三郎君を招聘して編纂を一任し、翌十五年二月更めて稿を起すに至れり。六月郡制廢止せられ糟谷郡長廢官となるに及んで余敎育會長に擧げらる。敎育會は昨年四月の總會に於て解散の議を決し殘務整理期間を本年本月までとす。此の間梅森君は全力を傾注して編纂の事に當り今略大成を見將に剞劂に附して汎く頒布せられんとす。本郡誌編纂事業創始以來十有九年茲に其の完成を見る、實に歷代關係諸氏の苦心の賚たらずんばあらず。余は

茲に最後の教育會長として本誌編纂事業の經過を略說して其の顚末を明にし、併せて關係諸氏の功勞に對し深厚なる感謝の意を表す。

昭和三一年三月

宮城郡教育會長　大宮司雅之輔

序

夫れ鄉土誌は國史の基礎たるべきものなり、而して鄉土誌は各其鄉土固有の特色を顯はす、故に國史は鄉土誌に依つて大成すべく、鄉土誌は國史によつて光輝を發すべく、兩々相依り相照して國家の成蹟、民族の精華を映發し得べし、是れ鄉土誌が國民教育上缺くべからざる所以にして、近時國民思想の動搖甚しきに際して殊に其の必要を感せずんばあらず。

我が宮城郡は、大仙臺市を抱擁せる縣下の大郡にして、その建置の古きと史實の豐富なるとは國史に明かなるのみならず、奥州の史蹟名勝の大部分は實に我が宮城郡に存す、故に我が『宮城郡誌』は全奥州の歷史と密接に相關するものあり、豈啻に鄉土の特色のみと謂ふべけんや。

予の宮城郡長として就任するや、郡誌の未だ完成せられざるを聞き深く之を遺憾とせしが、偶々大正十四年十月　今上陛下東宮に在しまして、陸軍特別大演習を東北に御統監あらせられ、蹕を本郡に廻らし給ふの光榮に浴するや、郡民一同と共に永く御聖德を記念し奉らんが爲、郡誌の編纂を企てたり。此事たる、併せて郡制廢止の記念ともなるを以て、翌十五年二月より稿を起して爾來茲に二ヶ年、今や漸く完成せんとす、實に欣快に耐へざるなり。

序

宮城郡の建置は年代明かならず、和銅五年に出羽の國を置き、最上置賜二郡を出羽に屬せしめたるは狄族鎭壓の進みたるに依るなり、されば之と相應して陸奥の鎭所も國府も北に進めたるなるべく、宮城郡の建置も多分其頃ならんと思はる、斯くて鎭所先づ多賀に進められ國府も次いで多賀に移りたるべく、大野東人が多賀城を經營せる頃には陸奥の夷族、出羽の狄族も北へ〳〵と追ひやられ、奥羽の經略は大に進みしと見ゆ、その後鎭守府は出羽の狄族の鎭壓功程に伴ひ、北進して膽澤に遷りたれど國府は依然多賀にありて、陸奥の中心都府たりしなり、王朝衰へて兵馬の實權は奥の平泉に移りしも國司の治所は依然多賀にありて所謂在廳目代の役所なりしと思しく、平泉亡び鎌倉覇府の政治となりても、その留主職は宮城郡に居りしなり、建武中興の時、北畠氏奥州の國司となり多賀に居られたるは王朝の舊制度を復したるに外ならず、然るに不幸にして王政は挫折し武門執權時代繼續したる爲め宮城郡は奥州の中央都府たる位置を恢復する機會なくして今日に至りたるも、要するに和銅の頃より南北朝時代までは陸奥の中心は宮城郡にあり、夷狄に對する鎭壓、植民文化政策及び土地の開拓、農桑の奬勵等皆此地を中心として行はれたるものなるが故に、宮城郡の歷史は全陸奥の歷史と密接且多大の關係あるや論なし、曾て源重之の集を見るに、重之の母が車にて末の松山に子の日の松を引きに行きける時、重之が「末の松引きにぞ來つるわれならぬ波のみをると聞くが妬さに」とあり、又小鶴の池のことなどもあり、その頃多賀の國府に居りし京師の官人だちの風俗などを偲び古き繪卷物を見るが如き美しき想像に耽りたることあり、奥羽のうちにて撫古感今の情の最も深きは此の宮城郡なるべし、隨つて又傳ふべき史實の多かるべきことも明かなれど、古史の太だ簡略なるに今日に存する史料亦

惟ふに鄕土を離れて家庭なく敎育なし、即ち鄕土誌は家庭に於ける永遠の敎育にして且つ偉大なる感化の泉源たり、冀くは聖德を無疆に記念し奉ると共に、永遠にして偉大なる敎育の資料とせられんことを。一言以て序辭とす。

昭和三年三月

糟谷哲郎

多からざるが如し、されば此の郡の歴史を編纂するの困難はいふまでもなきことにて故早川智寛氏が教育會の事業として、その編纂を思ひ立ちたるはまことに勇斷といふべし、然るに早川氏歿して後數代の教育會長を經て大宮司氏の代に至り、編纂者は友部氏今泉氏を經て梅森氏に至り終にその完成を見るに至りたるは眞に歡喜に耐へず、歴代の會長及び編纂の任に當りたる諸氏に對しては深く感謝せざるを得ず、此書一たび出づ、奥羽文化の淵源に遡り沿革を考察し得ると共に、その尺寸の地にも千古の俤を偲び、以て歴史的情緒を涵養し以て地方鄉土の經營に對する不撓の精神を發揮するを得べし、豈啻に教育會の爲めに賀すべきのみならんや。

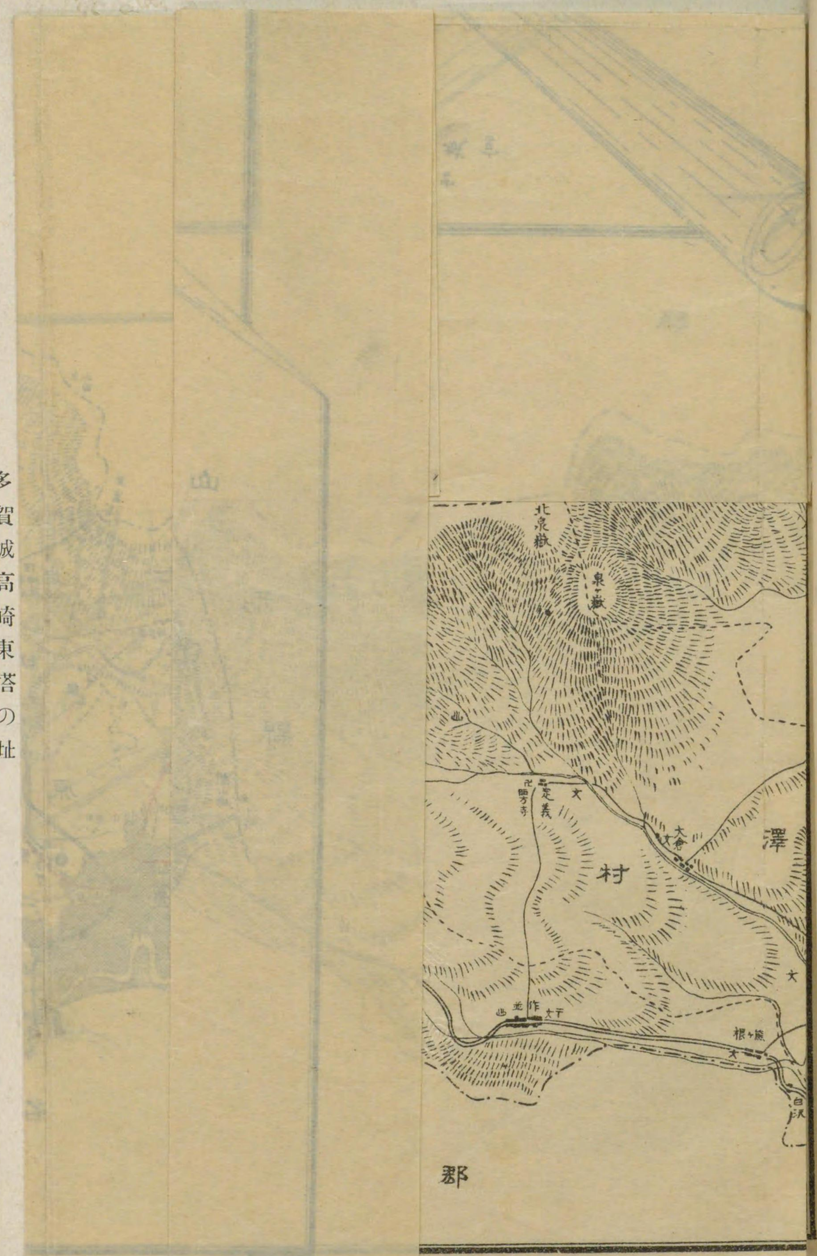
山本君より所感を題せよとの切なる需めの辭し難きまゝ、病中覺つかなき筆をとりてかくは記しつ。

昭和三年七月

藤原相之助

序

宮城郡誌稿成り將に剞劂に附せんとするに方り序文を予に求めらる。予は其人にあらざるを知るが故に荏苒今日に及びて猶固く辭したれども許されず、遂に此文をものすることゝはなりぬ。宮城郡は之を地理的に見るときは我國三景の一に數へらるゝ松島の勝景あり、之を歴史的に見るときは奥羽の鎭守府として知られし多賀城の遺址あり、神社に鹽竈社あり、寺院に山の寺洞雲寺あり、温泉湧き山岳海濱の勝地多し、故に先住民族の遺跡に富み有史以前既に文化の地なるを証し得べく、現今農産豐かに漁鹽亦饒かなり。日本武尊東征の時上陸地點なる竹の水門を七ケ濱附近に求むる人あり、殘篇陸奥風土記を信ずべくんば推古の朝に鼻節神社に圭田を奉じたる記事あり、類聚國史は舒明天皇二年七月宮城郡松島八幡に同四年七月鹽竈神社に勅使を奉じたる記事を載せたり、然れども和銅六年十二月に初めて丹取郡（名

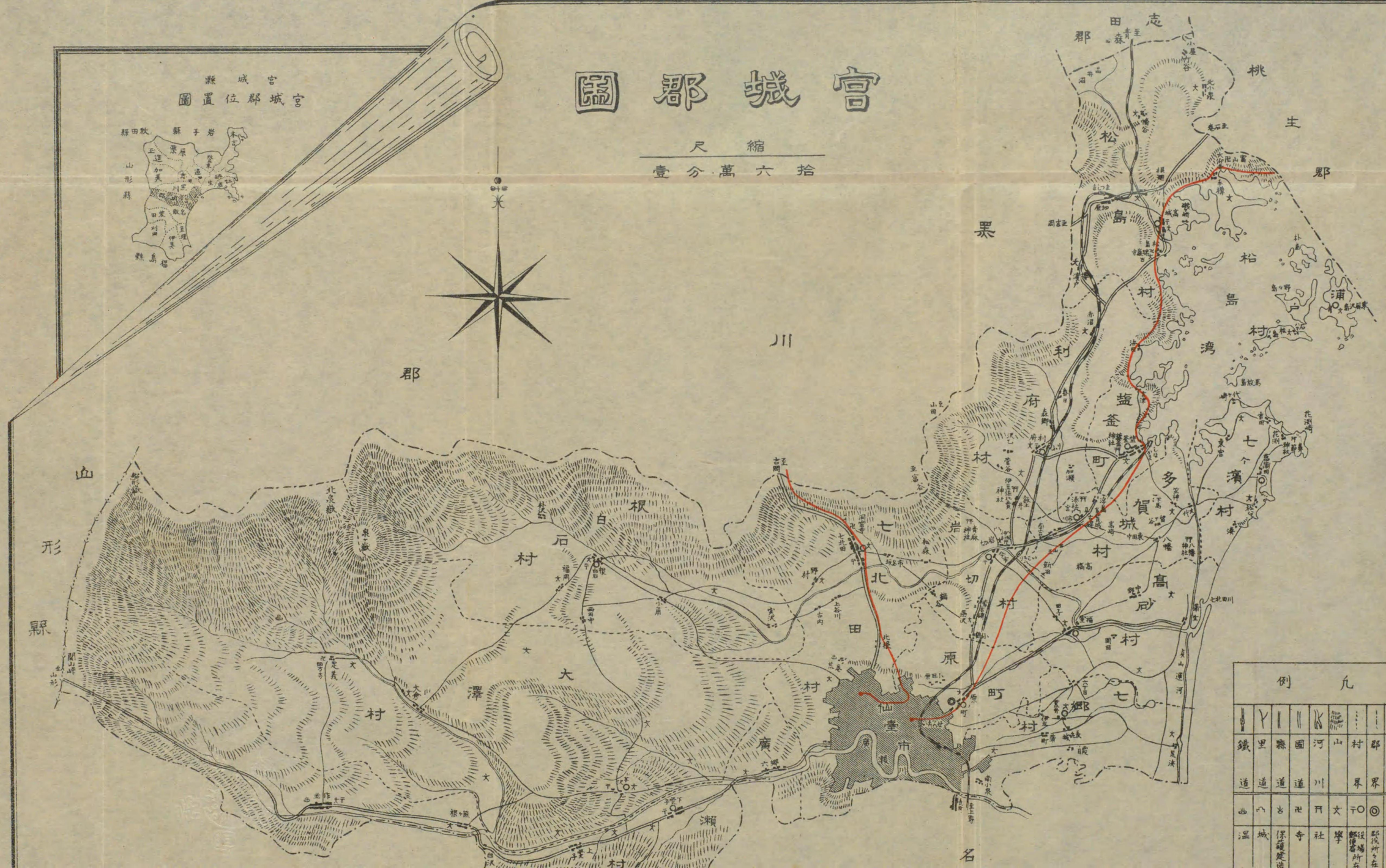


多賀城高崎東塔の址

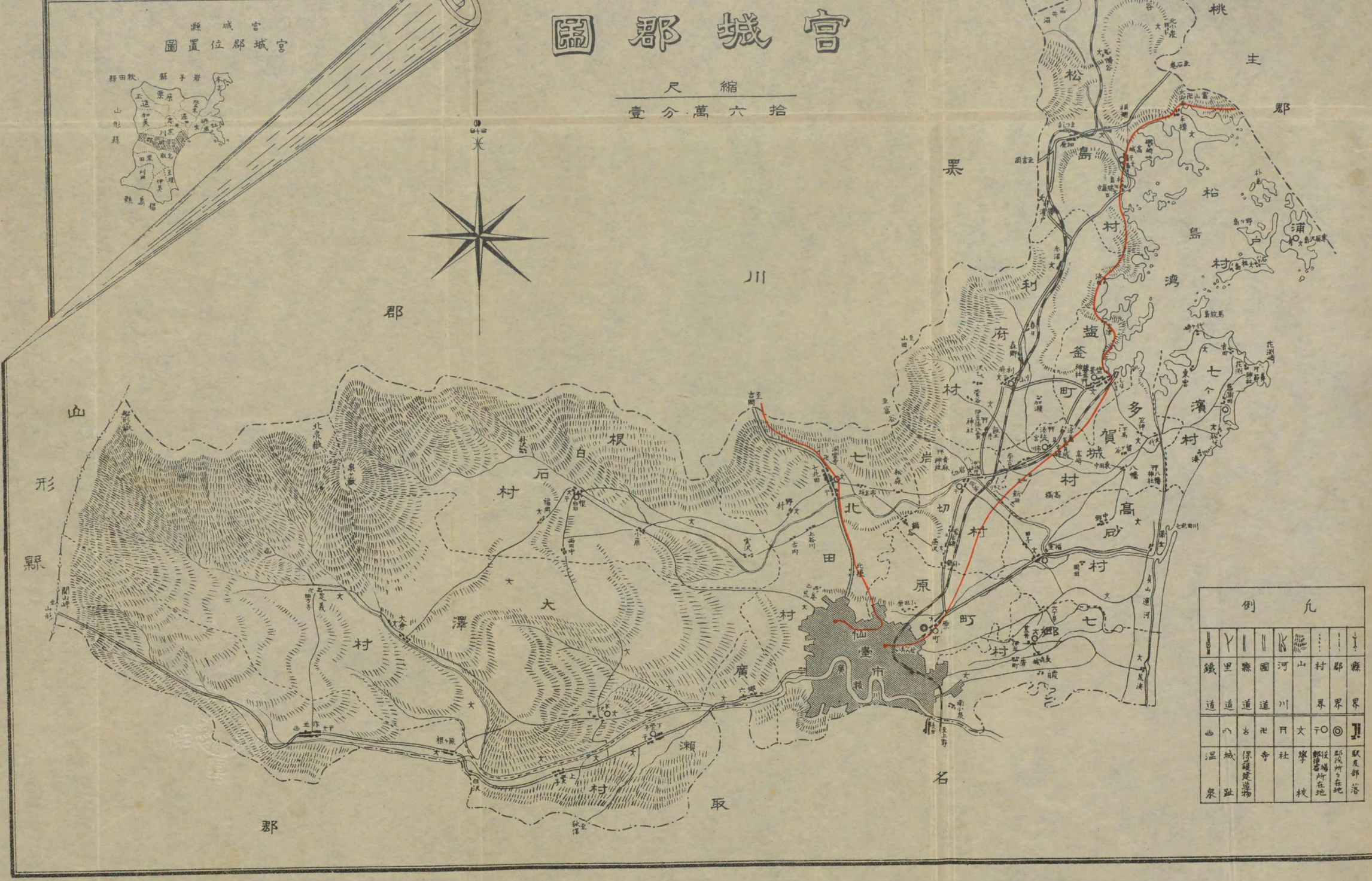
取郡か)を建てたるに考へて此以前に於て宮城郡は置かれしや否や疑問なり、大槻博士はもと名取の域内ならん、多賀築城の後其城下の地を割きて宮城一郡を建てらる、勝寶寶字の際かといひ、吉田博士は宮城の置郡は史に明文なしと雖も和銅養老の際かといはれたり、其明かに宮城郡と記されしは天平神護二年十一月己未陸奥國磐城宮城二郡の稻穀一萬六千四百斛を以て貧民に賑給すとあるを以て始めとす、何れにしても古き置郡なる事を知るべし、されば夙に東北開發の先驅奥羽文化の中心たるや明かなり。著者畏友梅森三郎氏は志田郡荒雄村の人曩に仙臺産馬沿革誌、凶荒史、日露國交史料、志田郡沿革史、加美郡誌等の名著あり、今此經驗ある人によりて宮城郡誌は成る、誠に欣快に堪えざるなり。些か所思を陳じて卷頭に序す。

昭和三年七月

宮城縣史蹟名勝天然紀念物調査委員
東北學院教授　清水東四郎


宮城郡圖
縮尺
拾六萬分壹
宮城縣
宮城郡位置圖
秋田縣
岩手縣
山形縣
福島縣
山形縣
名川
志田郡
桃生郡
松島村
松島湾
鹽釜町
多賀城村
高砂村
七濱村
七北田村
仙臺市
大澤村
白石村
根
廣瀬村
七北田
岩切村
七郷村
凡例
縣界
郡界
村界
山
河川
國道
縣道
里道
鐵道
學
社
寺
城
溫

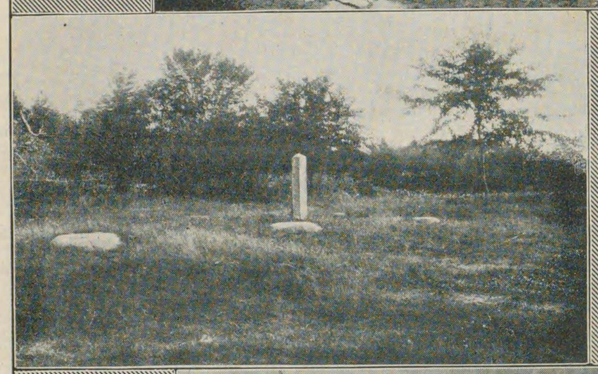
東北學院教授 清水東

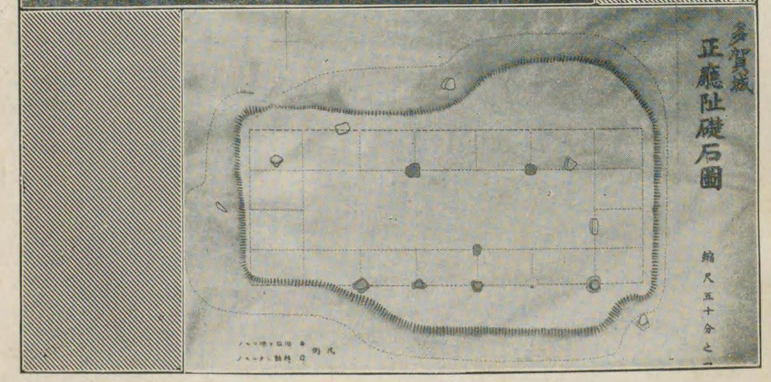


東北學院教授 清水東四郎

多賀城正廳の址

多賀城高崎東塔の址

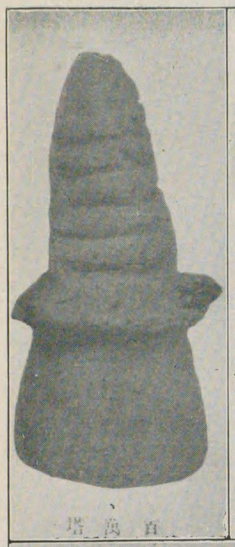




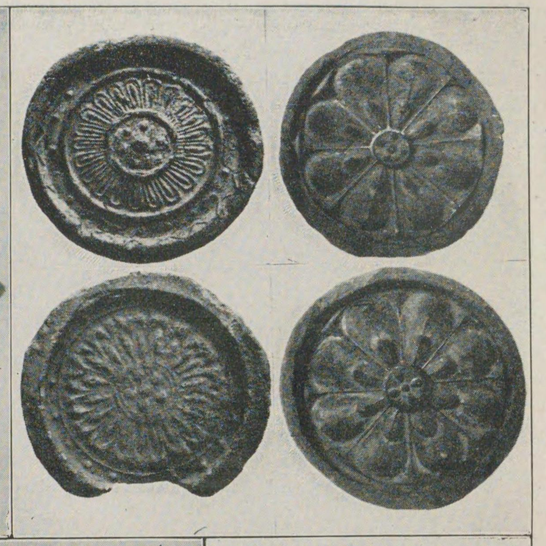
多賀城正廳址礎石圖

多賀城址發掘の古瓦と古器

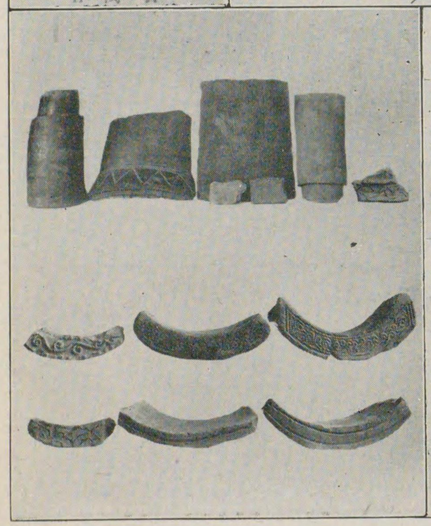
百萬塔



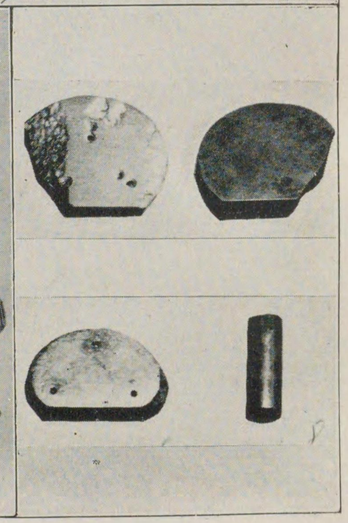
古瓦



古瓦と其破片



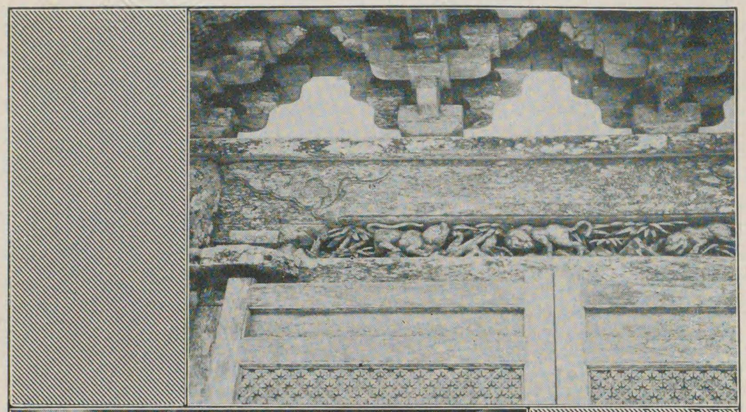
管玉と石帶



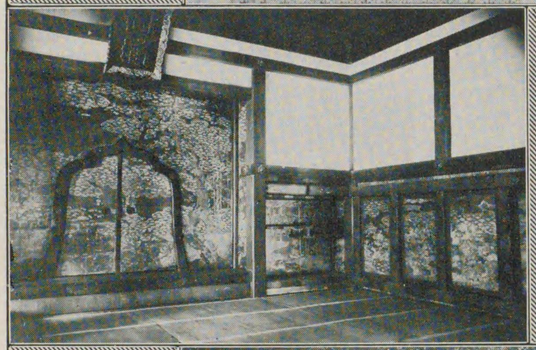
瑞巖寺本堂と政宗御門

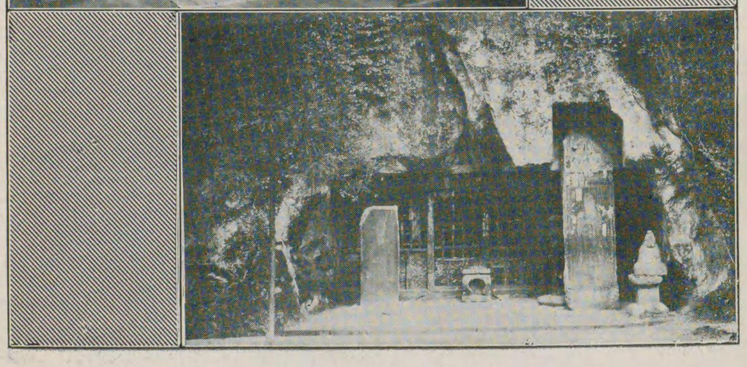
瑞巖寺奉安貞山公の骨像

瑞巖寺本堂の彫刻（一部）



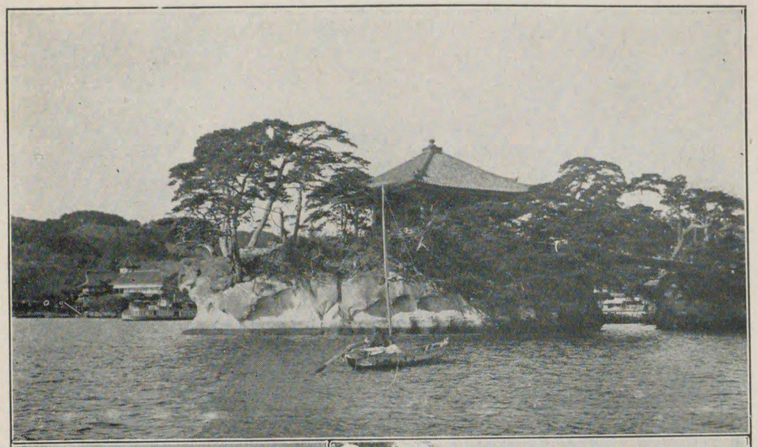
瑞巖寺本堂の一部

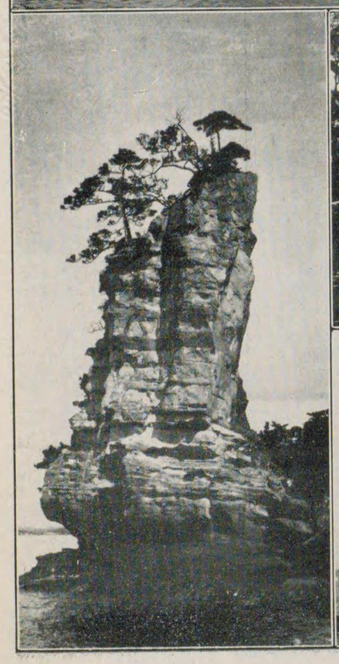




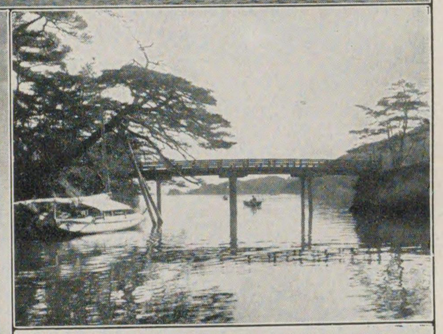
瑞巖寺境内の法身窟

松島五大堂

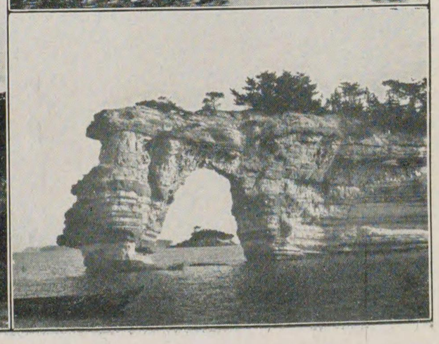




松島おいらん島

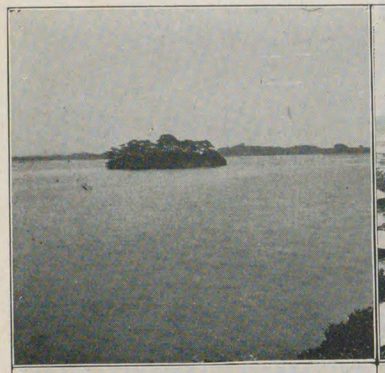


松島御島渡月橋

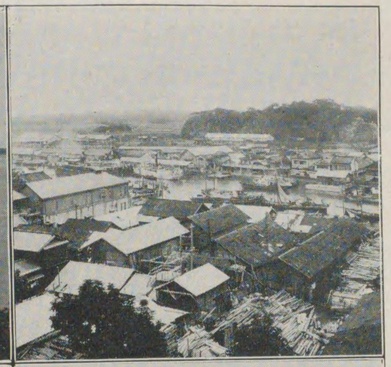


松島材木島

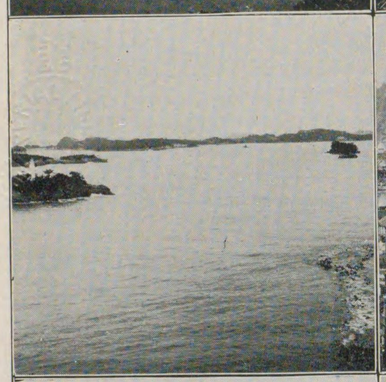
鹽竈港の水色（六種）



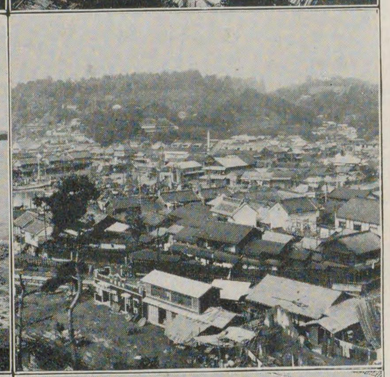
港外の一部



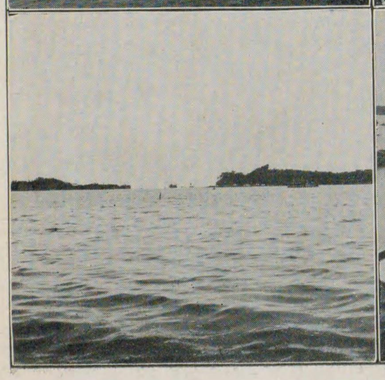
市街の一部



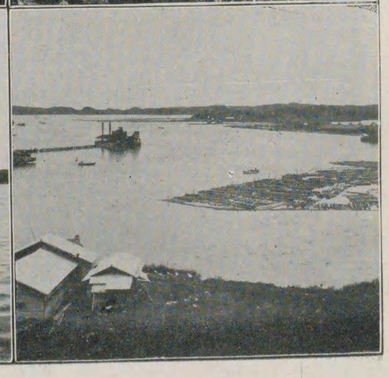
港外の一部



市街の一部



港外の一部

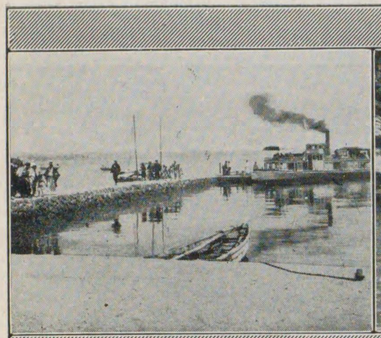


港外の一部

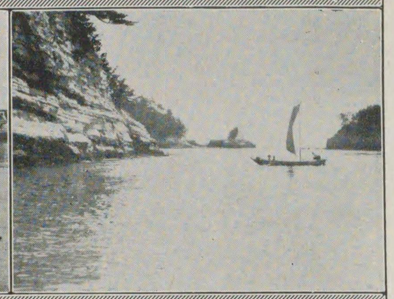
國幣中社 鹽竈神社

同社表參道

同社宮司山下三次

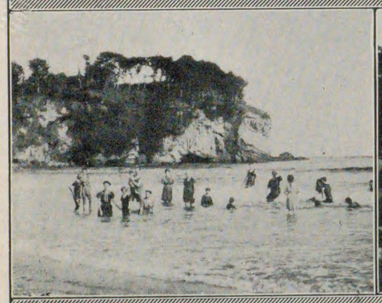


浦戸村桂島波止場

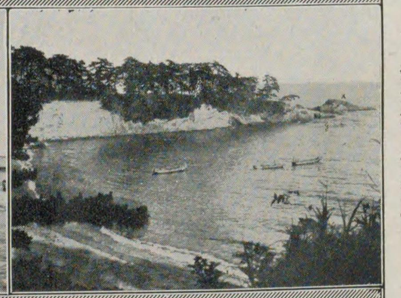


浦戸村寒風澤鹿の濱より屏風島を望む

菖蒲田海水浴場



菖蒲田濱高山外人の海水浴場

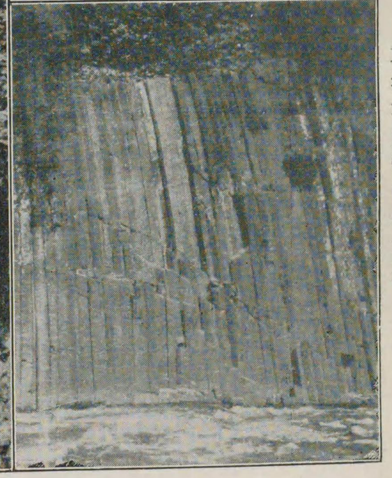


七ヶ濱村松ヶ濱御殿崎

根白石より七北田川を距てて泉ヶ岳を望む

根白石村朴澤の不動瀧

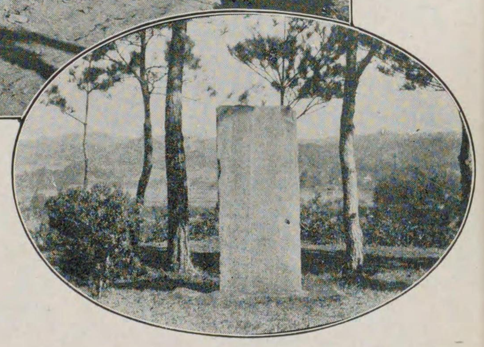
大澤村定義の天狗橋



大澤村定義の材木岩

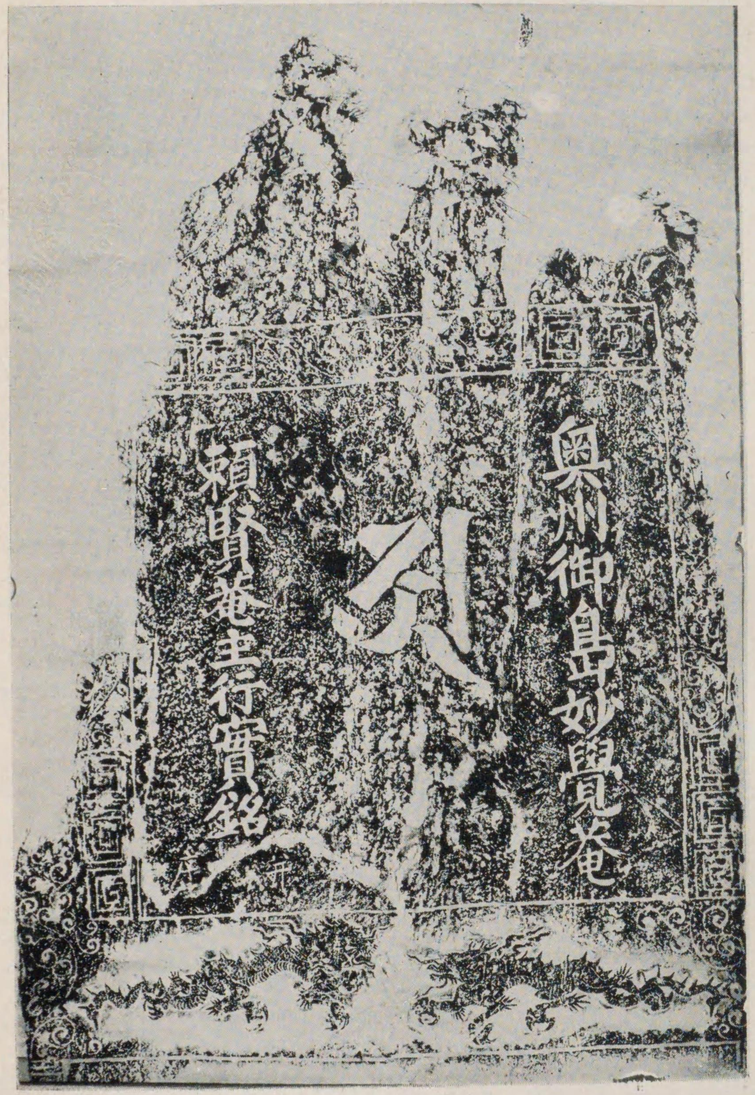
統監殿下の御英姿（七北田野外統監部行啓の御途中）

（大正十四年十月二十一日）

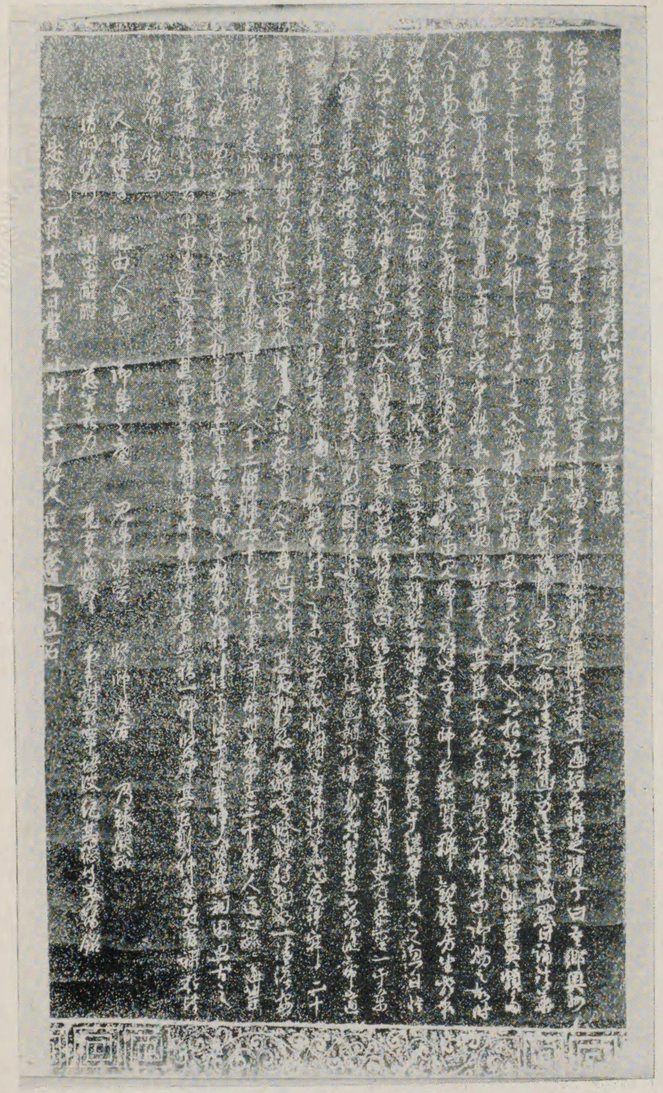


肩掛山御野立所

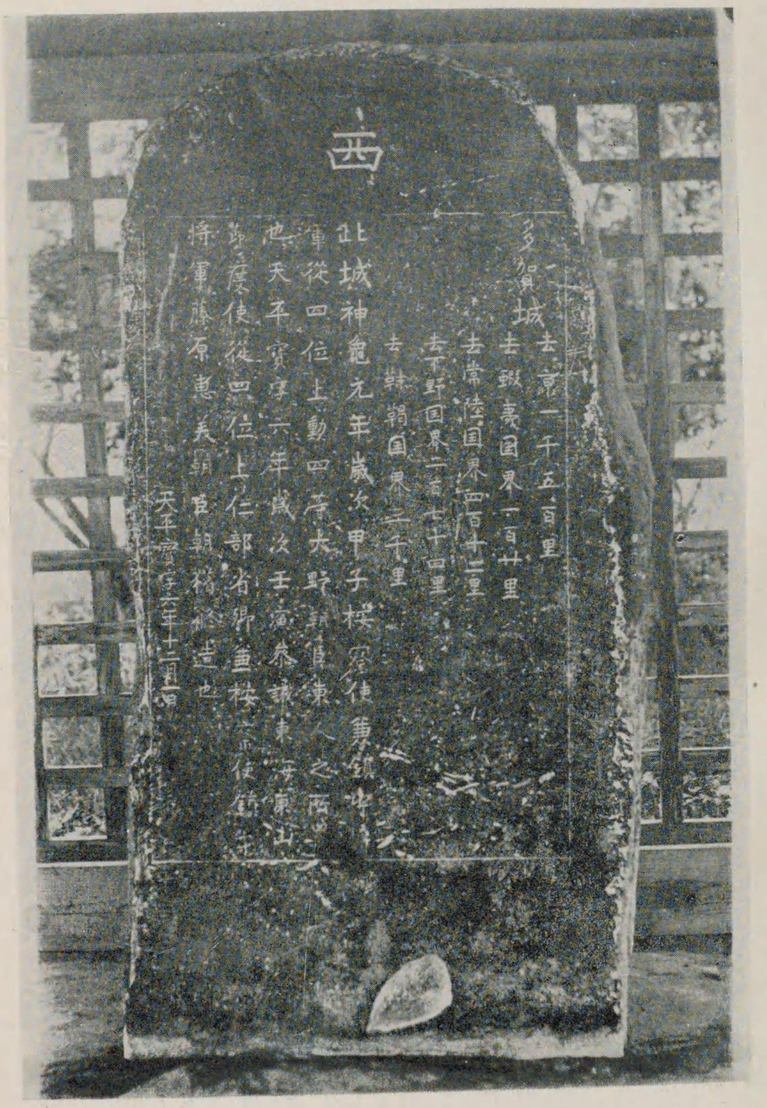
松島御島賴賢の碑（其一）



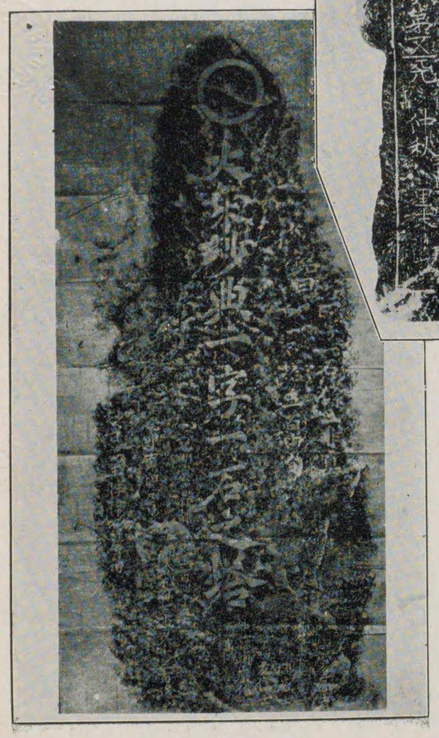
松島御島巡賢の碑（其二）



多賀城村多賀城碑正面


西
多賀城
去京一千五百里
去蝦夷国界一百廿里
去常陸国界四百十二里
去下野国界二百七十四里
去靺鞨国界二千里
此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守
軍從四位上動四等大野朝臣東人之所
也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山
節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守
將軍藤原惠美朝臣朝猶修造也
天平寶字六年十二月一日

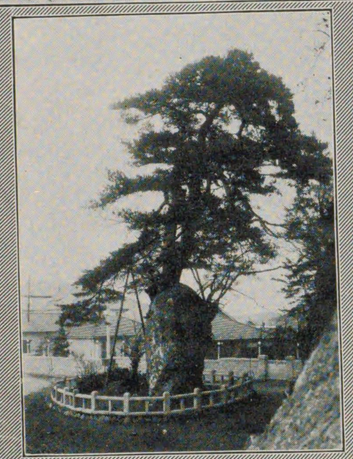
岩切村燕澤碑（表）



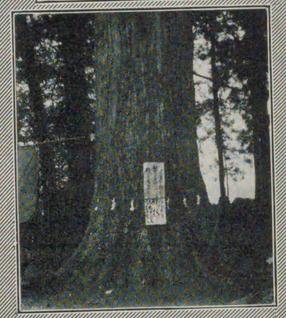
碑陰如法經塔

野守屋敷（永野榮助邸）

天然記念物原町の乳公孫樹



松島三交松

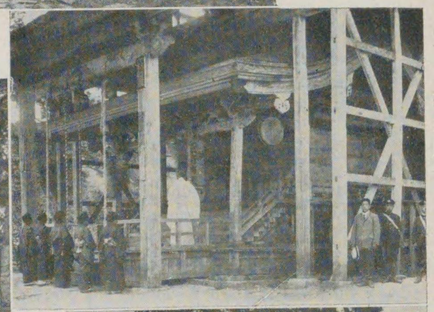


鷲倉神社の姥杉

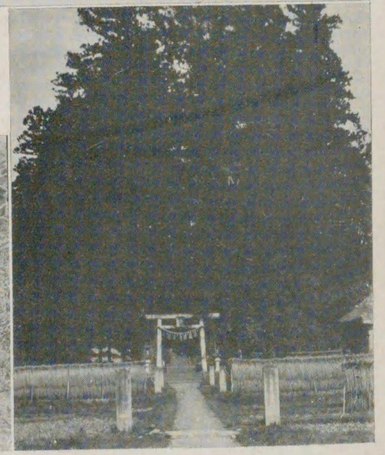
天皇塚連理の榛

諏訪神社の名木

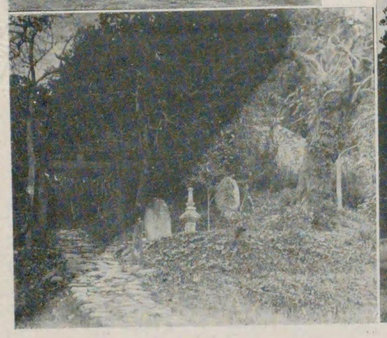
多賀城村奏社宮



廣瀬村御殿山諏訪神社



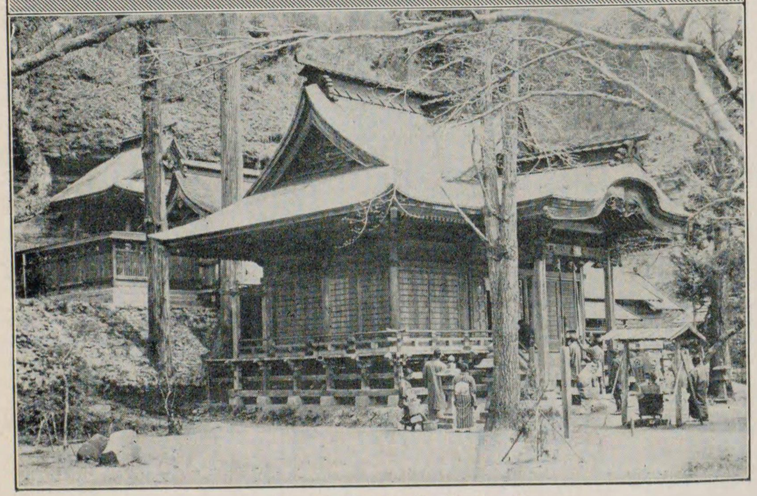
根白石村宇佐八幡神社



根白石村鷲倉神社

同朴澤八幡神社

大澤村字那禰神社祭典

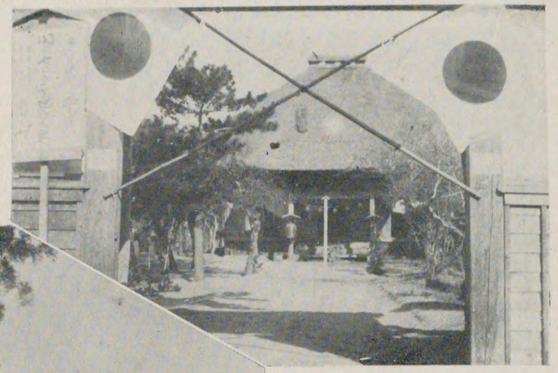


岩切村青麻神社社殿

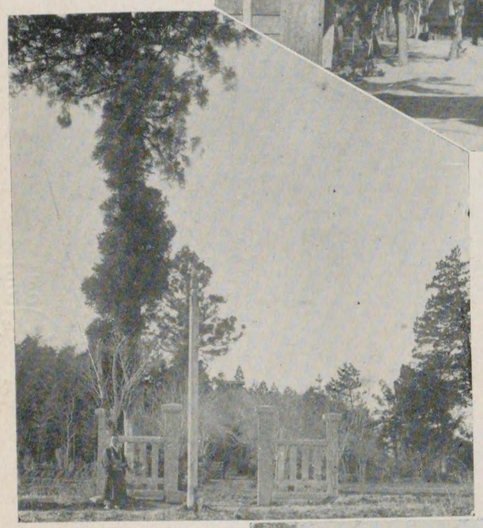
七北田村山の寺

根白石村満興寺

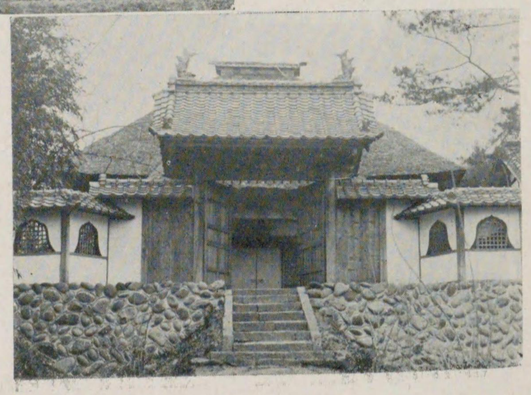
根白石村永安寺



七鄉村淨土寺

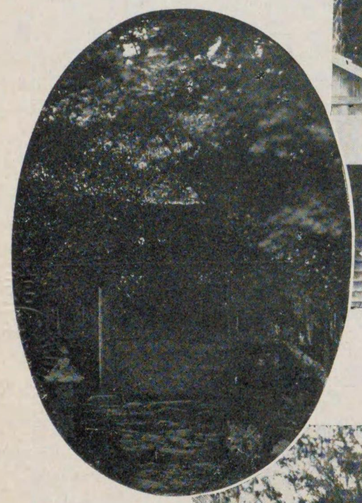


高砂村西光寺



大澤村德源寺

大澤村定義の如來堂



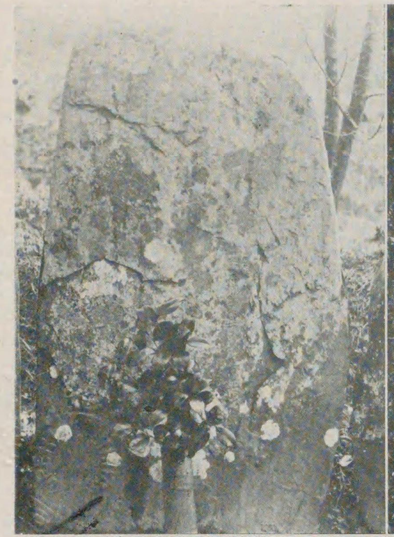
根白石村白藤觀音堂

根白石村阿彌陀堂

和賀忠親の碑（原町南目字志波西）

宮千代之墓（原町新屋敷柴崎）

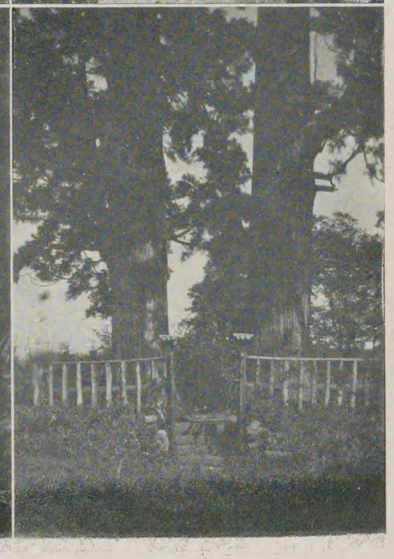
天遊館址（原町小田原庚申前）



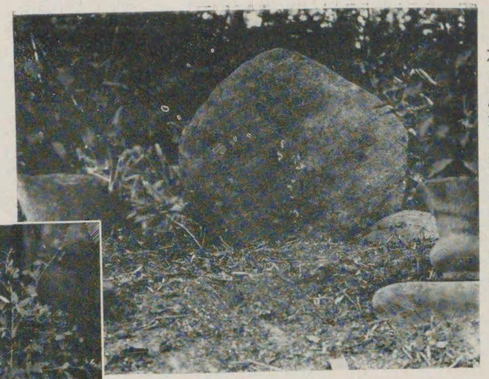
高砂村正平親王墓碑

多賀城村弘安之碑

根白石村須藤刑部の墓碑



根白石村杉目御前の墓碑

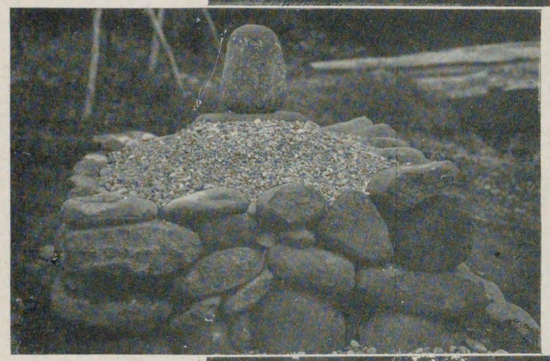


根白石村内藤以貫の墓碑

根白石村櫻田良佐の墓碑

七北田村寺坂吉右衞門の墓碑

根白石村山邑城址



根白石村名由來の起源地

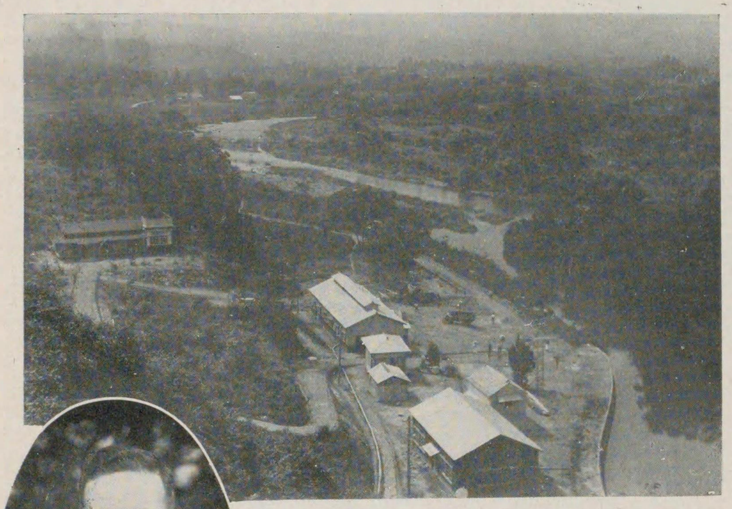
根白石村朴澤の龜の子石

利府村澤乙鰺泉

根白石村藤澤鰺泉

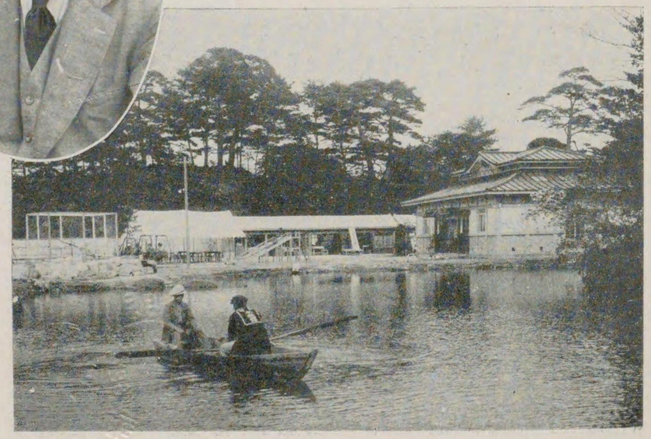
廣瀨村作並温泉元湯（岩松旅館）

同新湯森谷旅館



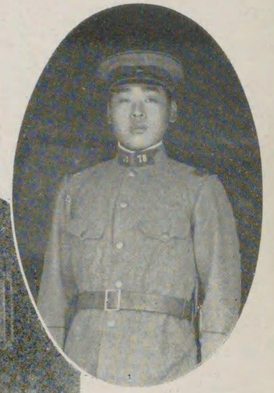
根白石村實澤天然鹹泉炭酸水湧出工場

水族舘主　高橋良作

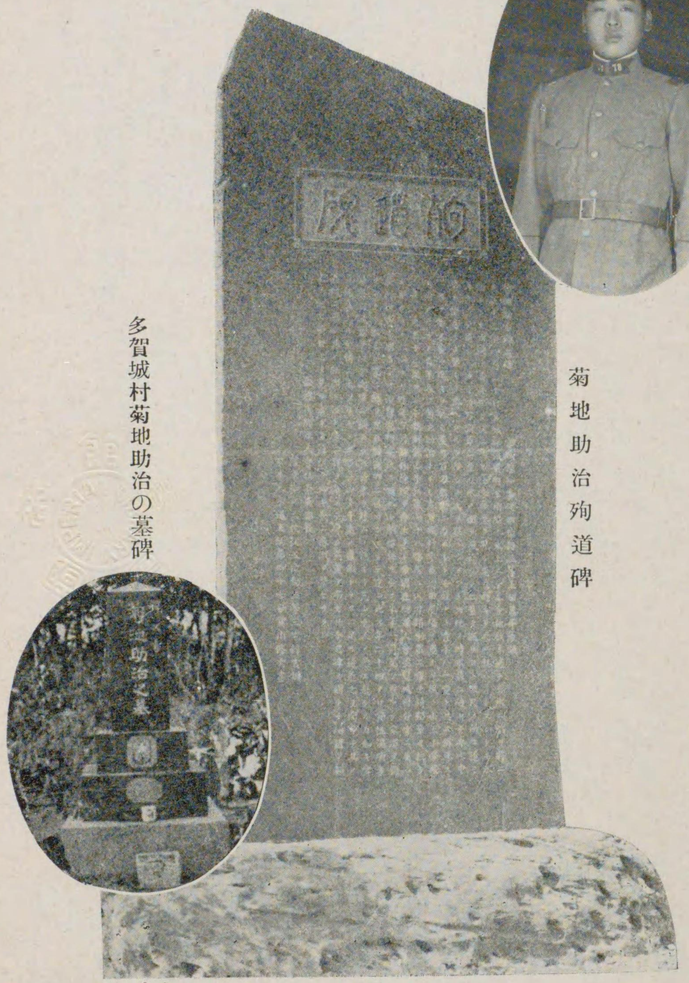


松島水族舘の一部

菊地助治

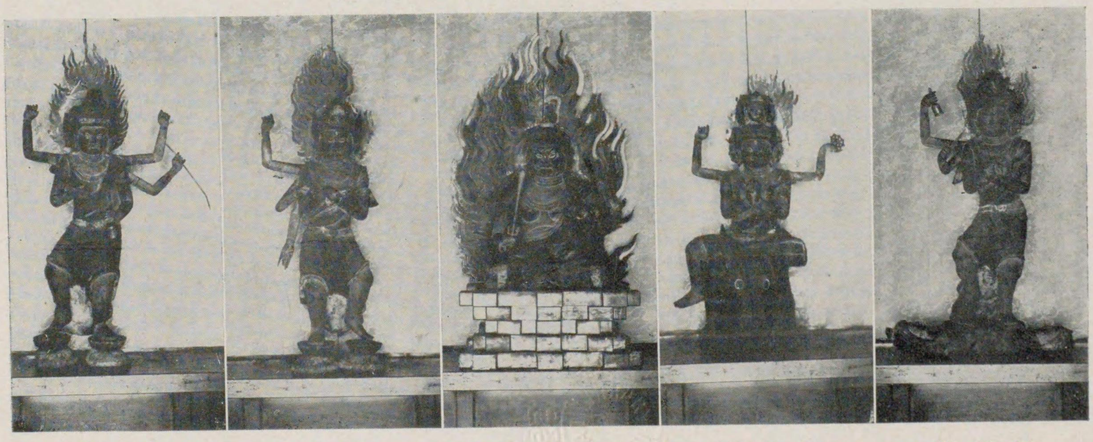


菊地助治殉道碑



多賀城村菊地助治の墓碑

松島五大堂の五大尊像



降三世　大威德　大聖不動　軍荼利　金剛夜叉

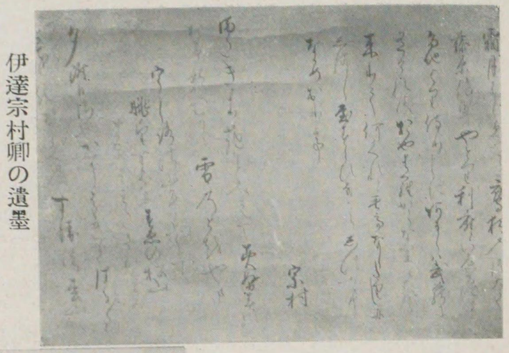
岩切村菅瀧神社寶物

慶瀬村諏訪神社寶物

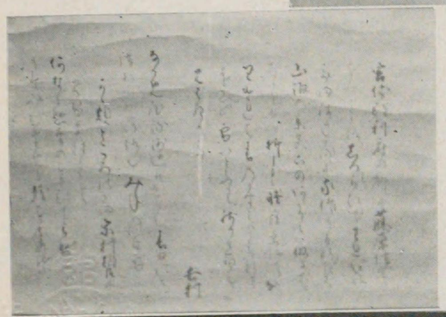
（作曾定）　脅動不の山殿　卿村潮實

大澤村定義西方寺寶物

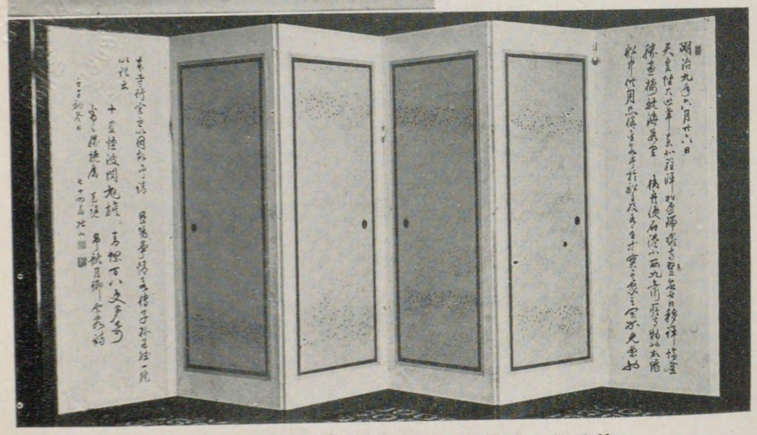
七ク濱村鼻節神社の寶物「國府印」



伊達宗村卿の遺墨（木村信基藏）



伊達吉村卿の遺墨（木村信基藏）

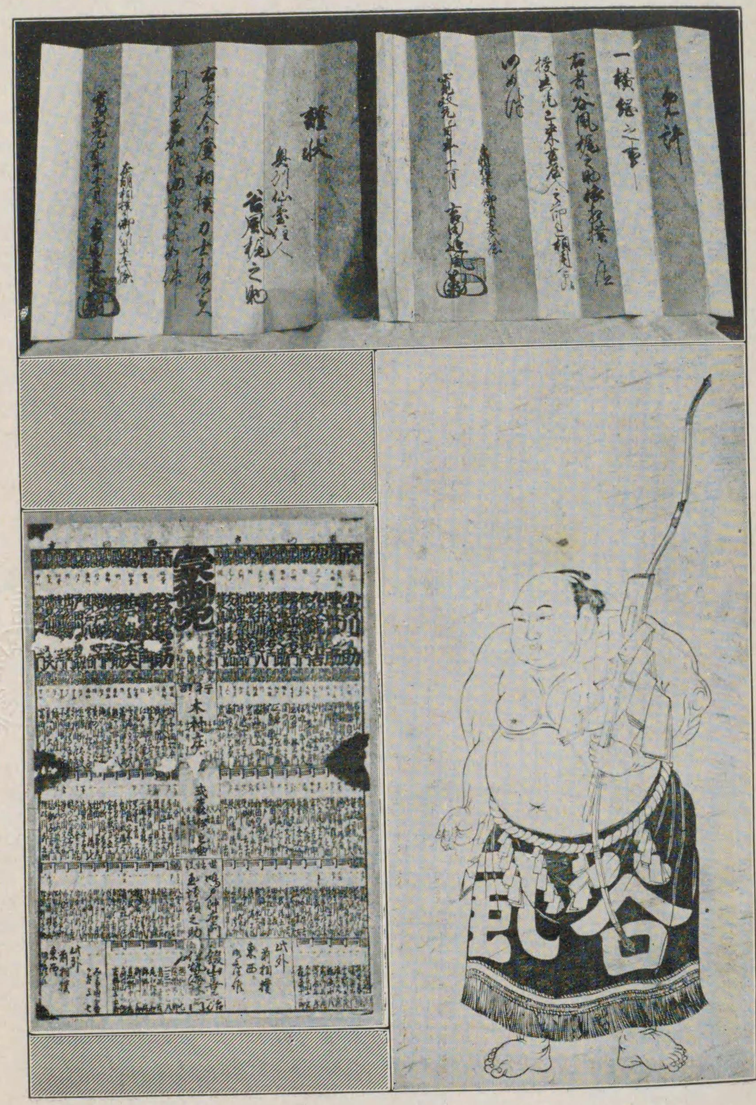


眞壁北山遺墨第一次御巡幸の遺蹤（小西九兵衛藏）

鰐魚の頭蓋骨と鉤

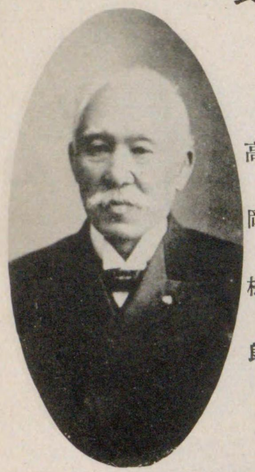
田邊希元の遺墨（箱書）太宰藤治藏

鼻簡神社の縁起書（遠藤宗休遺墨）遠藤勇治郎藏



力士谷風の畫像と番附及横綱免許状

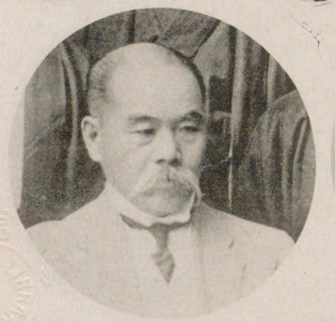
歷代宮城郡長



高岡松郎

八乙女盛次

菅克復



本田龍助

清野喜左衛門

糟谷哲郎

森田專七郎

戸田元太郎

宮城郡教育會長及其他

教育會長
早川智寛

教育會長
大宮司雅之輔

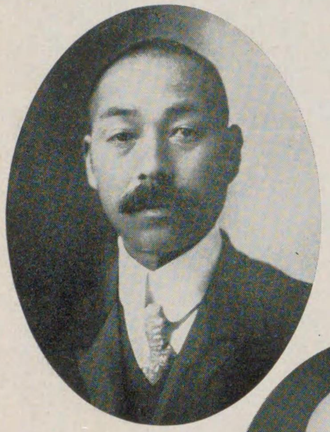
副會長
石川一壽

副會長
高橋與一

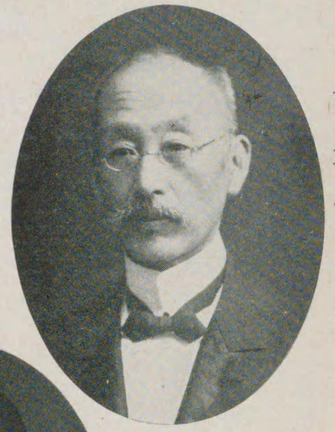
教育會幹事
佐藤英雄

郡誌編纂主事
梅森三郎

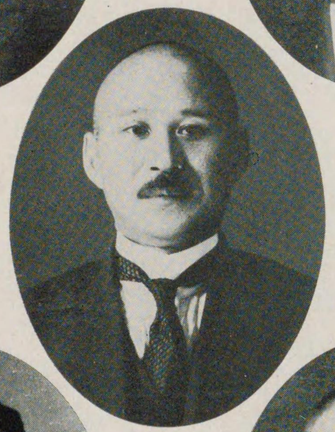
宮城郡視學在任中の教育會副會長

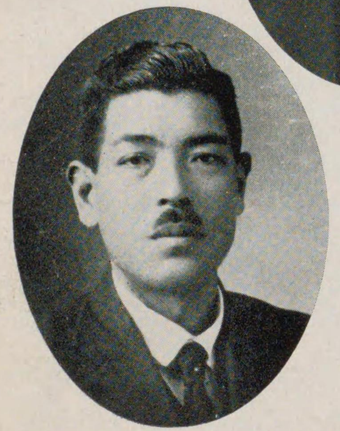


木名瀬德力

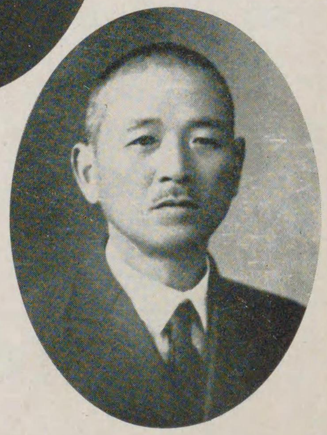


西大條規





木村元



山本金次郎

萱場柔次郎（中央）

（宮城郡長糟谷哲郎外町村長郡役所員）（宮城郡役所玄關にて

宮城郡長糟谷哲郎外郡役所々員

（青麻神社々殿前に於て）

（宮城郡役所構内に於て）

宮城郡長糟谷哲郎外郡視學各小學校長

原町町長助役收入役各係主任町會議員

（前列右より）町會議員八島平五郎、同佐藤次郎八、收入役遠藤條三郎町會議員庄司學太郎、町長佐々木德之助、助役渡邊榮助、町會議員七浦理兵衛、同鄉家英記

（中列右より）町會議員蜂谷勇之助　同鳥山正三郎、同佐山勘四郎、同森柳三郎、同庄司新之亟、同武田清治　同根本文六、

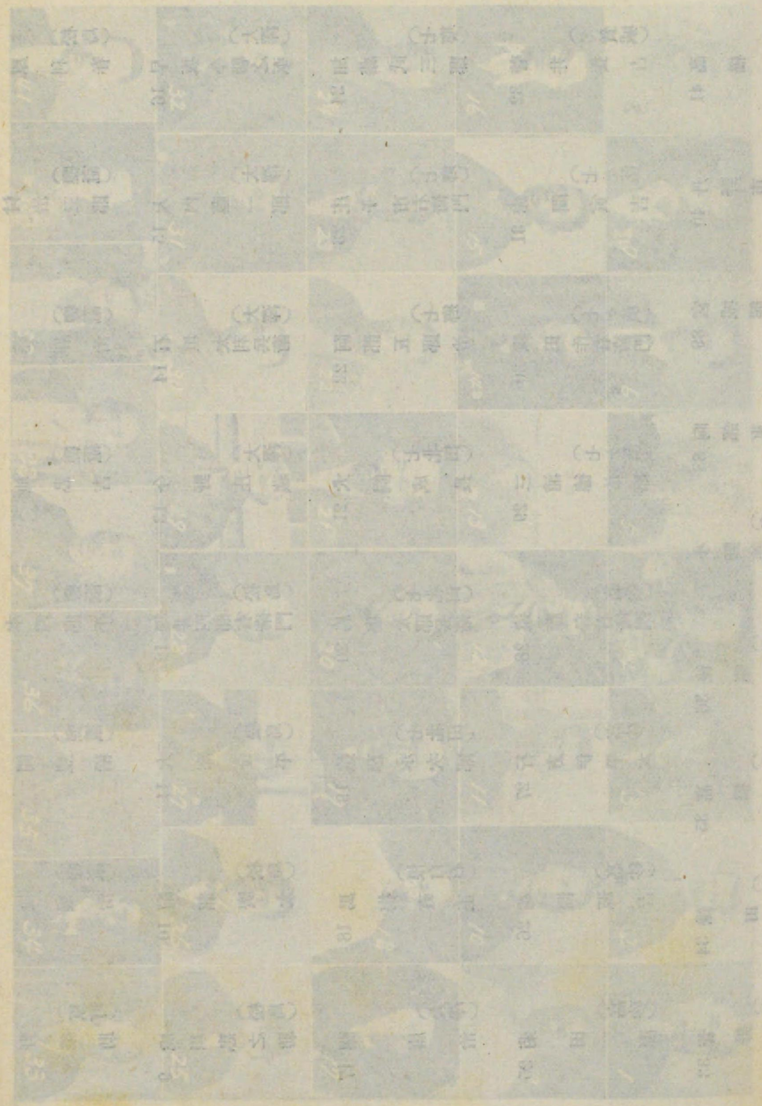
（後列右より）書記小畑弓馬、町會議員木皿勘左衛門　同永澤啓治、同川村伊兵衛　同山形富之助、同荒井榮太郎、役場吏員山形晢助

原町小學校長富岡喜代治　　同學務委員庄司直助

同學務委員吉田二郎　　同武田銳丸　　同鳥山文吾

1 富塚雄治（鹽竈）
2 佐々木敬太郎（鹽竈）
3 鈴木慶吉（鹽竈）
4 郡山雄治（松島）
5 山岡長雄（松島）
6 立花泰隣（松島）
7 小泉長穗（松島）
8 武市道孝（松島）
9 中川幸治（松島）
10 鈴木小右衛門（松島）
11 松尾權吉（松島）
12 一丸松太郎（松島）
13 眞籠良三郎（松島）
14 佐藤貞治（廣瀬）
15 熊谷甲牛郎（大澤）
16 田中鐵吉（大澤）
17 關源五郎（大澤）
18 藤原良吾（大澤）
19 志賀時熙（根白石）
20 中川父寛（根白石）
21 千葉善三郎（根白石）
22 木村學（根白石）
23 安藤恂（根白石）
24 佐藤健一郎（根白石）
25 石川松三郎（根白石）
26 佐藤廣志（根白石）
27 松浦榮三郎（七北田）
28 山崎忠右衛門（七北田）
29 松尾權六（七郷）
30 濱谷伊太郎（七郷）
31 赤松元（七郷）
32 萱場利兵衛（七郷）
33 草刈友四郎（七郷）
34 庄子伊左衛門（七郷）
35 舘内左四郎（高砂）
36 武澤喬（高砂）
37 小野金藏（高砂）
38 菅原新太郎（七ヶ濱）
39 高橋虎夫（七ヶ濱）
40 松沼榮治郎（多賀城）
41 高橋鐵牛（多賀城）
42 櫻井藏治（利府）
43 白石慶治（利府）
44 西川常三郎（浦戸）
45 萱場柔壽郎（原町）

宮城郡歷代各小學校長



1 永野榮助（原町）
2 菊地雄治（鹽竈）
3 水間豐稻（鹽竈）
4 根本四郎平（鹽竈）
5 菊地忠吉（鹽竈）
6 佐藤靜治（鹽竈）
7 今村治三郎（鹽竈）
8 菅原利春（松島）
9 虎川忠之助（松島）
10 阿部廣太（松島）
11 大窪金平（松島）
12 櫻井四郎右衛門（松島）
13 今野庄藏（大澤）
14 石垣太利兵衛（大澤）
15 大內藤一郎（大澤）
16 早坂今朝之亟（大澤）
17 關庸治（大澤）
18 馬場直正（根白石）
19 遠藤永次郎（七北田）
20 馬場太郎兵衛（七北田）
21 犬飼成長（七北田）
22 阿部五郎治（七鄉）
23 庄子市右衛門（七鄉）
24 加藤武三郎（七鄉）
25 菊田潔（高砂）
26 花淵源吉（高砂）
27 行方伊平太（高砂）
28 遠藤音右衛門（高砂）
29 三浦德治郎（七ヶ濱）
30 鎌田作右衛門（七ヶ濱）
31 赤間寅吉（七ヶ濱）
32 菅井養吉（多賀城）
33 菅野拾松（多賀城）
34 鎌田[illegible]（多賀城）
35 高橋正[illegible]（多賀城）
36 後藤大輔（多賀城）
37 小野善右衛門（多賀城）
38 阿部東四郎（利府）
39 宮城熊太郎（利府）
40 丹野市右衛門（利府）
41 高橋清[illegible]（利府）

宮城郡歷代町村長

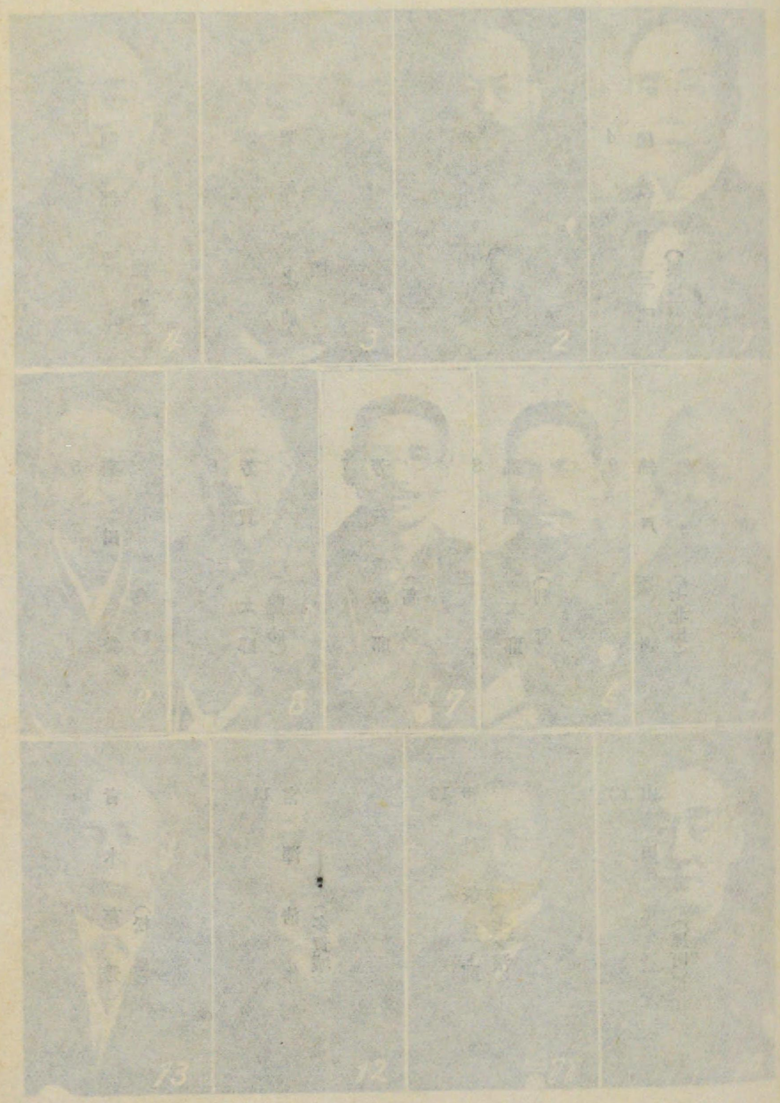
各部落町長役場在任中

宮城郡各町村歴任助役

（一乃至二四助役　二五乃至四二収入役）

1 渡邊榮助（原町）
2 板宮元吉（鹽竈）
3 熊谷久七（鹽竈）
4 內海金兵衛（鹽竈）
5 荻原平三郎（鹽竈）
6 境伊勢治郎（鹽竈）
7 積善精一郎（鹽竈）
8 三浦源次郎（鹽竈）
9 櫻井貞助（松島）
10 庄子逸郎（廣瀨）
11 東海林儀兵衛（大澤）
12 佐藤長重郎（大澤）
13 東海林儀左衛門（大澤）
14 鷲尾榮治郎（根白石）
15 永澤庄太郎（根白石）
16 櫻田盛（根白石）
17 加藤一治（七北田）
18 佐藤門之助（七郷）
19 鈴木久三郎（七郷）
20 太宰藤治（七ヶ濱）
21 小野清吉（多賀城）
22 佐藤長右衛門（多賀城）
23 伊藤長城（利府）
24 高橋養藏（利府）
25 吉田文三郎（鹽竈）
26 小野清吉（鹽竈）
27 藤勝三（鹽竈）
28 奥山多仲（大澤）
29 菅澤半左衛門（大澤）
30 天野新左衛門（大澤）
31 庄子喜藏（大澤）
32 官澤今朝五郎（根白石）
33 荒木忠治（根白石）
34 佐藤善太郎（七郷）
35 佐藤善七（七郷）
36 大山德治（利府）
37 今村常貞（多賀城）
38 佐藤長吉（多賀城）
39 今村禧壽（多賀城）
40 伊東清之助（多賀城）
41 鈴木平左衛門（多賀城）
42 阿部德右衛門（多賀城）

宮城縣選出衆議院議員



宮城郡選出宮城縣會議員

1 阿部源吉（鹽竈）
2 岩松亥之助（廣瀨）
3 若生德藏（根白石）
4 櫛渡幸三郎（根白石）
5 菊田繁（高砂）
6 芳賀重太郎（高砂）
7 芳賀重治郎（高砂）
8 高橋熊太郎（利府）
9 錦戸景訓（七北田）
10 青木存秀（松島）
11 宮澤清作（多賀城）
12 伊丹榮三郎（七ヶ濱）
13 山田正一（原町）

宮城郡會議員

宮城郡會議員

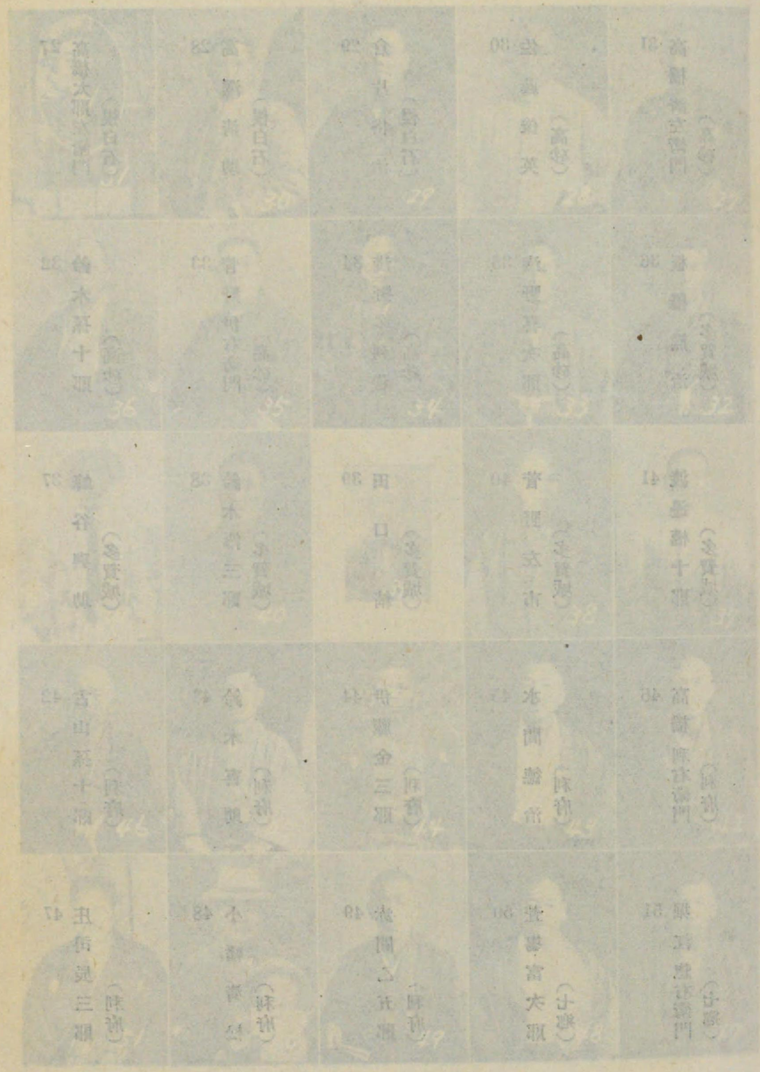
1 菅原德三郎（鹽竈）
2 菊地瀧太郎（鹽竈）
3 横田善兵衛（鹽竈）
4 佐藤一學（松島）
5 中村喜平太（松島）
6 大槻廣人（大澤）
7 伊東清兵衛（根白石）
8 庄子新藏（根白石）
9 鷲尾貞藏（根白石）
10 庄司德右衛門（七北田）
11 阿部襲吉（七北田）
12 鈴木長三郎（高砂）
13 平山平吉（高砂）
14 守谷德右衛門（高砂）
15 嶺岸權之助（高砂）
16 佐藤松三郎（高砂）
17 遠藤秀吾
18 菊池市之進（多賀城）
19 遠藤勘四郎（多賀城）
20 鈴木源一郎（多賀城）
21 阿部莊吉（利府）
22 阿部豐之助（利府）

宮城郡歴任町村會議員（其一）

宮城郡歷任町村會議員（其一）

1 栗野豐助（鹽竈）
2 三浦禎吉（鹽竈）
3 佐藤長藏（鹽竈）
4 崎野千代吉（鹽竈）
5 梅津操吉（鹽竈）
6 阿部龜治（鹽竈）
7 及川兵右衛門（鹽竈）
8 鈴木周吉（鹽竈）
9 境清之助（鹽竈）
10 大竹國司（鹽竈）
11 佐浦重次郎（鹽竈）
12 雫石運五郎（松島）
13 赤間清十郎（松島）
14 赤間壽喜治（松島）
15 内海惣三郎（鹽竈）
16 武田直助（鹽竈）
17 北條德三郎（鹽竈）
18 戸石李市（鹽竈）
20 早坂長三郎（大澤）
21 今野清左衛門（大澤）
22 大槻廣雄（大澤）
23 鴇田傳吉（根白石）
24 早坂政吉（根白石）
25 赤間幸治（根白石）
26 官澤權左衛門（根白石）

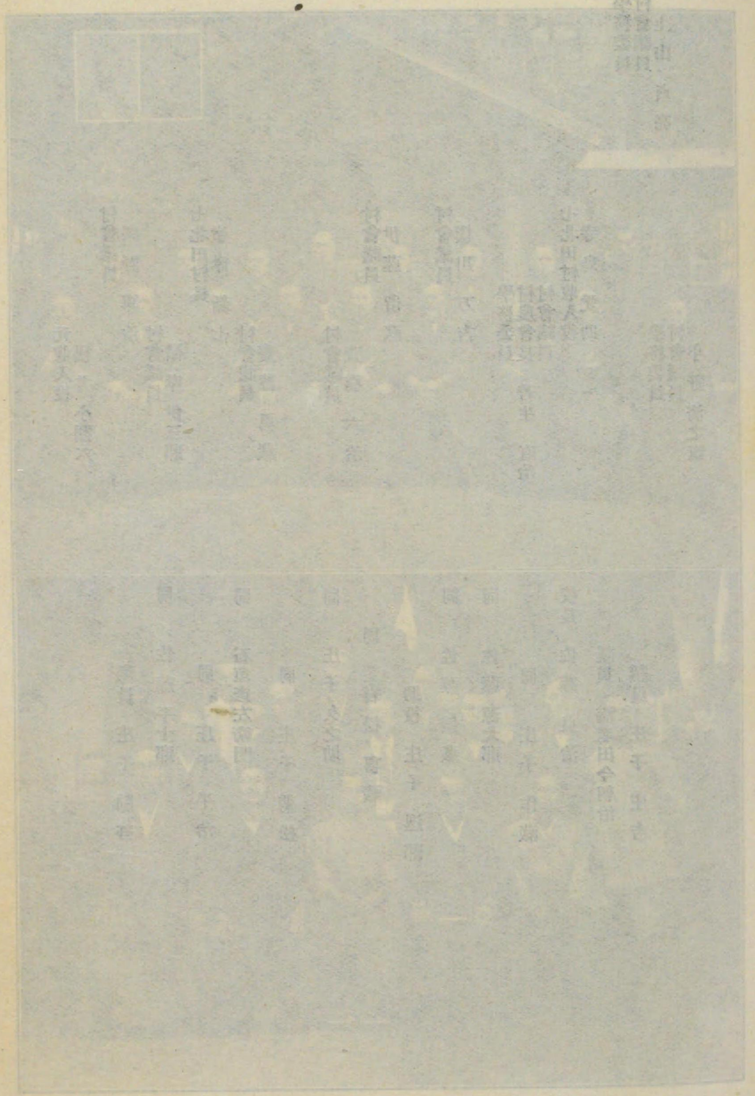
宮城郡歴任町村會議員（其一）



宮城郡歴任町村會議員（其二）

27 高橋太郎左衛門（根白石）
28 高澤清助（根白石）
29 倉片岱治（根白石）
30 佐藤俊英（高砂）
31 高橋清左衛門（高砂）
32 鈴木孫十郎（高砂）
33 菅野伊右衛門（高砂）
34 淺野多利藏（高砂）
35 淺野喜次郎（高砂）
36 板橋熊治（多賀城）
37 蜂谷與助（多賀城）
38 鈴木傳三郎（多賀城）
39 田口精（多賀城）
40 菅野左市（多賀城）
41 渡邊權十郎（多賀城）
42 古山孫十郎（利府）
43 鈴木喜助（利府）
44 伊藤金三郎（利府）
45 水間德治（利府）
46 高橋利右衛門（利府）
47 庄司辰三郎（利府）
48 小幡清松（利府）
49 赤間乙五郎（利府）
50 萱場富次郎（七郷）
51 堀江惣右衛門（七郷）

七北田村會議員



廣瀬村會議員

七北田村會議員

廣瀬村會議員

學務委員
村會議員
上山貞亮

村會議員
粟野軍治

元收入役
櫻井小圓太

七北田村長
嶺岸新七

村會議員
嶺岸伊三郎

村會議員
齋藤勇藏

村會議員
伊藤留藏

村會議員
萱場六治

村會議員
櫻川万吉

學務委員
村農會長
村會議員
若生直治

七北田村收入役
寺島愛助

學務委員
村會議員
小野清之亟

議員 庄子勘吾

同 佐藤平十郎

同 庄子平治

同 石垣彦左衛門

同 庄子菊松

同 庄子久之助

同 岩松喜藏

助役 庄子逸郎

同 佐藤儀藏

同 佐藤源太郎

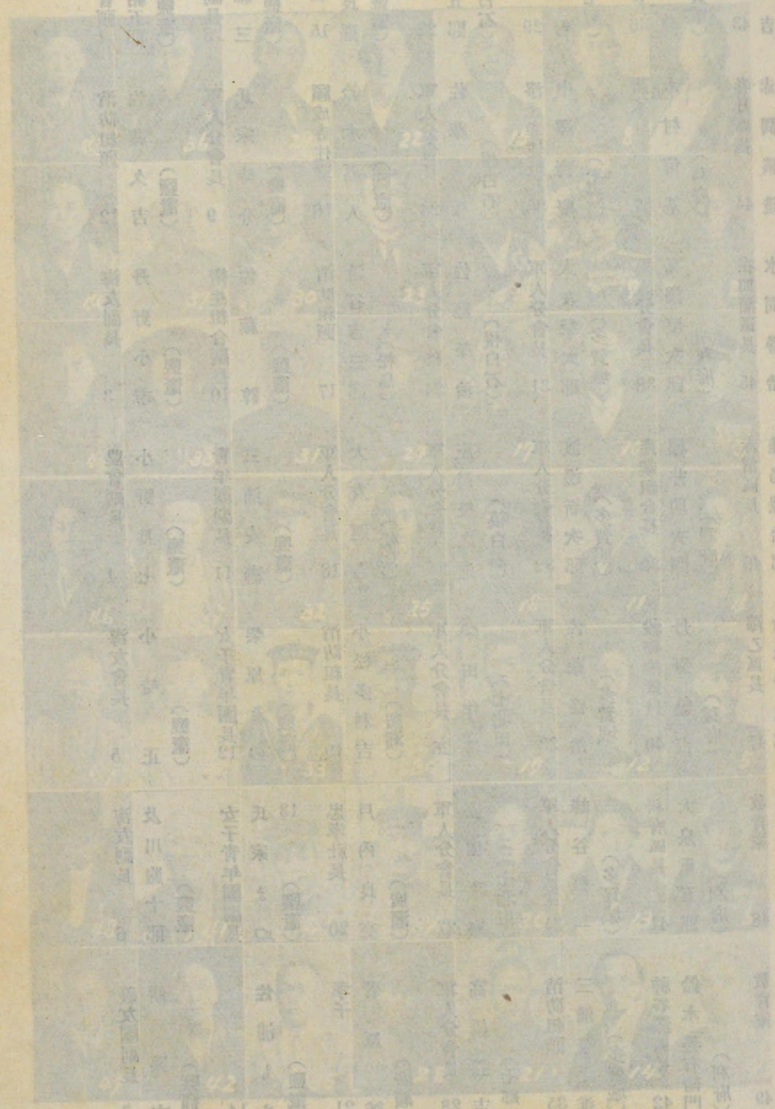
同 庄子作藏

校長 佐藤貞治

議員 海老田今朝治

議員 庄子庄吉

1 阿部勘九郎（龍竜）
2 齋藤彌市（龍竜）
3 添田武治（龍竜）
4 鈴木庄治郎（龍竜）
5 菊地平治（龍竜）
6 今野忠七（龍竜）
7 佐藤玉吉（龍竜）
8 淺野八三郎（龍竜）
9 鈴木忠助（龍竜）
10 鈴木駒之進（松島）
11 赤間彌兵衛（松島）
12 千葉清右衛門（松島）
13 畢石啓藏（松島）
14 佐藤喪吉（大澤）
15 奥山清之進（松島）
16 佐藤三五郎（大澤）
17 早坂幸太郎（大澤）
18 庄子治四郎（大澤）
19 佐藤甚左衛門（大澤）
20 結城平治（松島）
21 庄司勝右衛門（大澤）
22 菅原興右衛門（大澤）
23 早坂源左衛門（大澤）
24 小松米藏（大澤）
25 佐藤朝治（龍竜）
26 吉田榮五郎（七郷）
27 松川辰治（七郷）
28 堀井萬四郎（七郷）
29 菅野太左衛門（高砂）
30 佐藤長右衛門（七釜）
31 鈴木清次郎（七ケ濱）
32 仁田兵三（七ケ濱）
33 我妻長作（七ケ濱）
34 佐藤兵藏（七釜）
35 鎌田泰治（利府）
36 鎌田拾五郎（利府）
37 渡邊邊（利府）
38 大飼成弘（根白石）



公私の各種團體代表者及其の他

義勇團長會頭1　東海林祐五郎（鹽竈）
軍人分會副長8　中村福三（鹽竈）
雲上寺住職15　東海林良應（鹽竈）
消防組長22　川島富五郎（根白石）
消防組長29　遠藤龜吉（七郷）
教育後援會長36　松田賴興（多賀城）
嘗谷區長43　伊藤庄吉
消防組頭2　佐藤久吉（鹽竈）
軍人分會長9　氏家時介（鹽竈）
願成寺住職16　鈴木惠人（鹽竈）
軍人分會長23　佐藤幸作（根白石）
淨土寺住職30　中澤壽慶（七郷）
舊家37　木村信基（利府）
春日區長44　赤間儀造
海友副長3　農會副長4　丹野小市（鹽竈）
小野長七（鹽竈）
海友會長5　小崎正（鹽竈）
青年團副長11　三浦安壽（鹽竈）
軍人分會長18　大友運吉（松島）
消防組長19　小松多利吉（廣瀨）
軍人分會長24　佐藤榮治（根白石）
軍人分會長31　大友榮太郎（多賀城）
軍人分會長38　高橋恒次郎（利府）
在加瀨區長45　水間善治
海友副長6　及川胞十郎（鹽竈）
女子青年團長12　柴原その（鹽竈）
消防組頭17　漉谷吉三郎（松島）
軍人分會長25　庄司榮之進（根白石）
軍人分會長32　渡邊新次郎（多賀城）
軍人分會長39　櫻井助次郎（利府）
赤沼區長46　桂島豐治郎
義友團副長7　餅與市（鹽竈）
女子青年團副長13　佐浦もと（鹽竈）
孝子21　菅原誠（廣瀨）
軍人分會長28　高橋養吉（七郷）
消防組頭35　三浦榮之進（多賀城）
神谷澤區長42　鈴木善右衛門（利府）
教育家49　成瀨清人
軍人分會長27　安田琢磨（七北田）
軍人分會長34　蜂谷龜一（多賀城）
利府區長41　大泉重五郎（利府）
澤乙區長47　鈴木清太郎
教育家48　高橋文彌

例言

一、本書は地理・郡治・法制・産業・戰事・時變・教育・宗教・風習・史蹟・名勝・自治・人物を叙述し、十篇三十四章百十九節二百七十七項二百五十七目に類抄す。

一、編纂の企圖は大正三年教育會長早川智寛に創意し、九年清野喜左衛門に企及し、十五年糟谷哲郎之を繼ぎ稿を起し、昭和二年大宮司雅之輔に及びて稿全く成る。

一、提供の資料多くは大正九年に成る、教育會所定の編次項目に照らし、補遺を需るに日を期する急なり、故に精粗の差繁閑の異ありしも、提供者の苦辛を尊重するに努む。

一、本郡由來史蹟に富む、考古學上先哲所見を異にするあり、繁富の引用書目を轉載するは過去の史實をして闇明せしむるに在り、敢て獨自の所見を好むに非ず、唯た姑らく附して來哲の采擇に供ふ。

一、教育會前會長糟谷哲郎、現會長大宮司雅之輔、前副會長木村元、現副會長石川一壽、高橋與一各士の指導濱島測候所長並に各種學校長及自治當局者援助を始めとし、秘藏の古文書等を寄與せる永野榮助、山下三次、山路清一、大宮司雅之輔、木村信康、鷲尾榮吉、遠藤勇治郎、小西九兵衛諸彦の芳志を特に深謝す。

昭和三年七月

宮城縣史蹟名勝天然紀念物調査委員
宮城郡誌編纂主事　梅森三郎識

宮城郡誌

目次

卷頭

題字　前總理大臣　高橋是清閣下
同　前商工大臣　藤澤幾之輔閣下
序文　雨香　鈴木省三
同　宮城郡教育會長大宮司雅之輔
同　前宮城郡長　糟谷晉郎
同　非想　藤原相之助
同　東北學院教授　清水東四郎
口繪　寫眞銅版五十餘頁
附圖　宮城郡圖

卷末

跋　篁洲今泉寅四郎

第一編　地理……一

第一章　位置・疆域・面積・廣袤
第二章　地勢・山岳・河川・池沼・井泉・島嶼・暗礁
第三章　土性・鑛物・鑛泉
第四章　測候所・氣候・氣溫・雨量・霜雪
第五章　土地・田制起因・田制改廢・檢地・地券發行・地押・開墾・土地臺帳・土地調査・地目別官民有地・耕地整理・用惡水及冶水・品井沼組合
第六章　交通運輸・道路・水路・軌道・橋梁・渡船・車輛・船舶・通信
第七章　住民・先住民族・種族・民族の變遷・姓氏・典範・階級・華族・士族・戸籍・戸籍法の創始・古今の戸口・國勢調査

第二編　郡治沿革……一九三

第一章　郡國移動・上古の疆域・大化の郡縣・宮城郡の建置・國史に著はる宮城郡・郡名起因・宮城郡鄉
第二章　統治府・將軍・國司・任官・多賀城府・多賀國府・職官・按察使・押領使・郡司・庄司・守護地頭・留守職・仙臺藩職制・統治府・地方廳・式例
第三章　明治維新・王政復古・維新の庶政・鎭撫總督松島上陸・仙臺城の受授・版籍奉還

第四章　行政●廢藩爲縣●郡區編制●郡區町村編制●町村編制●區町村制
第五章　議政●會議●地方官會議●府縣會●郡會●町村會
第六章　警備●警察●派出所及駐在所●消防●衛生
第三篇　法制經濟……三六四
第一章　稅制●租●庸●調●藩制の租法●貢米●夫役●雜稅●維新の課稅●課稅改革●課目●稅目●國●縣●町村稅●組合費
第二章　公有財產●種目●町村基本財產●區有財產●小學校基金財產●區有備考儲蓄外四種
第三章　經濟●藩制●兩替所●藩札●鑄錢●貸借●利子
第四篇　産業……四一五
第一章　藩制●勸業●買米●生産と消費
第二章　明治維新●産業政策の變遷
第三章　殖産興業●縣の施設●郡の施設●蠶業●林業
水産●畜産
第四章　商業●工業●釀造一班
第五章　産業諸會●宮城郡農會●町村農會●部落養蠶組合●水産會

第五篇　戰事時變……五六一
第一章　戰事●王朝●鎌倉時代●吉野朝●室町時代●安土桃山時代●江戸時代●明治維新●奥羽の動亂●鹿兒島の亂●清露獨の役●戰病死者●殊勳者及閱歷●戰役記念碑●公共團體
第二章　時變●凶荒●記錄●明治二十二年洪水●明治三十八年の凶荒
第六篇　史蹟名勝……七一七
第一章　聖蹟●東北御巡幸●御野立所●行在所●御小休所●大演習
第二章　史蹟●調査物名●多賀城府址蹟●古城●神社佛閣の址●墳塚●碑碣●多賀城碑●燕澤碑●賴賢碑●古碑一班●五大堂●觀瀾亭●一本亭●天然記念物●植物●公孫樹●名木●洞窟●岩窟佛●洞窟一般●國府厨印●雜器●多賀城址瓦●起源●窯址
第三章　名勝●海濱諸勝●松島●地勢●指定●溯源●公園●保存●鹽竈●地勢●探勝航路●築港●鹽松の江山●四大觀●浦戸●七ヶ濱●七浦●八崎●八島●雜觀●浴場●菖蒲田●代ヶ崎●桂島●高山海水浴場●山嶽諸勝●瀑布●温鑛泉●作並●定義●澤乙●鑛泉一班●名所古跡の概般

第七篇　教育……九三四
第一章　維新前●藩制●四民教育●町村
第二章　維新後●小學制度●學制●學區●創立●教育令●綱領●改正令●小學校令●要綱●區域變更●教育概要●制定一班●教員●兒童●教育費●小學校●尋常高等●尋常●分教場●實業補習學校●家塾●裁縫●幼稚園●社會教育●青年團●處女團●圖書館●教育會
第八篇　社寺宗教……一〇〇五
第一章　神社●起因●本地垂跡●定額●定則●式制●國幣中社志波彦神社、鹽竈神社●鄉社靑麻●八坂●八幡神社●村社町村別
第二章　佛閣●寺院、曹洞●臨濟●淨土●天台●眞言●黄檗●眞宗●堂宇町村別●宗教諸會
第九篇　町村處誌……一一三
第一章　沿革●町村別
第二章　風俗●習慣●冠婚●喪祭●年中行事●農業休日●俗諺

第十篇　古今人物……一二九一
第一章　總說
第二章　古今の旌表●藩制●現代●町村別●原町……一一九四●鹽竈……一一九九●廣瀨……一一一三●大澤……一一二〇●根白石……一一三九●七北田……一一五二●七鄉……一一六〇
高砂……一一六六●七ヶ濱……一一七二●多賀城……一一七八●利府……一一八九●松島……一一九七●浦戸……一二一八

宮城郡誌

宮城郡教育會　編

第一篇　地理

第一章　位置・疆域・面積・廣袤

第一節　位置

宮城郡は宮城縣の中東部に位し、原町・鹽竈町の二町及廣瀬・大澤・根白石・七北田・七郷・高砂・七ヶ濱・多賀城・松島・岩切・利府・浦戸の十二ヶ村を抱擁し東經百四十度五十二分、北緯三十八度十四分に在り

第二節　疆域

東は太平洋に直面し、西は仙臺市その中間に介在し、山岳聯亘して山形縣に境し、南は名取郡に隣し、北は黒川郡に又北東の一端は志田、桃生の二郡に接す。而して四極の地名を擧示す左に。

東　松島町竹谷、西　廣瀬村作並、南　七郷村南小泉、北　七北田村七北田。

聞老志。(奥羽觀蹟聞老志の略、以下之に倣ふ)宮城郡。東限松島都島。西限青葉川。南限松岡湊。北限寒河山。風土記。(封内風土記の略、以下之に倣ふ)宮城郡。東限海。西隣羽州界小新川山●大峠●風倉山●寒加瀬山●奥川子山。南連名取郡。北跨黒川●志田●桃生三郡。

宮城縣地誌。東は大平洋に接し、及び本國桃生郡遠田郡に隣し、石ヶ浦●富●熊野●君ヶ森●冠木●大澤諸山の嶺上、又は鳴瀬川中央畦畔を以て界し、西は羽前國村山郡に隣し、水上山●風倉山●仙臺駕籠山●舟形山嶺上を以て界し、南は本國名取郡と水上●滑口青獅子坂●中●大武●鹿埋●北小齊●芦見●三ツ栗●栗生諸山の嶺上、郷六山南麓、同郡の野川北岸、小川西岸、廣瀬川藤田堀中央、或は畦畔を以て界し、北は本國黒川郡志田郡に接し、坊主ヶ岳南半腹、泉ヶ岳北麓、蘭山●永倉山嶺上、升瀧川中央、鷹繋山東麓、蛇石山堂庭山嶺上、石倉山東麓、寺●天神●横前●中峯●番ヶ森●長岫●西●境岫●番境田●備中●待鴛諸山の嶺上、東山の西麓品井沼水面小川中央を以て界とす。

第三節　面積及び廣袤

面積總て四十二萬方里九二にして、平均一方里の人口、二千百五十六人強(第四十一回宮城縣縣治一班昭和二年十月發刊)而して東西二十里二町、南北四里三町三十間餘。

風土記。東西百二十里餘、南北二十七里餘。(編註、古制の里程。三十六町を大路一里と云ひ、六町を小路一里と云ふ。)

第二章　地勢・山岳・河川・島嶼

第一節　地勢

東方の一帯は外洋に面して濱浦相連り、西は仙臺市その中間に介在し、山嶽聯亘して山形縣を劃し、南は名取郡に接し、北は黒川・加美二郡に界し、北東の一端は志田・桃生二郡に跨る。山嶽西境に起伏して其最も高峻なるものを、船形山・白髭山・泉ヶ嶽・寶森の四山とす。廣瀬川は源を廣瀬村字作並に發し、大澤村字大倉より發する、大倉川と廣瀬村字落合に會し、仙臺市の西南を繞り、名取郡中田村字落合に於て名取川に合し、名取郡閖上濱に至り海に注ぐ。七北田川は根白石村字福岡より來り、郡の中間を貫流し高砂村蒲生に至りて海に注く、之を郡内の二大河川とす。西北の二面は群山重疊圍繞して耕耘に適せず。住民概ね養蠶・饒にして米麥穀菽に適す、即ち利府耕土と稱へ其名最とに著る。東部外洋に面する一帯の部落は、漁撈を以て主業とし漁獲極めて多し、北方松島町の東端より、七ヶ濱の西北端に至る間、遠く鹽竈に凹入して一大灣形を構成す、之れを總稱して松島と云ふ。灣内奇岩珍松より成る、數百の島嶼ありて絶景言ふべからず、所謂る日本三大景の一なり。郡の重要物産としては、米・麥・水産等にして、養蠶之に次き民業日に盛に殖産興業の前途頗る有望なり。鹽竈町は人烟最も稠密にして海陸の便に富み築港工程日に進捗して貨物の集散、商業の隆盛推知するに足る。(參照第九篇町村處誌)

宮城郡地誌。東　海に面す、海口屈曲灣をなし、代ヶ崎・其他は羽前の村民負荷して聊か運輸す。南は廣瀬川を帶ぶ七十里崎尤も突出す。西は連山險隘運輸不便車馬通ぜず、唯牛のみ達し川を帶ぶ。北は概ね山岳を負ひ路亦山に沿ふ者多しと雖も、車馬の運輸不便とせず、東海濱に至る稍平坦田野にして運輕便なり。

仙臺史料卷之七。宮城郡。西村山郡。(山形)北加美黒川志田遠田四郡。南包仙臺區接名取。東太洋。東北桃生、村落七十九。戸口八千・人口五萬三千二百。西北重巒。東南原野。所謂宮城野者。東北海灣浸入。群島羣列。駕籠水山二山繞國境。山脈南走。其通山形。曰作並越。舟形山聳西北隅、跨黒川加美兩郡。其峠東南。曰白髭山。更東峠仙臺西北者。曰泉岳。皆著名高山。廣瀬川源于水上(作並)舟形二山(大倉)至大倉半澤村界。合流。經仙臺入名取郡。七北川一名冠川。源于泉岳。東流至蒲生入海。砂押川源于菅谷村。至市川村。合名古曾川。稱市川。至大代村注海。高城川源于品井沼。至高城。南注松島灣。鳴瀬川來自志田遠田兩郡界。至竹谷村。並品井沼下流。界桃生郡。南注。花淵岬突出松島灣。包桂島寒風澤松島野々島。與東名岬。相對。其西北斗出岬。曰代崎。

石濱桂島寒風澤。皆宜繫泊。鹽竈一稱千賀浦。距廳下四里。市街繁華。戸口六百。人口三千四百。鹽竈神社。合祭志波彦社。爲國幣中社。松島在鹽竈北一里。數百島嶼碁布。風光明媚。與嚴島天橋立。稱日本三景。巨刹曰瑞巖寺。多賀城趾。在市川村。有古碑。作並溫泉。浦出於溪澗上。浴客常盈。其東南瀑布。曰鳳鳴。原町利府高城三驛爲石卷道。愛子熊根作並三驛。爲山形道。物產米、雜穀、生絲、木綿、節、鹽、石花菜、昆布、海苔、鹿角菜、若和布、魚糟、牡蠣、海魚、炭、薪、馬。

第二節　山岳

【船形山】本郡大澤村の西北隅にあり、海拔四千九百五十一尺、登口より一里二十町、本郡第一の高山にして、四千三百尺位より灌木帶となり、漸次頂上に至りては全く草苔なり。頂上に御所山神社を祭る、又陸地測量部の大三角點あり。昔時御山詣と稱し、最上三山と共に靈山の一として賽者多かりしも、今日は昔日の如きにはあらずと。大正元年大倉の人、結城三右衛門私費を投じて道路を開鑿し、登山の賽者に便宜を與へしと。定義如來より頂上へ五里餘。

縣治一班、宮城郡大澤村にあり、海拔四千九百五十一尺、登口より一里二十町。

宮城郡地誌。舟形山。或は船岳五所山。遠船原山ともいふ。高三百七十丈、周圍六里。本郡の西北方にあり。羽前國村山郡鶴子村同郡關山村、本國加美郡小野田本鄕、本郡大倉村に跨る。

白髭山。高二百五丈、周圍二里三十一町。本郡の西北方にあり。

泉ヶ岳。一名根白石山。高二百丈、周圍四里。本郡の西北方にあり。大倉村福岡村に亘る。

宮城縣々治一班。船形山。宮城郡大澤村にありて、海拔四千九百五十一尺、登口より一里二十町。

泉ヶ嶽。同郡根白石村にあり、白石嶽又は旭山と稱し、海拔三千八百六十一尺、登口より三里。

名跡志。泉ヶ嶽。山岳形勢跨府城西北。峻極與刈田高岳相低昂。巖々甲國府。群山圍繞。曰之萱原嶽。又曰泉岳。相傳昔賴朝卿東征時。過山下河邊。有白石。倚此休焉。以賞戰功。土人呼其地。稱判在家。所以與感狀印璽于此也。自是後人往呼根白石。時之巨石今已亡。屏風カ嶽。山勢如屏風。壁立萬仞。傍有權現祠及別當。曰鷲倉山松林寺。相傳推古帝。養老二年經營之云。

【白髭山】大澤、大倉村西部山形縣に跨り、海拔四千二百三十七尺。山上方三町餘の地盤に、粟に類似せる奇草繁茂し、遠く之を望めば粟畑の如し、方人之を「チカラクサ」と云ふ。

楠峰及び仙臺駕籠山は、白髭山と共に鼎立相近し、前者は海拔三千九百九十三尺、後者は三千九百尺。共に岩石を露出す、駕籠山は籠を倒にしたる觀あり、故に名づくと。

陸奥風土記。宮城郡國分大倉村にありと、高山なり。此山の木を伐者あれば、山あれ氣候亂れて、なり物みのらず。

【寒風山】本村の西隅山形縣に跨り、海拔三千六百八十六尺。共に分水嶺をなす。

【後白髭山】大澤村に獨立せる高山なり。船形山脈の東方に走り、黑川郡の境に到りて蛇ヶ岳を成す。之より一鞍部をなして更に岐れて二派となり、恰かも左右の羽翼を一は急に一は緩に振展したるが如し。東方に面して走り聳立して三峰山と成り、南方に奔りて峙起するは即ち後白髭山なり。海拔四千六百九十二尺。山中赤倉澤に七福神岩の奇觀あり、又山腹の密林に上沼あり、其の水清灑に、四隣鬱蒼、幽邃の氣橫溢。

【高倉山】寒風山の支脈が東方に分岐し走る即ち高倉山脈なり。海拔三千三百尺。中に蕎麥倉山橫倉山賢倉山等の連峰あり、時人稱して大倉の五岳と云ふ。

【高柵山】本村の中央大倉川の北岸に聳峙す、海拔一千四百二十四尺、麓に天狗橋の奇觀あり。北に列峙するもの即ち大平山なり、近海漁舟航行の目標なりと云ふ。

【泉ヶ岳】根白石福岡村にあり。泉ヶ岳の西北に袖泉岳あり、二ツ岳の別名あり。西北は黑川郡吉田村、西南は大澤村に跨り、海拔三千餘尺、那須火山脈に屬する舊火山系にして山容優美。山頂に三吉神社の遙拜所あり、其の西約三十

間の所に小池あり、四時水の絕えたることなく清洌齒に泌む。全山雜草・茅・萩を生ず。毎年九月下旬より十月上旬の間、萩刈と稱し村民擧て此山に登り、約一週間馬糧を刈取る。其狀戰爭の如しと。

縣治一班　宮城郡根白石村にあり。白石嶽、又は旭山と稱し、海抜三千八百六十一尺、登口より三里。

【寶森】　泉ヶ岳の北にある支山にして其の狀笏を伏せるが如し。【荒薙山】も亦支脈にして寶森の東北にあり、海抜一千尺餘。雜草・茅・萩を生ず。【風屛ヶ岳】福岡區にあり、南に面する部分は嶮峻にして、頂上は馬の背の如く稜立し、山容恰も屛風の如し。

陸奥風土記。屛風嶽。宮城郡福岡村にあり。和泉嶽。同嶺根白石村に在り、俗人根白石岳と云。又二つたけ共いへり、峯二ある故なり。

觀蹟聞老志。和泉嶽。在嶺白石村。山岳跨府城西北。峻極與刈田高岳相低昂焉。山勢甲國府。群山圍繞此山下。俗人呼曰嶺ノ白石嶽。

【水上山、關山峠】　廣瀨村奥羽山脉中にあり。【沼山】作並にあり、頂上遙に海上を望むを得べし。大勢澤山檜倉山鎌倉山經廻山あり。大森小塚岩俵前山箱倉の五山は上愛子の南境にあり、御殿山は上愛子にあり風景佳なり。

【盤山】　伴山・番山に作る。西盤山東盤山中盤山の三峰に分かる、共に愛子の南境に在り。西盤山、別名蛇體盤山と云ふ、旱魃の時龍を造りて山に登れば雨降ると傳ふ。中盤山。別名上鳥屋山と云ひ、東盤山を綱木山と云ふ。登ること十八丁にして頂上に達す。頂上に雲居生前の禪室と、歿後の塔所あり常寂塔と號す。

風土記。下愛子邑。山凡三。其一號西盤山。傳曰旱時造龍登山。雩則雨降。若爲霖霪則引下彼龍方山中。號太郎坊瀑布。則雨晴。其二號中盤山。高山也。或曰上鳥屋。其三號東盤山。頂上。本郡與名取郡之界。而有雲居和尚影堂。以上三山。總有九十九谷云。

陸奥風土記。磐山。仙城の西に在り、寺を大梅寺と云ふ。山上磐次郎兄弟の像を置く。

【國見峠】　七北田村西南、大澤村に跨る。本村に屬する一部は海抜七百七十五尺。又七北田川の南岸、上谷刈の南より荒巻に連亘せる山脈あり海抜四百五六十尺を示す。其他岩切村に接し、松森館は海抜二百五十尺、岩切村及黒川郡富谷村の境界に海抜三百四五十尺の連峰あり。

【韮ヶ森】　七ヶ濱村菖蒲田濱阿川沼の北に突立し、海抜三百尺周圍五丁餘。稚松地心石にして其の質柔ならず堤防用に使用す。頂上尖突座するを得ず。石祠あり。稚松密叢、阿川沼と共に亦遊觀の一勝地なり。

【高山】　同村花淵濱の西南にあり、海抜百二十尺。松樹疎に生じて外人の避暑地。【大山】。海抜百八十尺。【吼坊崎山】百尺、前者は區の西に、後者は東に孤立。其他吉田濱に長山・大林山・小松山は、區の西に孤立し各百四五十尺にして皆松樹茂かりき。代ヶ崎に多聞山あり。（參照第六篇第二章）

【番ヶ森】　利府村、春日の北部黒川郡界に跨る。海抜六百九十五尺、村内最高の丘陵にして、頂上に陸地測量部三等三角あり、近海漁船航行の目標となる。【鷹戸屋山】。利府上野館の北方にあり、海抜五百八十六尺。村内第二の高峰なり（參照第六篇第二章）

【富山】　松島村手樽にあり。（參照第六篇第二章）

陸奥風土記。富山。宮城郡小泉村に在り。松島の東二里計にあり、寺あり大仰寺といふ、觀音あり大同年中田村麻呂三觀音を建つ牧山・筆嶽此地となり。松島の景は富山にありと、鄕人もいひて松島の群島一望の中にあり、又東南の諸島よく見ゆ。

熊耳峯並鷲嶺。松島の西南海無量寺の上に在て相對する嶺なり、鷲嶺は鷲尾大明神の社あり、櫻岡なといふ有り、こゝに五葉庵と云あり、熊耳峯には大子堂あり、金翅堂といふは大子堂の東に在り。

【日和山】　（浦戸村）　大平・戸山・愛宕山・大森山・平森山・黒森・津森等の小山脈連亘して高山と稱すべからざるも滿山一帶松樹密生し航海者の目標となれり。

【一森山】　（鹽竈町）　海抜百二十五尺。南に【江尻山】海抜百尺。【御殿山】海抜百尺。西に【權現堂山】海抜百十尺。

東に【稻戸山・雷神山】海拔九十五尺の丘陵あり。陸奥風土記。奥鹽山。鹽竈の御竈社の前町を白坂へ登り、南の山をいふ。江尻山。江後山共書、同西町の南なる高岡をいふ、岡上の眺望鹽竈第一の風景なり、丘上に菅神社・稻荷・愛宕の社あり、岡の半段に烟波亭あり、芭蕉碑を建つ。

第三節　河川

【廣瀨川】源を陸羽の境界なる、船形山の鏡ヶ池より發し、東流して湯川・砂押川・横川等の諸川を合せ漸く大川となり、大倉の中央を貫通し、高柵山の麓を環流して館下橋發電所に至り、南折して大豆澤川に合流し、名取郡秋保村字白澤に至り作並川と合し、東流して廣瀨川となり仙臺市を過ぎ、名取郡中田村袋原に至り、名取川に合流して海に入る、河口を閖上と云ふ。

芋澤川。源を大倉の山中、大清水より發し、芋澤本澤の中央を貫流し、廣瀨村落合に至り廣瀨川に合流す。本澤地方灌漑の水源にして延長三里餘。

宮城郡地誌。廣瀨川、二等河に屬す。二源あり、一は本郡作並村水上山より發し、同村風倉山の溪流を合し、東南に流れ、名取郡新川村長袋村を經て東流し、本郡熊根村と大倉村界に至り、大倉村沼山の溪流を合して、舟形山より出る源流と會し一となる。一は大倉村舟形山に發し、同村白髭山の溪流を相會し、東南に曲流して芋澤村界に至り熊根村より來る源流と合して一となり東流し芋澤村上愛子村下愛子村鄉六村荒巻村を經て、仙臺城の北東を過ぎ屈曲、名取郡長町村郡山村と、本郡南小泉村の界を流れ、名取郡飯田村に至る。

陸奥風土記。廣瀨川。仙臺城の下を流るゝ川なり。源を宮城郡大倉村大舟山の麓より出て、同郡熊臥村（今の熊ヶ根）に至り名取郡新川村の溪流と合て、愛子村をへて仙城の下を流れ、末は名取川と合て閖上の海に入る。

東鑑。文治五年。泰衡樺壘于刈田郡・湛水流于名取廣瀨。爲要害之地。

封內風土記。上下愛子邑。愛子川。源出自本郡大倉邑巨舟山・而歷名取郡新川村。本郡作並邑。與名取郡長袋邑野川會。末流乃仙臺川也。又大倉邑。川一。大倉川。末流乃仙臺川也。

宮城縣々治一斑。廣瀨川。源を宮城郡廣瀨村より發し、仙臺市を貫き、名取郡六鄉村に至り名取川に會す。流域十三里。

【七北田川】別名冠川（神降川に書す）また今市川の稱あり。水源を二とす共に根白石村にあり、一は泉ヶ岳の東麓唐澤より、一は泉ヶ岳の東北荒薙山の麓より發し、福岡川崎に至り二流會合して東流し、更らに二三の澗水を注き、實澤より七北田村岩切村を貫流して海に注く。

縣治一斑。七北田川、冠川と稱す、源を宮城郡根白石村に發し、高砂村に至り海に入る。流域八里。

宮城郡地誌。七北田川。一名冠川、又今市川、二等川に屬す。源を福岡村（今の根白石村福岡區）に發し、東流し福岡川を合し、其より東南に曲流し、朴澤村根白石村小角村を經て、實澤村に至り芋澤村の溪流を合せ、古內村上谷刈村野村七北田村市名坂村松森村鶴谷村岩切村新田村田子村福室村中野村を貫流し、蒲生村に至て海に注く。

陸奥風土記。七北田川、末を今市川といふ。源は二所より出。其一は宮城郡國分福岡村泉ヶ嶽より出、其一は同國分朴澤村あらき山の麓より出、福岡村の中川崎といへる所にて落合一筋と成、七北田驛の南を流、岩切川となり今市の町の北を過、此邊より今市川と云、蒲生濱へ落、其間福田町を過て海へ入る。今市の邊にて又冠川と云、是は神降川なりと云り。

封內風土記。川一。根白石川。源出自本郡福澤。朴澤之山壑。末流即今市川也。

【砂押川】市川の上流なり、源を利府村賞谷・澤乙の西部に發し、東に流れ更に南に折れて、多賀城村市川に至り、名古曾川を合し更に市川となり、南流して東田中村に至る。此の邊を八幡川ともいふ。笠神村八幡村を流れ大代村に至り、船引堀を合して海に入る。

【名古曾川】 源を利府村森郷●春日の北部に發し、森郷に至り西に折れ町浦の南を過き、南流して市川に至り砂押川に合流す、流程凡そ一里二十八町。

【高城川】 高城川、浦川又山王川の異稱あり。源を品井沼に發し、松島村高城市街の南端に沿ふて松島灣に注く。元祿六年起工せり。幅員三十間延長一千八百間。

宮城郡地誌。高城川三等に屬す。滿潮最深八尺最低五尺、最廣三十七間最狹十八間。緩流にし濁醪舟筏通す、堤防あり根廻村より來り、南流して海に入る、其間二十町十八間。

封內風土記。浦川。源出自志田郡品井沼。而至本邑入海。傳云。東山帝元祿七年鑿之、引品井沼要水。

風土記御書出。山王川。水上は志田郡品井沼にて、高城畑谷潛穴より當村山王村に流來り申候事。

鳴瀨川流域河川調査書。高城川は源を宮城郡松島村字幡谷品井沼の南端より發し、約九百六十間の水路を經て、同宇明神崎に至り潛穴に達す。其潛穴は水路二條に分れ。南微西或は西南に向ふ、其長千四百十八間同村根廻字山王前に盡く。潛穴中處々に縱橫廿一個の穴あり以て泥埃淩渫の便に供す、同所より更に高城驛の西端を過きり磯崎に至る、延長千六百八十八間の露渠を高城川と稱す。即ち潛穴及露渠を通算するときは、總延長四千六十六間にして松島灣に注くものなり。

【田中川】 源を松島村櫻渡戶の溪谷に發し、初原に流入して更に高城に入り愛宕橋附近に至りて高城川に合流す。

【新河】 高城川の西方石田澤の新川は、大日●高山の間を流れ、高城町裏に達して高城川に合流す。

【小川】 源を品井沼に發し、東に流れて松島村竹谷に至りて鳴瀨川に合流す。

鳴瀨川流域河川調査書。小川は志田郡鹿島臺村字大迫地內にて品井沼より出て東流して、約千二百五十間の水路を經、宮城郡松島村字竹谷に至り鳴瀨川に入る。然れとも鳴瀨川高水の場合は却て同川の水を逆流せり。

【御秡川】 御秡川、安永年間（距昭和二年一五六）飲料水を供給せんがため、鹽竈市街を距る西方七町餘利府村の境界泉ヶ澤の堰堤を源泉池とし、杉坂西町の南裏を經、新町門前を通過し灣に注く。延長十五町。（參照第十篇）

【藤川】 上流を梅田川と云ふ、原町小田原より出つ。

封內風土記。小田原邑川一。梅田川。源出自玉田清水及本邑處々之澤。末流號藤川。會本郡苦竹邑平渡戶川。苦竹邑川凡二。平渡戶川。自國府六番町流來。會福田町川。藤川源出自本郡小田原邑。號梅田川。原町風土記書上。平渡戶川。水上は國分鄉六村の內四ッ谷より出、當村壇平渡戶と申所へ流來申候事。流入、宮城本郡田子村福田町川へ落合候事。

藤川。水上は國分小田原村梅田川にて、當村境手代山と申所へ流來申候事。末水は當村境荒所と申所より。平渡戶川へ落合申候事。

第四節　池沼及び井泉

第一項　池沼

火山系の山脈は西北に連亘し、有史以前の噴火は姑く措き、有史以後に於ける噴火の史實として徵するに乏しかるべきも、泉ヶ岳に連る桑沼●陸沼の如きは、噴火口の遺趾と推定し得らるべし。又平地々帶に存在する大沼●細川沼●阿川沼等の如きに在りては、天變地妖に基因し、流域の變替により自然の瀦水池型を構成するものあるべし。其の他特に灌漑用水を主とする人爲的加工の池沼各所に散布す。各町村に就き主なるものを列擧する左の如し。

【原町】 清水沼は町の北裏手にあり。傳へて天正年間伊達政宗卿岩切館攻擊の時、此の沼の端に立ち、不圖水面を臨みしに、公の軍容顯然として水に映じて勇壯なりしかば、大に喜び水の清きに因み「清水沼」と名づけしと云ふ。周圍三町三十三間二尺、昭和二年十月浚渫工事を起し、遊園亭樂の池沼に造化すと、與平堤あり、周圍七町三十三間二尺

【鹽竈町】 泉ヶ澤堤。明治四十五年五月上水工事の竣工の後ちは、水道堤を築き東方の一半は水田となり、西半面積二反二畝一步の水面のみ、灌漑に專用せり。袖の田堤、別名野田の玉川堤。市街の西南にあり、面積一町六反五畝十一

歩。大堤。別名花立堤、市街の南東尾島圍にあり。附近小堤を築く四個倶に灌漑用水。藤倉溜、市街の北東海岸にあり面積二町八歩。尾島溜。市街の東南海岸にあり面積六町一反二十八歩。越の浦溜。市街の北端吉津にあり面積一町六反三畝廿六歩。

【大澤村】石沼。大倉日向區矢籠にあり、周圍九百間餘。往昔鮒・鰻等多かりしも、近年一角崩潰して乾水し、僅かに形跡を存するのみ。蘆毛沼。大倉字夜盜澤にあり、周圍五百餘間。大ならざるも甚だ深く鮒・鰻等生棲す。明治三十四年芋澤上川前の住民工を起して灌漑用に供せり。松倉堤。大倉日向區松倉にあり、周圍五百餘間。近年養魚を試む日向區字中通の灌漑に供す。銅屋原堤。芋澤字銅屋原にあり。

【根白石村】石坊沼。福岡區蒜但木の西石坊にあり、周圍五町餘。鮒を產し丈餘の蘆自生す。桑沼。福岡區寶森の西、泉ヶ岳の北麓にあり、周圍一里餘。周圍は恰かも岩石を以て疊み上げたる桶の側の如し、水深測り知るべからず、水淸くして止めず、四圍の樹影水面に映じて神幽仙境と怪まる、噴火口の遺骸ならんか。其の狀桑葉形に似たり、桑沼の稱亦爰に因す。河鹿・井守多く住む。陸沼。泉ヶ岳の山腹に在り、周圍十五町餘、茅蘆は周圍に生ず。炎天續くときは水涸れ陸となり、降雨續けば洋々たる沼となる。里人稱して陸沼と名づくも所以なきにあらず。

【七鄕村】大沼。荒井の東北にあり、周圍里許。其の他長沼、河戸沼、葦沼、赤沼等あり。赤沼は蓮多く初秋滿開の候風色賞すべし。鮒・鯰・鰻・蝦等を產す。

【七ヶ濱村】辨天沼。湊濱西方にあり、東西一町十八間南北三町三十七間、周圍十二町十六間、深サ四尺。形狀稍圓形を爲し、沼中一島あり天女島といふ、天女祠あり。鰍・鮒・鰡・鰻等を產す。附近耕土の灌漑に要する水源池なり。又附近に、細川沼あり、東西五町南北二十間周圍十五町五十二間、深サ三尺。

阿川沼。菖蒲田濱の北方三町の處にあり、東西一町二十間南北四町、周圍十六餘町、形狀烏帽子に似たり。秋冬の期鴨獵に宜し、附近二十町歩餘の灌漑に供す。花淵濱に、三月田堤・上五月田堤・下五月田堤あり、又吉田濱に、谷津溜・山田・籠山・溜池あり、又東宮濱に、坂下沼・糖塚沼・團子沼あり、共に附近水田の灌漑の天然水源池なり。

【多賀城村】加瀨沼。村の北部奏社宮の後にあり、周圍一里面積約四十町。萬治年間八幡の天童氏伊達家に請ひ水源涵養池として築きしと云ふ。現時本村及利府・鹽竈一町二村の共有にして灌漑用水に供す。鮒・鰻・蝦の漁獲及び菱の產額頗る多し。八合堤・花立堤は笠神にあり、共に水田の灌漑に供す。

宮城郡地誌。(作並村)大沼。東西五町三十間南北四町二十間周圍十九町四十間、村の東北方にあり。天沼。東西五十間南北八間二尺周圍二町三十八間、村の東方にあり。小沼、東西二十間南北四十間周圍二町十間、村の東北方にあり。(熊ヶ根村)赤澤池。東西三十五間南北二十間周圍一町五十間、村の北方に在り。松林池。東西十五間南北十間周圍五十間、村の西方に在り。(上愛子村)志田池。東西一町南北一町四十間周圍五町、村の西方にあり。新志田池。東西五十間南北三十間周圍三町、村の西方にあり。濟勝池。東西一町南北一町四十間周圍五町、村の南方にあり。西原池。東西十五間南北二十間周圍四町、村の西方にあり。大淸水池。東西一町南北五十間周圍三町三十間、村の西方にあり。下淸水池。東西四十間南北四十五間周圍二町四十間、村の西方にあり。六志田池。東西四十間南北二十間周圍一町五十間、村の東方にあり。岩本池。東西一町南北四十間周圍三町二十間。村の東方にあり畑澤池。東西一町四十間南北一町十間周圍五町四十間、村の南方に在り。小倉池。東西五十間南北四十間周圍三町。芦見池。東西五十間南北三十四間周圍二町四十間、村の東南方にあり。(下愛子村)前池。東西四十間南北四十間周圍二町三十間、村の東南方にあり。中池。東西六町二十間南北一町周圍四町三十間、村の東南方にあり。新池。東西四十間南北四十間周圍二町四十間、村の東方にあり。虎ヶ澤池。東西三十間南北二十間周圍一町四十間、村の東方に在り。森下池。東西五十間南北三十四間周圍二町四十八間、村の東北方にあり。(鄕六村)立澤上池。東西四十間南北三十五間周圍二町、村の南方にあり。立澤下池。東西四五間南北十間周圍五十五間、村の南方にあり、(下流は小川)。妻久保上池。東西四十五間南北十二間周圍五十五間、村の南方にあり。妻久保下池。東西四十間南北三十八間周圍二町、村の南方にあり。庄子上池。東西十二間南北十三間周圍五十間、村の南方にあり。庄子下池。

東西十七間南北十二間周圍五十七間。村の南方にあり、入山池。東西十三間南北十七間周圍一町、村の東北に在り。(以上今の廣瀬村)
(大倉村) 石沼。東西一町二間南北二町三十間周圍七町四十間、村の北にあり。松倉池。東西五十間南北一町四十間、周圍七町、村の東方にあり。大原新田池。東西二十間南北二十間周圍十八間、村の南方に在り。小集澤池。東西二十間南北二十間周圍二町二十間。村の南方に在り。大原池。東西十八間南北五十間周圍二町二十間。村の南方に在り。(以上今の大澤村)
(實澤村) 堤。江通堤江通堰に沿ひ、村の北方小角村界より東方上谷刈村界に至る、長一里十町六間、堤敷三間水門三ヶ所。
(福岡村) 坂下池。東西一町十間南北五十間周圍四町、村の東方にあり。大澤池。周圍三町四十間、村の南方に在り。(朴澤村) 瀬木澤。周圍三町四十間、村の東方に在り。瀬木澤下池。周圍三町四十間、村の東方に在り。銅谷澤二池。周圍一町四十三間、村の東方に在り。年川池。周圍一町二十五間、村の中央に在り。新田池。周圍四十間、村の南方にあり。深澤池。周圍五十三間、村の西方に在り。(實澤村)中山上池。周圍七町、村の東南に在り。中山下池。周圍七町三十四間、村の東南方にあり。八乙女池。周圍一町四間村の西方にあり釜澤池。周圍一町五十間、村の東北方に在り、立田上池。周圍二町四十間、村の東北方にあり。立田池。周圍四十間、村の東北方にあり。六堂屋敷池。周圍四町三十間、村の東北方にあり。首塚池。周圍四町三十間、村の南方に在り。六堂屋敷新池。周圍二町四十間、村の南方に在り。(以上今の根白石村)
(古内村) 坂上池。周圍二町四十六間。村の南方に在り。(上谷刈村) 東赤澤池。周圍八町、村の南方に在り。西赤澤池。周圍八丁村の南方にあり。(下流丸太川) 内ケ澤上池。周圍一町、村の北方にあり。内ケ澤下池。周圍二十間、村の北方にあり。鯱ケ澤池。周圍三町、村の西方にあり。枯葉池。周圍一町四十間、村の西方に在り。(野村) 一ノ高森池。周圍五町八間、村の西北方にあり。二ノ高森池。周圍四町三間、村の西北に在り。三ノ高森池。周圍四町五十間、村の西北に在り。平藏池。周圍二町十間村の西方に在り。(七北田村) 將監池。周圍十一町三十六間村の西方に在り。(市名坂村) 苗代澤池。周圍四十八間。苗代澤中池。周圍七町十間。苗代澤入池。周圍二町十五間。馬澤池。周圍十一町(北根村) 暗角池。周圍四十間。西澤上池。周圍四十間。西澤下池。周圍五町十一間。(荒巻村) 月忌上池。周圍四町二十間。月忌下池。周圍一町四十五間、村の西北方に在り。穴田池。周圍八町四十五間村の東南方に在り。(松森村) 鹿島池。周圍一町三十四間、村の北方に在り。佛澤池。周圍一町四十七間村の東北方にあり。戌亥池。周圍二町二十七間村の東北にあり。步坂池。周圍二町三十間、村の北方にあり。(以上今の七北田村)
(小田原村) 清水沼。周圍七町十間、村の南方にあり。海老池。周圍四町五十間、村の西方にあり。與平池。周圍六町三十間、村の北方にあり。新池。周圍四町十五間、村の北方にあり。蟹澤池。周圍二町四十五間、村の東北方にあり。安養寺一池。周圍十三町四十間、村の北方南小泉村の飛地に在り。同二ノ池。周圍四町二十間。
(鶴谷村) 山澤入池。周圍七町五十八間、村の南方に在り。山澤小池。周圍三町二十二間、村の南方にあり。大窪山一ノ池。周圍二町二十八間、村の西北にあり。同二ノ池。周圍五町五十六間。同三ノ池。周圍三町三十四間。菖蒲淨一池。周圍一町三十八間、村の南東にあり。同二池。周圍三町二十三間。同三ノ池。周圍三町二十六間。(今の岩切村)
(荒井村) 大沼。周圍十九町十一間、村の東北にあり。川戸沼。周圍十五町二十間東方にあり。赤沼。周圍七町四十五間、北方にあり。五牙沼。周圍五十六間、南方に在り。(荒濱) 南長沼。周圍十三町四十間。北長沼。周圍十町五間。長小沼。周圍四町二十間。
(今の七郷村)
(岩切村) 山崎池。周圍三十五間。菖蒲澤池。五十二間。一町四十間。西澤池。一町八間。入生澤一ノ池。三十五間。入生澤二ノ池。一町十二間。入生澤三ノ池。一町二十一間。入生澤四ノ池。五十五間。若宮池。三十一間。諏訪入池。四十二間。
(燕澤村) 一ノ池。周圍一町。二ノ池。一町三間。三ノ池。一町二十間。洞滝池。三十間。苗代澤一ノ池。一町五十六間。苗代澤二ノ池。一町八間。四ノ池。四十二間。長岫一ノ池。一町三十間。長岫二ノ池一町二十間。
(神谷澤村) 菅野澤池。周圍三町二十間。(菅谷村) 女澤池。周圍六町三十間。由苗代池。六町十間。穴澤池。六町。定澤池。三町三十四間。寺澤池。四十間。(澤乙村) 館澤池。周圍一町五十間。乞薮澤池。二町三十間。眼澤池。二丁三十間。西澤池。二町。
坪沼池。一町四十間(利府本郷) 通谷清水池。周圍四十八間。椎ノ木池。十二間。(春日村) 柳澤上池。周圍五十間。柳澤中池。一町十間。柳澤下池。一町三十間。大澤池。三十三間。小橋元池。五十二間。袖澤池。一町四十間。寒風澤池。三町十間。赤沼村)
赤地沼。周圍三町十間。(加瀬村) 加瀬沼。周圍三十五町。永松澤池。四町。(森郷村) 惣關大池。周圍九町一間二尺。惣關中池。八町二間。惣關下池。六町。藤田大池。十町。藤田小池。五町。諏訪池。三町。道珍坊池。七町。大窪池。五十間。古戸池。二十六

間。（今の利府村）
（岡田村）赤沼。周圍七町四十五間。（高砂村）
（笠神村）八合池。周圍二十一町。（大代村）錢神池。周
二十一間。的場池。五十四間。（留谷村）青木池。周圍四
加瀬池。周圍三十五町。（今の多賀城村）
（鹽竈村）泉澤池。周圍一町二十五間。西北方にあり。花立一池。周圍二町四十間、花立二池。一町七間、二股池。一町。藤倉池。
一町五十間。松入池。一町三十三間。起浦池。二町四十
（湊濱）辨天沼。周圍十二町十六間。細沼。十五町五十
四十間。松井池。一町二十五間。（蒼蒲田濱）阿川沼。周圍十六町三十間。園子沼。五十間。後田池。一町五間。大山池。五町二十
間。（花淵濱）三月田池。周圍一町十一間。上五月田池。
一町。代ヶ崎）馬放池。一町八間。戸畑池。一町二十間。
大山池。五町二十間。開地池。二町三十間。下田池。三
蓮池。二丁。（今の七ヶ濱村）
（櫻渡戸村）館澤一池。周圍一町三十二間西南方にあり。館澤二池。周圍一町二十六間西南方にあり。雁澤池。周圍一町南方にあ
り。濱井湯池。周圍一町二十二町西方にあり。中島池。周圍一町南方に在り。土井下池。周圍二十三間三尺東方にあり。下境田澤
池。周圍一町十四間北方にあり。上境田澤一池。周圍一町五十間西方にあり、下流境田川。上境田澤二池。周圍五十八間東方に在
り。蒲澤池。周圍三十六間東方に在り。（初原村）松本池。周圍五十二間三尺。樋澤一池。周圍
一町二十間。樋澤二池。周圍一町十五間。（松島村）清水入池。周圍三十四間。清水池。周圍十二間
葉山池。周圍一町十一間。蓮花澤池。周圍四十八間。狐岩谷池。周圍三十九間。
櫻岡池。周圍二町十間。町頭池。周圍三十二間。旭島池。周圍三十間。（根廻村）長山池。周圍一町十九間。後澤池。一町四十間。
人善池。一町十間。田中一池。一町二十間。田中二池。一町十八間。自田池。一町二十間。（前澤一池。二町三十三間。（前澤二池。
一町二十間。（前澤三池。一町十九間。（渡一池。（渡二池。一町四十五間。（渡三池。一町二十六間。（渡四池。

四十三間。（渡五池。五十八間。（渡六池。二町二十間。
板澤池。一町五十九間。桐田池。四十八間。檀下池。一町
間。矢倉場一池。五十間。矢倉場二池。二町三十間。矢倉
矢倉場六池。三十五間。堂前池。一町四間。高寺池。一町
（手樽村）狐入池。周圍二町十五間。土屋澤池。三十間。
上池。一町五十間。小屋入池。二町二十間。空田池。二町十
爺地池。四十五間。牛木池。三町四十五間。道川池。十五
早坂池。二町十間。六合池。二町二十間。申林一池。二町
釜澤三池。四十間。釜澤四池。五十間。脇澤池。四十五間
澤二池。五十間。横須池。二十五間。（幡谷村）鍛治池。周
周圍三十七間。猫迫池。五十八間。（竹谷村）後蒲池。周
周圍三十間。（今の松島村）

第二項　井

泉

柱清水【大澤村大倉】天狗橋の南數十間を隔りたる所に一小泉あり、天和年間藩祖公大倉川に漁し其際盛夏渇を覺えさせ水を飲まんと欲し偶清泉の柱の根より湧出するを見之れを掬して渇を凌ぎたりと、故に其泉に柱清水の佳名を賜ひたりと云ふ。

清水井。【七ヶ濱村】菖蒲田に清水あり。傳へて古相澤掃部守なるもの刀を研ぐため掘れるものなりと。刀は當區相澤周作所藏の、備前國次及び國包の作は、即ちそれなるとか、同人は「請所領從四位上土佐守藤原光眞印」と銘する絹

本に、人物と伏したる鹿を畫きたる古畫を藏せり、何等の由緒あるものならん。

獨鈷水【松島村】瑞巖寺の東北陽德院に一井あり、獨鈷水之れなり。傳說に、慈覺大師親ら獨鈷を持て土を穿たれしに、忽ち清水滾々として湧き出たりと云ふ。今尙大旱數日に亘るも甞て涸水せしことなく、松島阜頭第一の水なり。

砥泉【同村】兒塚嶺下歸命院の北に在り。水色青白尤も宜く。刀劍を磨くべし。昔樋爪五郎の殿崎に在るや。恒に刀劍を好み。諸方の水を撰て之を磨き利鈍を驗む。而して此泉を以て第一と爲す。因りて砥泉と名く。

居經泉【同村】紫山西南足に在り。居民六七戸。是を居網の里と謂ふ。里南百餘步。田間清泉あり。久く旱すと雖ども竭きず。最も茶に宜し。且流出して左右の田數十頃に漑ぐ。遂に高城川に入る。高城苍に井なし。常に川水を用ゆ而して旱潦水竭く。或は濁れば咸な來りて此泉を汲む。古老曰く。高城驛より此の際に至る。左右は古皆海濱たり。潮水來去す。此の處に居て而して魚網を投ず。故に地名と爲し。又泉名と爲す也と。今此の際に遊び。崎尾山足を觀るに懸崖・洞穴の狀は則ち波浪嚙食の痕。宛然として新たなるが如し。乃ち知る滄桑の變。其久遠に非るを。古老の說實に然り。

第五節　島嶼及び暗礁

第一項　島嶼

郡中面積・廣袤の稍大なる嶼島は、浦戸村の寒風澤濱・野々島・石濱・桂島・朴島なりとす。其の他鹽竈町松島村七ヶ濱村の地盤に碁布せる嶼島にありては、主に勝地に屬するもの多し。

宮城縣々治一班。寒風澤島宮城郡、周圍一里二十五町、面積零四四・石濱（桂島）同郡、周圍一里三十五町、面積零四九。野々島同郡、周圍一里八町。面積零三一。

宮城郡地誌。【島】桂島。本郡に屬す。鹽竈町鹽竈驛より、東方海上直徑二里十八町、石濱を合して一島とす。東西十八町二十間、南北三町四十五間、周圍一里十町三十間。戶數五十戶人口三百二十二人、男百六十人女百六十二人。米穀桑茶に宜しからず、島民漁業を營む。東南に松樹の林ありて船舶の標目となす。

寒風澤島。本郡に屬す。鹽竈町鹽竈驛より、東方海上直徑四里、東西二十二町四十間、南北二十七町四十間、周圍二里十四町。戶數百三戶人口四百二十四人、男二百五人、女二百十九人。米穀桑茶に宜しからず、島民漁業を營む。島南海上直徑五町、舟入島に松樹あり高一丈六尺、船舶の標目となす。

野々島。本郡に屬す。鹽竈町鹽竈驛より、東方海上直徑三里十六町、東西七町三十四間、周圍一里五町。戶數三十四戶人口百十六人、男九十一人、女八十五人。米穀桑茶に宜しからず、島民漁業を營み、岸南松樹一株あり高二丈、船舶の標目とす。

朴島。本郡野々島に屬す。本島の根岬灣より、東方海上直徑二十六町、東西二十四町、南北八町三十六間、周圍一里二十八町二間。戶數十二戶人口六十四人、男三十三人、女三十一人。米穀桑茶に宜しからず。島民漁業を營み、岸東松樹二株あり高二丈、船舶の標目とす。

宮城郡地誌。【鹽竈町】辨天島。東西八間南北六間周圍二十四間。奇崎島。東西二十間南北一町二十間周圍三町四十間。都島。東西二十間南北十間周圍五十六間。內裏島。東西五十間南北三町周圍七町三十四間。德瓢島、東西三十五間南北二十間周圍一町五十五間。一疋島。東西三間南北五間周圍十五間。雞島。東西七間南北六間周圍十六間。岬山崎より東方海上にあり。（七ヶ濱村松ヶ濱）鴛崎島。東西五十間南北三十間周圍二町。（同村菖蒲田）辨天島。東西三間南北五間周圍十六間。毘沙門島。東西一間三尺南北二間周圍六間。布袋島。東西一間南北一間周圍四間。（同村花淵濱）櫛現島。東西三間南北十五間周圍三十間。雀島。東西三間三尺南北三尺周圍八間五尺。甕島。東西三間南北三尺周圍八間五尺。竈島。東西三間南北三間周圍九間。鍋島。東西一間南北一間周圍三間。南二ツ島。東西十間南北十間周圍三十五間。北二ツ島。東西十間南北十間周圍三十四間。東風島。東西七間南北六間周圍二十二間。中ノ風島。東西六間南北五間周圍二十間。西風島。東西六間南北五間周圍十八間。小黑島。東西一間三尺南北一間周圍二十間。（同村代ヶ崎）大里島。東西八間三尺南北一間周圍二十間。燒火附島。六間に五間周圍十八間。洞火附島。十間に二間周二十間。燒掛島。十五間に五間周十八間。洞火附島。東西五間南北一間三尺周圍十三間。燒火附島。

間に三間周三十一間。馬放島。三町二十間に二町十間、海上四十間にあり田七反七畝歩。沖高洞倉島。五間に二間三尺周十五間。高洞倉島。三間に一間三尺周五間。兎島。四間に十間周二十五間。躑躅島。十五間に五間三尺周三十一間。惠比壽島。三間に一間三尺周六間一尺。(同村吉田濱)竹庵島。東西十七間、南北九間周五十二間。百鳥島。二十五間に十二間周一町十四間。白頭島。五間に十一間周三十二間。水島。十八間に十四間周一町四間。毛無島。十間に五間周三十間、浦戸村石濱)水島。二十間に三十間周一町二十間。角島。二間に八間周二十間。(同村柱島)大茂根島。東西十間南北一町四十間周三町四十間。小茂根島。七間に五十間周二町。子小茂島。十間に二十間周一町。駒島。五間に十間周三十間。手代島。二間に三間周十間。金島。一間に二間周五間。作島。十間に十間周四十間。續島。三間に二間周十間。(同村寒風澤濱)前島。東西一間南北十間周圍十五間。船入島。二十間に五十間周十五間。小高島。十間に十間周二十五間。烏帽子島。五間に二間周十間。青島。三間に二十間周五十間。東海島。十五間に十五間周四十五間。(同村野々島)朴島。東西二十四町四十四間、南北八町三十六間。周圍一里二十八丁。家數十二戸、人數男三十三口女三十一口。影田島。五間に四十間周一町二十四間。柏木島。五十一間に二十二間周二町。獅子島。十間に三間周三十一間。屏風島。二間に八間周二十間。猪島。三間に二十三間周一町十五間。榊島。二十五間に二十九間周一町十間。鯨島。四町に三十間。箱崎島。二町四十間に十五間周三十間。二烏帽子島。十間に五間周十六間。一烏帽子島。十五間に二十間周一町三十間。二烏帽子島。三間に六間周十八間。漆島。三町に一町周八町。(松島村磯崎)鷺島東西二十間南北五十間周圍一町四十間。大白島。東西五間南北五十間周圍一里五十間、小白島。三間に二十五間周五十六間。星島。四間に五間周三十六間。松ケ島。十五間に一町四十間周三町五十間。辨天島。二間に五間周四十五間。鳴島。二間に六間周十三十二間。五大島中島。東西十間南北十九間周圍三十八間。屏風島。東西九間南北八間三尺周圍三十五間、御島。東西十五間南北一町二十間。經ケ島。東西三十一間南北九間周圍一町二十間。福浦島。東西三町四十間南北九町二十間。家一戸七口舟行、竹數を以て標目とす。德浦島。東西四十間南北十七間周圍一町五十四間。引通島。東西一町三十間南北二十四間周圍三町四十八間。繪島。東西廿間南北二十三間周圍二町四十五間。纜島。東西三十間三尺南北一町二十間周圍七町一間。千貫島。東西二間南北七間周圍十八間。加島。東西三間

南北二十五間周圍五十六間。雀島。東西三間南北五間周圍十六間。青鐵島。東西六町四十間南北四十間周圍十四町。舟行九の縊れ岩を以て標目とす。鳥羽島。東西五間南北二間周圍十四間。羅漢島。東西二十一間南北八間周圍一町十八間。雁金島。東西五間南北七間周圍二十四間。布袋島。東西二十間南北十三間周圍四十五間。大黒島。東西三十間五十間周圍二町。伊勢島。東西四間南北六間三尺周圍二十三間。鞍掛島。東西二間南北八間周圍十九間三尺南北五間周圍四十九間。小町島。東西四間南北七間三尺周圍二十三間。小福浦島。東西四間南北二間周圍二十間。在城島。東西三十間南北二十間周圍二十一間。甞島。東西封内風土記。鹽竈邑。島凡八。籬島。三ノ小島。裸島。引島。在城島。内裏島。後島。蛇島。

松ケ濱。島凡二。松ケ浦島。觀迹聞老志。名跡志共云。在青松濱。佳境絶景。不減松島。往古島上有紫藤而得佳名。今更無知之者。此濱民多以魚蝦爲業。以等簀爲役。濱南斷岸千尺。長瀞數仞。白浪瀉石磯。碧波染沙汀。山頭有觀江臺。登此則北隅南方西關東濱。盡入吟眸。其他七疑峰。和泉嶽。仙臺城。大白山。磐仰山。篠谷關山。不忘大巌。名取。亘理。伊具。宇多。相馬諸山等也。水濱以東阻沙塩遶洲家。鹽岩相峙。長松相連。岩下有一島。上戴蒼翠。曰舞踏島其東曰英雄島。在其海中者。曰石巌明神。鹽竈末社也。青松濱西。曰菖蒲出。南西曰水門濱。有善逝堂。市川逶其南汀。傍有巨岩。曰之臥石。其南岩崖相連。其岩下有空洞通行。鄉人曰之通船穴。菖蒲田濱。島凡三。辨天島。大黒島。毘沙門島。

花淵濱。島凡十一。高島。雀島。楓島。櫨現島。鍋島。二島。東風島。西風島。間風島。小黒島。大黒島。吉田濱。島凡八。惠比壽島。竹柄島。舞島。白當島。水島。百合島。古志島。無毛島。代ケ崎。島凡九。放馬島。名跡志曰。千尺之丹崖相峙。數間之翠洞豁然。奇絶可驚。霞機可恐。相傳太古以神明所駕之良驥。而放于此地。故曰之放馬島。葛籠島。鞍島。兎島。大放火島。小放火島。帆立島。惠比壽島。逢摩島。柱島。觀迹聞老志。曰在納巖島南。青嶺翠松連。白沙素波急。其東濱曰石濱。細石錯落。疊波來去。島上有神祠。曰柱島明神。或曰。是之松島明神也。希文按。邑民所傳有松崎明神。島凡九。駒島。手代島。大言島。小言島。神續島。佐久島。鐘島。前ノ子島。石濱。島一。三島。

高城郷礒崎邑。島一。鷺島。
同郷松島邑。島凡八。御島。福浦島。屏風島。二子島。德浦島。旭日島。翁島。經ケ島。雜島凡十九。九ノ島。長持島。腕崎。
江ノ島。青洋島。毘沙門島。布袋島。大黑島。惠比須島。千貫島。盤若島。伊勢島。雁島。内裡島。箕ノ輪島。鑓島。小町島。阿島。
同郷手樽邑。島凡三。月星島。松ケ島。卵鳥島。
同郷野之島。島一。土人呼之。曰加波計多山。

【鹽竈町】崎山岬は灣中に突出して、北に杉の入江、南に獅子崎及び雛島を控ふ。雷神山の東方に延びたる崎を尾島崎と云ひ、前方に辨天島を控ふ。

【七ケ濱村】鳶ケ崎。松ケ濱との界、巖巌南海に突出し、往時燈明臺の設けありしと。附近暗礁多し。黑崎。湊濱の東方三十間、黑岩突元、附近暗礁多く小魚の棲息頗多なり。浪靜かに風穩かなるの時、垂釣の興に富む。眺望ケ崎。菖蒲田濱の東海岸に出突したる大東館の所在地なり。傳へて往時藩王某公（重村公ならん）此の地に出馬し、眺望の絕佳を愛て斯く命名せられしと。金華の靈蜂は眉の如く右に聳り滄浪万里渺茫として限なく海岸一帶の白砂翠松相映の絕勝、實に眺望ケ崎の名に背かず、逢麿崎。代ケ崎元四ケ崎と云ふ。中古與ケ崎に變じ後又今の名に改む。四ケ崎とは、達麿崎・白崎・瀨崎（又洲崎）扇崎なり。達麿崎は西濱の西方にありて一小丘をなす往昔毘沙門天の天下り給へる所と傳ふ。今も尚ほ幣を供ふ。其處に珍らしき古松一株あり、大ならざるも其狀伏拜するに似たり。

宮城郡地誌。（鹽竈町）尾島崎。東方に斗出する二十間。獅崎。西方に斗出する十間。卵島崎。東方に斗出する三十間。（七ケ濱村松ケ濱）鳶崎。南方に斗出する五十間。黑崎。東方に斗出する二十五間。（菖蒲田濱）眺望ケ崎。東方に斗出する三十間。（浦戸村石濱）小沙羅崎。南方に斗出する三十間。元石濱崎。東南方に斗出する十間。（寒風澤濱）寺崎。東北方に斗出する四町。（松島村礒崎）箭崎。斗出八町。殿崎。斗出三町。（手樽）蛇島崎。斗出一里。呼崎。斗出五町。七十里崎。斗出四町。

第二項　暗礁

【七ケ濱村】阿志良礁。湊濱の南海上二十間の所にあり、東西十五間南北二十二間深度干潮五尺。（礁標なし）祖平礁・菜畑礁・地獄礁等は松ケ濱鳶ケ崎の南方二町にあり、深度干潮二三尺（礁標なし）長磯礁・長礁・見礁・龜磯礁共に東西二三十間南北二十五六間、深度干潮一丈内外、菖蒲田濱。東南約三四丁に散點し（礁標なし）大島礁。東西十間南北三十五間深度干潮四丈餘。東方八町餘にあり。舟行自在なり。赤旗礁・巢鴨礁・花淵濱の小濱より東方七八町にあり、深度滿潮二三尺（礁標なし）北我東礁・南我東礁。小濱の東方一里餘、東西十五間南北十二三間、深度滿潮二尺内外。坊主礁・藥鑵礁・八町起し礁・田螺礁・細礁・鱚ケ礁等小濱の東方二十四五町にあり。小は六間に三間位、大は十五六間、深度滿潮一尺五寸乃至六七尺（礁標なし）船形礁・小姉礁・東鯛礁・西鯛礁等追懸の崎より東方二十五町にあり、附近は波濤渦巻く。小姉礁東西十八間南北十五間及び船形礁共に深度滿潮一尺五寸、東鯛礁深度五尺。大根明神礁。社敷崎の東南五里にあり、東西三里南北四里、深度干潮五尺（礁標なし）附近常に怒濤荒らく舟行頗る危險。往昔こゝに鼻節神社の奥の院大根明神の鎭座地なりと傳ふ。（參照第八篇第一章）。八平出礁。追懸崎の東南十八町にあり、八間に七間、深度干潮二尺、中礁は又一町にあり小礁あり。馬脊礁・摺臼礁・姉礁・稻村礁等は吼坊ケ崎の東南方二三町にある小礁なり。膏魚礁。吼坊ケ崎の東南三十町にあり、南北三十間東西二十五間、深度干潮二尺釣魚の適地（礁標なし）若布礁。吼坊ケ崎の南三十間にある小礁なり、深度干潮一尺。一つ礁。代ケ崎の瀨崎より東方一町三間にある小礁なり、深度干潮一丈八尺（礁標なし）油小礁。代ケ崎區の北方五六十間にあり、東西五間南北二間の小礁なり、深度干潮五尺。

宮城郡地誌。(湊濱)阿志良礁。東西十五間南北二十二間深干潮五尺、南方二十間にあり。(松ヶ濱)祖平礁。東西五間南北十間深干潮三尺。菜畑礁。東西二十間南北十五間深干潮二尺。地獄礁。東西十五間南北二十間深干潮一丈八尺。(菖蒲田)長磯礁。東西三十間南北三十間深干潮一丈。長礁。東西三十間南北三十間深干潮一丈。龜磯礁。東西二十四間南北二十間深干潮一丈三尺。大島礁東西十間南北三十五間深干潮四尺。見礁。東西五間南北五間深干潮一丈三尺。(花淵濱)赤旗礁。六間に二十間。巣鴨礁。二十間に十間。北我東礁。十五間に十三間。南我東礁。十五間に十四間。坊主礁。十五間に十六間。藥鑵礁。十間に八間。八町起礁。十間八間。田螺礁。六間に三間。細礁。六間に三間。鱝礁。十二間に二十間。船形礁。二十一間に八間。小姉礁。十八間に十五間。東鯛礁。十三間に十七間。西鯛礁。十四間に十五間。大礁明神礁。寒風澤にて大礁といふ、東西三里南北四里深干潮五尺、社敷崎より東南五里にあり。平出礁。八間に七間。中礁。二間に六間。馬脊礁。六間に三尺。摺臼礁。三間に一間三尺。姉礁。八間に七間。膏魚礁。二十五間に三十間。稻村礁。三間三尺に四間。若布礁。三間に四間。(代ヶ崎)一礁。東西一間南北二間。油小礁。東西五間南北二間三尺。(石濱)小太郎礁。東西三間南北三間深干潮三丈五尺。傳吉礁。一町四十間に四十間深干潮二丈八尺、邊空礁。二十間に十五間。深干潮二丈。柁掻礁。三間に四間深干潮一丈五尺。雀礁。五間に三間四尺。土礁。四十間に三十間深干潮二丈。(吉田濱)鳥子礁。東西五十間南北三十間深干潮六尺。沖礁。三十間に一町四十間深干潮六尺。姥礁。二十間に三十間深干潮三尺。一横礁。四十間に七間深干潮七尺。二横礁。十五間に五間深干潮四尺。小黑島出礁。四間に深十間干潮七尺。末礁。五間に五間深干潮七尺。三礁。五間に六間深一尺。神樂出礁。十五間に十間深三尺。水戸礁。五間に七間深一丈。傘礁。三間に四間深五尺。(寒風澤濱)三礁。東西五間南北十七間深干潮六尺。平瀨礁。五間に十八間深五尺。水戸島礁。十間に三間深五尺。神樂礁。二十間に五間深五尺、大礁。東西三里南北五里深干潮五尺。港より西南方四里十八町(花淵濱にて大礁明神礁といふ。(野々島)膏魚礁東西十間南北九間深干潮六尺。平礁。一町二十間に一町四十間深一丈。百刈礁。五間に五十間深五尺。五十石礁。四十間に十八間深五尺。

第三章　地質

第一節　土性

前節叙述の如く東西に長く南北に短かき地勢なるを以て、西部の高原地帶にありては、第三紀層に屬して概ね火山岩より成り、中央の平野より東部の海岸地帶に在りては、第四紀層に屬して多くは水成岩より成る、爰を以て土性從て多岐に亘るは自然の趨向なりとす。

宮城郡地誌。(地味)其五分は色黄黑其質壤埴にして美、稻粱菜蔬に適し水利便なり。其三分は色赤其質墳壚、桑茶に宜く水利便ならず。其二分は色黑其質塗泥廣斥にして惡、稻粱桑茶に適せず。郡を平分して、東南方多くは肥沃、西北方多くは磽瘠なり。

編纂資料に由り町村別に叙述する下記の如し。

【原町】本地方の成生は第三紀層に屬す、地質は一般に原性土にして、土性は酸性土壤なりとす。更らに之れを細別すれば、小田原粘土質の箇所多く、新田新屋敷は共に壤土多ふし。

【鹽竈町】地質は一般に水成岩より構成し、砂岩・礫岩・凝灰岩等も亦多し。土性、粘土地にして砂土に乏しく、間々砂壤土及び壚土の箇所なきに非らざるも僅少にして、全面積の約一割に過ぎず。

【廣瀨村】土質は壚壤相半ばし結合の度輕鬆に屬す、乾濕の度は通潤にして、温帶植物の成育に適す。

【大澤村】地質の成分は、角閃石と輝石とす、我國最近の火山岩なり。此等の岩石を分解すれば多くは埴土を生ず、故に本村内河川に面せる部分は、種々の岩石の分解により成りたる冲積なり。芋澤山地は到る處黄色を呈する粘土質たる言を待たず。地味概して肥沃なる粘土質にして、耕地は粘土壤に變化したるものゝ如し。然れども多少地質を異にしたるは芋澤と大倉なり。芋澤は基部粘土質、河川の沿岸上部は細砂の薄層あり、一見砂土質の觀あるも、内部は依然粘土なり。大倉は上部の地質は腐植土にして下層は礫土より巨石となる。芋澤は各區を通じて、耕地山野均しく前記の土質より成り、殊に現時の耕地は農業の進歩と共に、不識不知の裡に改良せられ、多くは粘土壤土に化し、砂質壤土の肥沃となる。大倉は各區耕地林地共、腐植質土にして表土黑褐色にして粗鬆なり、乾燥すれば粉狀となり飛散し

易く、又水分多濕なれば泥狀となり養分を吸收する力强くして又耕耘容易なり。

【根白石村】土性、西部の山地は壚土にして、耕土は何れも砂土若くは砂壤土なり。

【七北田村】本村の南部、上谷刈より荒巻に亘る一帶の高地と、七北田・野村・松森・大澤等の部落は第三紀層に屬し東部の平野を爲せる部分は第四紀層に屬す。土性一般に粘土質にして、七北田川沿岸附近の田圃多くは砂土質なり。

【七郷村】南小泉地帶は腐植性壤土、中央部は粘質砂土にして水田多く、東部は海岸に近く一帶に砂土なり。

【高砂村】地質、概して壤土・砂土・粘土交錯す。

【七ヶ濱村】地質、湊濱は赤黒、松ヶ濱等概して地味佳しからず。

【多賀城村】本村の大部は七北田川・市川によつて造られたる沖積土壤にして豊沃の資を具ふ。又丘陵を成せる一小部は原性土にして母岩の性質により、粘土なりしも永年耕作の結果今や粘質壤土に化す。市川下流地帶は砂質壤土にして瘠地たるを免れず。

【利府村】本村は壤土・腐植質土・粘土の三種より成る。北部の山地多くは腐植質土にして、東部及び東南部の丘陵は粘土、其の他は壤土なりとす。

【岩切村】地質、田畑砂壤及砂土。山野砂壤及粘土。

【松島村】海濱なるを以て地質・土性一樣ならず。粘土の所あり砂礫混合の地あり、概して肥沃なりと云ふこと能はず。

【浦戸村】全島凝灰岩より成り、外面一帶赤土質にして、海濱に近き平地は砂土なれども、一般は耕地に適せり。

明治八年修史局に於て地誌提要編纂を企劃し、材料を各府縣に徵せられたることあり、當時本縣々令宮城時亮は屬官少屬里見良恭、九等屬佐藤簡の二氏をして蒐集せしめられたり。資料中「地味」の一項あり。即ち表土の色澤、土質の善惡、水利の通塞、植物の適否に就き調査せられたることあり、今當時の調書に賴り列記する下の如し。

一、其色赤黒、其質惡、稻粱に宜しからず、水利に便ならず。作並・芋澤・荒井・高崎・東田中村・湊・松ヶ濱・花淵・代ヶ崎・東宮・石濱・吉田・竹谷。

一、其色黒、其質惡。稻粱に宜しからず、水利便ならず。上愛子・下愛子・桂島・幡谷・寒風澤。

一、其色赤黒相半はし、其質美。稻粱菽麥に宜しく水利の便あり。但し溪流直ちに灌漑するが故に、夏冷氣なる時は稻粱登らざるの患あり。根白石。

一、其色赤黒細砂混淆す、其質美。稻粱に宜しく水利に便なり。寶澤・小角・古内・上谷刈・野村。

一、其色赤黒。其質惡。稻粱に宜しく水利に便なり。福岡・北根・荒巻。

一、其色黒、其質美。稻粱に宜しく水利に便なり。朴澤・岩切・澤乙・新田・小鶴。

一、其色黒、其質美。稻粱に宜しく水利に便ならず。苦竹・下馬・高橋・高城本郷。

一、其色黒、其質惡。稻粱に宜しからず、水利に便なり。熊ヶ根。

一、其色黒、其質惡。稻粱に宜しく水利に便ならず。神谷澤。

一、其色赤、其質美。稻粱に宜しく、水利便ならずして時々旱に苦しむ。鄕六・七北田・市名坂・松森。

一、其色赤黒、其質美。稻粱に宜しく水利に便ならず。大倉・留谷。

一、其色淡黒、其質美。稻粱菽麥に宜しく、水利の便あり。田子。

一、其色赤、其質美。稻粱菽麥に宜しく、水利便なり。西田中。

一、其色赤。其質惡。稻粱に宜しく、水利に便なり。燕澤。

一、其色白、砂礫混淆、其質惡。稻粱に宜しからず、水利の便なし。荒濱。

一、其色黄黒相半はす、其質美。稻粱に宜しく、水利に便なり。利府本郷。

一、其色黒砂混淆、其質美。稻粱に宜しく水利に便ならず。福室・初原。

一、其色濃黒砂混淆、其質美。稻粱に宜しく水利に便ならず。岡田。
一、其色赤黒相半はす、其質惡。稻粱に宜しく水利に便ならず。小田原。
一、其色赤黒、其質美惡半はし、稻粱に宜しく水利に便なり。市川・浮島。
一、其色赤黒半はす、其質美。稻粱に宜しく水利に便なり。鵠ヶ谷・南目・南小泉・霞目・長喜城・蒲町・伊在・六丁目・菅谷・飯土井・春日・櫻渡戸・森郷・手樽・加瀬。
一、其色赤黒半はし、其質惡。稻粱に宜しからず、水利に不便。鹽竈・松島・北小泉。
一、其色濃黒砂混淆、其質惡。稻粱に宜しからず、水利に便ならず。蒲生。
一、其色黒細砂混淆、其質惡。稻粱に宜しく水利に便ならず。中野。
一、其色淡黒、其質美。稻粱に宜しく水利に便ならず。八幡。
一、其色白、其質惡。稻粱に宜しからず、水利に便ならず。笠神。
一、其色濃赤、其質惡。稻粱に宜しからず、水利に便ならず。大代。
一、其色樺、其質美。稻粱に宜しく水利に便あり。山王。
一、其色赤、其質惡。稻粱に宜しからず、水利に便ならず。菖蒲田濱。
一、其色赤、其質惡。稻粱に宜しからず、水利の便あり。赤沼。
一、其色赤黒相半し、其質美、稻粱に宜しく水便に便ならず。磯崎。
一、其色濃黒、其質惡。稻粱に宜しく水利に便ならず。根廻。

第二節　鑛物

山地方面の火山岩と、海邊地帶の水成岩より構成せられたる本郡の地盤なるを以て、多種多樣の鑛物實は各所に潛在せしもの、如く推定せらる、去れと有鑛質に在りては未知數に屬するも絶無にはあらざるべし。明治十五年には、福岡村に安質母尼の坑區百五十坪の借區に借地料金三十錢を官に納入したる如き、又現時にありても大澤村高倉山附近より

鐵鑛（黃鐵）産出しつゝあるが如き之れなり。無鑛質に屬する礦質にありては、明治十六年石炭坑に着眼し松木茂恒外一名は七北田村荒巻に於て百坪の借區に三千三百貫の採量、又同所に於て相原安行一千百坪の借區に七千六百貫の採量と百井末時外十三名は一千五十坪の借區に七千三百貫の採量、又利府村神谷澤に於て佐藤萬治外二名は二百坪の借區を初めとし、褐炭には齋藤利實外一名は神谷澤に二百十坪の借區、前田直之助外一名は大澤村芋澤に五百坪を借區し掘採せし以來、各所に於て採掘せられたる無鑛質の種品及び用途を採取町村毎に列擧し、地方特有物産の介とせん。

【凝灰岩】　鹽竈町及び多賀城村市川・浮島の兩區に産出す、近來凝灰岩の利用頗る多く、或は倉庫に或は竈に或は堤防用に、或は岩倉、家屋の土臺等に供給す。

【粘板岩】　多賀城村八幡區起居の里と稱する附近の地中より産出す。明治三十三年五月御慶事奉祝記念として、硯を造り献上したる材料は即ち粘板岩なり。

【安山岩】　同村市川・浮島・高崎・東田中・留ヶ谷・下馬・笠神・大代等の丘陵地帶並に廣瀨村作並・熊ヶ根に産出し建築用として世の愛好を博す。

【亞　炭】　大澤村及び七北田村北部黒川郡境の高地並に、荒巻の南部名取郡境の山地に産出す。燃料に使用す。

【化　石】　廣瀨村鄉六廣瀨川岸より、蛤化石、又同川又は山地より、木化石、多賀城村市川區よりも亦木化石。又大澤村に在りては蛇骨と稱し、村内各所に發見し、徑五六寸のもあり。

【磨　岩】　大澤村奥武士近傍の山間及び、大倉松の倉園倉澤、根白石村中山街道の入口、這坂の右方に横穴あり、之所より細砂を採收す、年額約二十萬貫其の價三千餘圓なり。這坂の地名に因り、這坂岩と云ふ。廣瀨村上愛子・二軒在家より砂岩を産出す、共に精米用に供用す。

【石鹸泥】 廣瀬村作並に產す、用途は石鹸に代用すと云ふ。

【材木巖】 大澤村大倉屋敷平の西北數丁を隔ること北方二町許にして、大倉川の北岸に在り。巖石悉く柱梁の形を成し層々縱に重なるものあり、或は横に推積するものあり、其數幾千本なるを知らず、而して巖面削るが如く、層重疊積高さ數十丈横二三十間に亘れり、眞に奇岩と謂ふべし。

觀蹟聞老志。屋料巖(さいもくのいは)。在夫倉村。其狀似刈田小泉村石岩。自山頭至河畔。如立屋柱。長五六間廣八九寸。是亦神奇之奇石也。封內風土記。材木岩。長一丈五六方六七寸。或八九寸。故土人又呼之。曰角岩。

【大蛇岩】 同村大倉定義如來堂を隔る十町、東の方道路傍らの岩石なり。岩中に蛇骨の埋沒せるもの數個あり。(大なるもの卵骨長さ四寸強同尺六五分)道路を開修する毎に發掘す、故に其の名あり。

【赤 巖】 同村大倉大蛇巖を隔る東十町程の野山頂上の奇石なり。其色赤色にして許多の貝介の殼附着し居れり。思ふに前世界の遺物ならんか。

【碑板石】 七北田村荒巻の山中より產出す、多くは碑石に使用す。

第三節 鑛泉

火山系に屬する奥羽山脈の支線に鱗添せる宮城郡なるが故に各所に鑛泉の湧出するあり、温泉あり冷泉あり、泉質概ね鹽類泉に屬す。其の主治効能及び接客設備の事項は、後篇に縷述しあるも、名稱位置及び泉質の概要を摘載する左に

（參照第六篇第二章）

作並温泉　廣瀬村作並。鹽類泉。
定義温泉　大澤村大倉。鹽類泉。
藤澤冷泉　根白石村福岡區藤澤。鹽類泉。
大森冷泉　同村　鹽類泉。
荒巻冷泉　七北田村荒巻。不詳。
澤乙冷泉　利府村菅谷。鹽類泉。
道珍坊冷泉　同村　不詳。
湯の原冷泉　松島村松島。鹽類泉。
長根澤冷泉　同村手樽。不詳。
鐵冷泉　鹽竈町釜田。鐵泉。
炭酸水　根白石村實澤區六堂屋敷より湧出し、炭酸瓦斯を含有す。

第四章 氣象

第一節 測候所

第一項 石巻測候所

明治十四年七月一日、內務省地理局は野蒜測候所を、桃生郡野蒜港（野蒜築港時代）市街第二十五區、東經百四十一度十一分、北緯三十八度二十三分、海拔四米五の地に開始し、野蒜港突堤築造の當局に通報し、併せて金華山燈竿と氣象互報の道を開くと、共に氣象の概況を最寄郡役所に通牒せられたり。當時は專ら地方時に因りしも、十六年一月京都時に改正し、十九年七月十二日勅令第五十一號により、二十一年一月一日より、英國クリニッチの東經百三十五度の子午線時を以て、日本標準時と定むべきを發令す。

二十年一月內務省は測候所を地方經濟に移すの令により四月一日野蒜測候所は本縣に移管せらる。

二十年八月三十一日石卷町字南鰐山、東經百四十一度十九分、北緯三十八度二十六分、海拔四十四米八即ち現在の位置に移轉し、石卷測候所と稱し九月一日觀測を開始し、二十一年三月十五日より六日間縣廳內及各郡役所員を招集し、氣象觀測法を練習し、四月一日本郡役所外十一ヶ所の構內に、乾濕計及び雨量計を据付け、每日午前十時觀測をなさしめたり。二十七年四月一日內務省の所管を文部省に移す。爾來特志觀測所開始するもの各地に起り、四十三年九月鹽竈町に新設し、海陸兩產に應用するに至れり。

第二項　石卷測候所仙臺出張所

大正十五年仙臺に於る地震觀測所は、文部省において仙臺市に指定した。地震觀測所は石卷測候所出張として、榴ヶ岡公園內釋迦堂に建設し、建物の建築竣工を告げ、文部省より中央氣象臺技師地震掛主任國富信一、技手佐藤秀雄兩氏來仙、八月八日より地震計の据付けを爲し、十一日終了、其他の設備も完了し、全國各觀測所との聯絡を取り、九月十五日開所、川添萬平此の日宮城縣測候技手に任じ、仙臺出張所長の事務を掌る。

第三項　氣候

「宮城郡は氣候概ね温和にして、四時の變遷甚しからざりしも、山間と海岸とによりて寒暖の差異あるを常とす。乃ち西北廣瀨・大澤・根白石の山村は稍や寒冷なるも、東南七ヶ濱・高砂・多賀城・浦戸・松島の海岸地方は温暖なり。宮城郡地誌、郡の西は山を負ふ、夏炎冬寒。東は海に沿ふ、夏涼冬暖。南及中央に至りては、極暑に高溫極寒に低溫ならず。上記の如く寒暖に差異あり、更らに各町村より提供せる資料に據り、概要を摘載する下記の如し。

【原　町】氣候概して温暖、初春の候西北風强かりき。

【鹽竈町】（參照本節第四、六項）

【廣瀨村】氣候温和にして、人身及び農產物に適す。

【大澤村】地勢に因り多少の差異あり。仙臺市に比すれば、春の暖氣は遲く秋の冷氣は早くして殆んど三旬の差あり。夏季は甚だ凌ぎ易きも冬季は寒冷を感ず。

【根白石村】三月下旬梅花咲き、六月下旬蜩鳴き朝顏の花咲く、七月上旬紫陽花咲き、十月上旬菊花開く。

【七北田村】温度概して平温、雨量亦其度に適す、降雪多からざるも回數多し、又屢々霜害あり殊に五月頃は特に地方民の憂ふる節なり。

【七鄕村】平野の間に介在するが故に、四時强風を受く。特に冬季は西北諸山より吹下す風威は酷烈なり。夏季は水田多きと、東海面より吹來る海軟風は、氣候を中和ならしめ爽涼を感ず。又東海岸一帶の松林は海風を和げ、塩分の襲來を防遏するにより、稻作其の他の植物に好影響を與ふ。

【高砂村】氣候概して温和にして、夏季に際し南東の暴風を豫防するがため、松樹を栽植して林相を形成す、所謂る防風林の一なり。

【七ヶ濱村】氣候温和にして夏尙ほ凉しく、冬季北風多きも比較的暖を感ず。

【浦戸村】春夏の氣候適順、夏は太平洋上より南風の襲來あり冷氣を覺ゆ、秋冬の候は大風吹荒み、殊に寒氣凛烈。

【多賀城村】西北に山を負ひ東南に海を控へ氣候温和なり。たゞ三、四月の間俗に沖上げと稱する、東南風の到るあれば麗かなる天候も忽ち變じて寒冷を催ふし、春の遲きを感ずるのみ。夏季は東南風多く、冬期は西北風多きを常とす。降雨は六、七、八、九の四ヶ月を最多とし、雪は一、二月頃多きを恒例とす。（參照本節第四項）

【岩切村】概して温和なり。盛夏の候と雖も九十度を越ゆること極めて稀に、嚴冬の候と雖も三十度を降ること殆んど無し。風は概して强く、冬は西北、夏は東南風多しとす。降雨は九月最も多きも、降雨の量多からず。

【利府村】氣候温和にして頗る健康に適す、北部及び東北の山地は、寒氣やゝ强きを覺ゆ。（參照本節第四項）

【松島村】（參照本節第六項）

第四項　氣温

明治三十一年七月一日、氣象臺長の通牒により寒暖計の示度を、水素瓦斯寒暖計の示度に準ずることゝし、從來のものを更正せられて準基は定めらる。野蒜測候所時代及び石卷測候所開始當時にありては、華氏寒暖計の示度に據るも、二十二年以降は攝氏に改む。野蒜測候所は同十八年、石卷測候所は同二十一年開設以來、昭和元年に至る四十二年間の温度の最高最低及びその月日を示す。左に

野蒜測候所觀測（華氏）

	平均	最高	月日	最低	月日		平均	最高	月日	最低	月日
	度	度		度			度	度		度	
明治十八年	六四、一	八九、〇	八、一〇	四〇、〇	一、二四	同　十九年	六五、八	九四、〇	八、三	四〇、〇	一、一八
同　二十年	六六、一	九〇、〇	八、一五	四一、〇	一、二						

石卷測候所開始以來昭和元年に至る三十九年間の氣温の最高最低平均（攝氏）。左に

年次	平均	最高	月日	最低	月日	年次	平均	最高	月日	最低	月日
	度	度		度			度	度		度	
明治二十一年	一〇、六	三三、七	八、一〇	一〇、三	二、七	廿二年	一〇、二	三一、四	八、二〇	九、七	一、一八
同　廿三年	一三、五	三一、六	七、一九	八、六	一、二	廿四年	一一、四	三二、一	七、一三	一三、一	二、四
同　廿五年	一一、三	三〇、二	八、一五	八、七	一、二二	廿六年	一〇、六	三一、二	七、一	一一、五	二、二六
同　廿七年	一三、二	三四、八	八、三	九、七	二、一三	廿八年	一一、一	三〇、一	八、一四	一三、六	一、二〇
同　廿九年	一一、三	二九、七	八、二一	一三、一	一、二〇	三十年	九、九	三一、五	七、二一	九、九	二、七
同　卅一年	一〇、八	三一、〇	七、二四	八、六	不詳	卅二年	一一、〇	三二、一	八、二四	七、九	一、一五
同　卅三年	一〇、四	三一、四	九、一	一三、六	一、二六	卅四年	一一、一	三三、〇	八、二〇	九、九	二、三
同　卅五年	一〇、七	二九、四	九、一	一〇、〇	一、二五	卅六年	一一、一	三〇、一	二、一四	六、〇	一三、二六
同　卅七年	一〇、七	二九、三	八、七	九、四	一、二七	卅八年	一〇、四	三一、〇	九、一七	九、四	二、九
同　卅九年	一〇、〇	三〇、七	七、一八	一一、三	二、四	四十年	一〇、五	二九、六	八、一九	八、四	二、一二
同　四十一年	一〇、〇	三一、九	八、二	一〇、五	一、二三	四十二年	一〇、五	三二、九	七、一七	一三、四	一、一三
同　四十三年	一〇、七	三〇、六	七、二一	一八、六	二、一一	四十四年	一一、五	三一、一	七、一三	一〇、四	一、二一
大正元年	一〇、五	三一、六	七、一九	七、五	一、一六	二年	一〇、一	二九、六	七、二六	一〇、七	一、一四
同　三年	一一、八	三二、九	七、二	五、八	二、四	四年	一一、一	三二、五	七、二〇	八、四	一、一五
同　五年	一一、四	三〇、九	八、二〇	七、九	一、五	六年	一〇、八	三三、四	八、八	七、四	三、一
同　七年	一〇、八	三二、六	七、二八	一〇、三	三、一	八年	一〇、九	三二、四	八、五	一四、六	一、六
同　九年	一一、三	三二、六	八、一七	六、七	二、二三	十年	一〇、九	三二、二	八、九	七、三	一、九
同　十一年	一一、五	三四、七	八、一八	一〇、七	一、三〇	十二年	一〇、七	三二、八	八、二八	一三、〇	一、二八
同　十三年	一〇、八	三四、五	七、三〇	八、〇	二、一七	十四年	一〇、九	三一、〇	八、二八	八、四	一三、一八
昭和元年	一〇、三	三二、八	七、一五	一七、八	一、二五						

石巻測候所仙臺出張所開始以來の平均氣温・日照時數・平均濕度・最多風向・平均風速・降水量粍。左に石巻測候所仙臺出張所觀測成績表（川添萬平調）

年	月	平均氣温（攝氏）	日照時數	平均濕度（百分率）	最多風向	平均風速（米、秒）	降水量粍
大正十五年	十月	一二、八	一六五	七八	北西	一、七	一〇四
同	十一月	六、八	一四九	七四	北西	一、七	二一
昭和 元年	十二月	醉一、六	一四四	七六	北西	一、七	五三
昭和 二年	一月	(一)〇、六	一六五	七四	北西	一、七	一五
同	二月	(一)一、五	一八三	六九	北西	二、三	三
同	三月	二、五	二〇〇	六九	北西	二、一	一〇三
同	四月	九、〇	一九〇	七九	北西	二、〇	二〇七
同	五月	一三、六	二四七	七四	南々東	一、八	一〇八
同	六月	一七、六	二四七	七九	南々東	一、五	六五
同	七月	二三、四	二一六	八八	南々東	〇、九	一四三
同	八月	二四、二	一五三	八六	北西	一、三	一三五
同	九月	一八、四	一〇六	八四	北西	一、三	一四九
同	十月	一三、八	一六六	七八	北西	一、二	七六

各校提出の資料に因り町村の氣温を掲ぐる左に

【廣瀬村】極寒は一、二月にして攝氏零下十度、極暑は七、八月にして華氏九十度を示す。

【根白石村】最寒一月、温度華氏二十度、酷暑七月、九十五度。

【大澤村】最高温度華氏九十度、最低温度華氏三十度。

【高砂村】最高温度華氏八十八度、最低温度華氏三十三度、平均六十一度。

【浦戸村】陸地に比し寒暖の程、華氏五度前後の差あり。

【多賀城村】嚴寒零下五度を下らず、酷暑三十二度を越ゆること稀なり。

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	九月	十月	十一月	十二月	平均
原町	四四度〇	四五度八	五〇度五	五六度五	六三度三	六九度〇	七二度〇	六三度〇	五六度〇	四八度〇	五八、五	
松島村	五三、八	五二、六	五三、〇	五四、〇	六五、四	七二、一	八〇、八	七五、七	六三、五	六四、五	五七、九	

【利府村】村立農業補習學校の調査に係る、最近二、三年間の平均數を掲ぐれば左表の如し。

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
平均氣壓	七六二、二	七六二、〇	七六二、八	七六二、一	七五九、一	七五七、一	七五七、八	七六〇、三	七六二、九	七六三、四	七六一、七	七六〇、七	
平均氣温	〇、一	〇、四	三、五	九、二	一三、八	一七、六	二一、五	二三、八	一九、三	一三、四	七、四	三、〇	一〇、八
平均最高氣温	四、一	四、五	八、二	四、一	八、七	二一、六	二四、三	二六、六	二三、五	一八、三	一二、八	七、三	一五、〇
平均最低氣温	三、九	三、七	〇、七	四、三	九、〇	一四、〇	一七、八	二〇、一	一六、二	九、三	(一)一、〇	七、一	

【鹽竈町】大正二、三兩年間の一ケ月平均温度の最高最低及び平均温度左表の如し

	最高	最低	高低差	平均
寒暖計	度	度	度	度
華氏	八六、一六	四一、〇六	四五、一〇	六三、九九
攝氏	三〇、〇九	五、〇三	二五、〇六	一七、七七

又右兩年間の一日に於ける、最高最低温度の差異左表の如し。

	最高	最低	高低差
寒暖計	度	度	度
華氏	九〇、〇〇	三一、〇	五八、〇〇
攝氏	三二、二〇	零	三二、二〇

第五項　雨量

明治三十三年七月各郡役所に地温計を增設すると共に、廣瀨村愛子に雨量觀測所を新設し、又大正六年七月松島海岸に特設雨量觀測所を新に開始せらる。

宮城縣石卷測候所年表を基調とし、更らに資料を蒐集し表示する下の如し。

明治二十一年より昭和元年に亘る三十九年間、降水の總量、降水最多の日量及び月日を列記し、更に備考欄の項を置き豊凶の事蹟並に大旱洪水の表目を略記する左の如し。

年次	降水總量	降水最多日量	月日	備考	年次	降水總量	降水最多日量	月日	備考
明治廿一年	八九八、六粍	一五一、五粍	七、七		廿二年	九三四、三粍	八六、六粍	六、二五	凶作
同　廿三年	一六六三、五	八三、一	九、八		廿四年	九四六、九	一一四、四	九、三〇	豐作
同　廿五年	一一六二、九	五九、四	九、二九	豐作	廿六年	一〇四九、一三	四九、〇	七、五	豐作
同　廿七年	一〇七一、四	八七、五	一三、一一	豐作七月廿日より八月七日迄降雨なし	廿八年	一〇四九、三	一〇三、四	七、三	豐作
同　廿九年	一一七八、九	六六、三	七、七		三十年	一五三六、五	一三五、八	九、九	凶作
同三十一年	一二三六、三	一〇六、四	六、五	七月十一日より二十一日迄降雨なし	卅二年	一三一四、九	七五、三	七、三三	
同　卅三年	九〇七、八	五四、八	九、二八	豐作	卅四年	一二三五、五	一一四、四	八、二九	
同　卅五年	一〇一四、一	一三六、五	九、一七	豐作	卅六年	一二三六、四	七八、四	一〇、一六	
同　卅七年	一二七八、三	一〇四、三	七、二七		卅八年	一一七五、七〇	一〇〇、五	八、四	凶作
同　卅九年	一〇三六、一	五二、一	五、二八	凶作	四十年	九二一、九	六〇、三	六、六	七月十五日より八月四日まで雨なし
同四十一年	一一一九、四	一一五、二	七、一六		四十二年	一一八三、四	八四、二	五、一六	七月十日より三十一日まで雨なし
同四十三年	一三七〇、〇	六一、四	八、一一	八月六日以降豪雨洪水長田二七七粍三西小野田二八六〇	四十四年	一三三四、一	八〇、六	九、三	
大正元年	一二〇二、六	五五、九	三、七		二年	一一一二、七	一一一、八	八、二七	凶作　八月廿七日海嘯
同　三年	一〇三二、八	七七、〇	四、八		四年	一二一八、一	七〇、九	五、一七	
同　五年	一二九六、〇	九九、七	七、一四		六年	一一一九、二	六〇、五	三、二四	七月六日より八月二日まで雨なし
同　七年	一一八五、二	一五二、二	八、三〇		八年	九二四、八	五八、八	九、二五	
同　九年	一五八八、三	八二、五	一〇、一		十年	一一六一、五	六一、五	九、八	
同　十一年	一〇八六、五	一〇二、六	一〇、七		十二年	一四九〇、四	一一三、八	九、一四	
同　十三年	七六二、五	五〇、四	五、二五	七月五日より同月廿二日まで無雨八月六日より十八日迄無雨	十四年	一二五一、八	七八、九	六、一五	
昭和元年	八五八、五	八四、〇	五、二三						

第六項　霜　雪

【霜】本郡に於ける初霜の早きは、明治二十四年十月十七日にして、晩きは同廿五年十月二十七日、又終霜の早きは同廿五年四月一日、晩きは四月四日なりとす。然れども年次を列擧し早晩の歳月日を特別し得べきの資材に乏しきを恨む。大正六年より昭和元年に至る滿十ヶ年の記錄は、石卷測候所長濱島仙次郎氏特に本誌資料として寄與せられたるもの左に。

	大正六年	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	昭和元年	
初霜	一〇月二八日	一一、五	一〇、二六	一一、一	一一、一四	一一、九	一一、一一	一一、一〇	一〇、二六	一〇、二四	初霜の月日は總て前年の月日なり
終霜	四月一四日	四、二五	四、四	四、二五	四、一〇	四、一三	四、七	四、九	四、一八	四、一五	

【雪】初雪終雪の年次に表示すべき資格を有する記錄に未だ接せず。明治二十四年二月一日の降雪は有の大雪なり、積

雪深さ百三十六粍四、水量四一、四粍〇又同廿五年十二月十七日積雪深さ百六十粍にして、水量五三粍を示せり。而して降雪初終の一例を擧ぐれば、初雪同二十四年十一月廿七日、同廿五年十一月二十日。終雪同廿四年四月七日及び同廿五年四月一日とす。里人の諺に、「岳山（泉ヶ嶽）に三度雪降れば里にも來る」と里人は泉ヶ嶽麓の人なるべし。

「根白石小學校「觀記錄」に泉ヶ嶽雪期日の項あり載錄

明治三八年	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	大正元	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五
月日	一一、五	一一、三	一〇、二六	一一、一〇	一〇、一九	一一、三	一一、一	一一、一	一〇、三一	一〇、二一	一〇、二九	一一、一一	一一、五	一〇、二四	一一、二〇	一一、六	一一、四	一一、一〇	一一、八	一〇、一七	一一、四	一一、一九

松島村尋常高等小學校調査。日曜日及び休業月日を除く。夏期休業のため八月を缺く。降雨降雪晴曇日數左に。

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
晴	日 三	二一	一四	一五	一六	八	一六	—	一五	二〇	一一	八	一五六
曇	一	—	四	七	三	二	五	—	三	二	三	一六	五五
降雨	一	一	一	二	六	二	五	—	七	四	—	二	三一
降雪	—	—	一	—	—	—	—	—	—	—	一	一	三

鹽竈尋常高等小學校の日誌。日數は日曜日及び休業日を除く、華氏の寒暖計なり。

年	月	晴 日	曇 日	雨 日	雪 日	風 日	計 日	平均度
大正二年	一月	一五	四	—	—	—	一九	四一、〇六
大正三年	一月	一五	四	—	—	—	一九	四一、九八
同	二月	一八	四	—	二	—	二四	四一、七五
同	二月	一九	三	—	一	—	二三	四二、一七
同	三月	一五	二	四	—	一	二二	五〇、九〇
同	三月	一四	四	四	—	一	二三	四九、一三
同	四月	二一	二	一	—	二	二六	五四、〇三
同	四月	二〇	二	一	—	二	二五	五六、六〇
同	五月	一三	六	三	—	—	二二	六六、二三
同	五月	一三	六	三	—	—	二二	六六、九三
同	六月	一九	六	一	—	—	二六	七二、八二
同	六月	一九	五	二	—	—	二六	七二、七三
同	七月	一六	二	四	—	—	二二	七九、四〇
同	七月	一六	三	三	—	—	二二	七九、一三
同	八月	一六	三	五	—	二	二六	八五、〇〇
同	八月	二三	四	一	—	三	三一	八六、一六
同	九月	一三	四	三	—	—	二〇	七九、六〇
同	九月	一三	四	三	—	—	二〇	七五、八五
同	十月	一九	二	三	—	—	二四	六九、四一
同	十月	一八	三	三	—	—	二四	六五、八八
同	十一月	一七	六	—	一	—	二四	五九、四二
同	十一月	一六	五	二	—	—	二三	五七、一二
同	十二月	一八	五	—	二	—	二五	四五、四四
同	十二月	一六	六	—	一	—	二三	四七、八六
同	計	二〇〇	四六	二四	五	五	二八〇	六六、二六
同	計	二〇二	四九	二三	二	六	二八一	六一、七一

右二ヶ年間の平均氣象を、百分比にて示せば左の加し、但し一ヶ年を百日となし、日以下小數二位に止む。

晴 日	曇 日	雨 日	雪 日	風 日	計 日
七一、六六	一六、九四	八、二〇	一、二四	一、九六	一〇〇、〇〇

第五章　土　地

第一節　制　令

第一項　田制起因

神代史上、天照大神の御田に、畔あり溝あり、又水田の種子、陸田の種子を播種し給ふ。蓋し有史以前のことは邈として、繹ぬるに由なかりしも、古史の所謂る、國つ神と稱する土酋あり、各々其の國土を知領し、割據し、稼穡の業を營みたるが加し。故に天神大神の「御田」と特載せしは國つ神の所領に對したるがためならん乎。瑞穗國の異稱良に以あり。

神武天皇、天祖の蓂訓を奉體し、土酋の降を容れ、又抗するを擊ちて宇内を蕩平し、所謂る普天の下率土の濱に至るまで、王土に非らざるものなきの天業既に爰に定る。

神武天皇辛酉の歳正月朔旦、（太陽曆二月十一日）御即位の大禮を行はせられ給ふ。明治五年先帝我國の紀元を制し給ふや、御即位の日を紀元第一年と定め給へり。すでに位に即き、征討に功ありし將士を賞して、皆宅土を賜ふ。又久米部に命じて穫田を營ましむ。即ち後ちの功田・公田・口分田・公營田及び位田・職田・賜田・神田・寺田等に關する田制の法令皆爰に胚胎す。

崇神天皇六十二年（皇紀六二五）乙酉河内國に依網池を作るも、又垂仁帝二十七年（皇紀六五八）始めて屯倉を置かせ給ふも、皆此れ糧食の安定を期待せざはなし。屯倉は屯倉に屬する田、即ち御田を耕耘せしむるの邑部なり。

古事記景行段。此之御世。定田部。

景行紀五十七年條。以小墾田屯倉。與每國田部。給睨紗手媛。以櫻井屯倉與每國田部。給賜香々有媛。以難波屯倉與每郡鑵丁。給睨宅媛。（鑵丁、他の部に屬する者を、田部として役する場合に稱すと姓氏家系辭書に見ゆ）

欽明紀十七年條。以處々韓人。爲大身狹屯倉田部。高麗人爲小身狹屯倉田部。故因爲屯倉之號也。

同紀三十年條。量置田部。其來尙矣。年甫十餘。脫籍免課者衆。宣遣膽津。檢定白猪（屯倉）田部下籍。

聖武天皇天平十年（皇紀一三九三）。百姓に種穀を給與して田園を耕作せしむべしと勅を下せり。然れども陸奥の國民即ち百姓には普及せざるもの、如し。後ち二十五年の歳月を經過し、天平寶字二年陸奥守藤原朝獵は狀を具し、昨年以來、夷俘の皇化を敬慕して歸服する男女一千六百九十人あり、此等の夷俘に種穀を給與し、田園を耕耨せしめて王民と爲し、一朝有事の日に際して邊土を護るの軍人たらしめ給へと奏上せり、廷議斯の奏を納る。

續日本紀。辛亥（天平寶字二年六月）陸奥國言。去年八月以來。歸降夷俘。本女惣一千六百九十餘人。或去離本土。歸慕皇化。或身涉戰場。與賊結怨。惣是新來。良未安堵。亦夷性狼心。猶豫多疑。望請。准天平十年閏七月十四日勅。量給種子。令得佃田。永爲王民。以充邊軍。許之。

一、功　田

古、國家に勳功ある人に田地を賜ふ。大功は世々絕えず、上功は三世に傳へ、中功は二世に傳へ、下功は子に傳ふ。男女嫡庶に論なく兄弟に均分し、兄弟死するものあれば、又その子に傳ふ、女子の子は分與すべからず、女子死すればその分を他の男子に傳與す。子なきものは傳ふるを得ず、兄弟の子を以て養子とすれば傳ふるを得、嫡孫承祖は傳ふることを得ず。大功は永世なりと雖も謀叛以上の罪を犯せば沒收し、惡逆以下沒收せず。上功以下八虐の除名を犯せば沒收、餘の除名を犯せるも沒收の限りにあらず。功田を給すべくして請はず、或は足らずして身亡ずれば子孫に給す。此

の制政權覇府に歸するに及びて行れず、後醍醐天皇中興に及びて復したりと雖も王政振はず竟に廢制となる。

二、公　　田

田に公・私の別あり。公田に位田・職田・賜田・口分田等に充て給せざる剩田及び神田・寺田なり。公田は所屬の國司より鄕士の估價に從ひ、一年を限りて賃租す。賃とは春に方りて先其の直を取るといひ、租とは人に與へてこれを作らしめ、秋に至りて其租を輸さしむるをいふ。即地子田にて今の小作なり、地子は四等の田品に依りて各其の穫稻の五分の一を輸さしむ。上田は百束、中田は八十束、下田は六十束、下下田は三十束なり。又この田を賃租せしめず、官に人を傭ひこれを耕耨せしめ、其の收穫を官に納め、其の内より伽人の營料を出す、これを公營田といふ。

三、口　分　田

孝德天皇大化二年（皇紀一三〇六）天皇中大兄皇子を皇太子とし、中臣鎌足等と内治の改革を行はせられたり。

第一、歷朝設置せられたる子代の民、及び諸の屯倉を始めとし、各族長が私有する部曲「かきべ」田莊を收めて悉く之を公地公民とすること。

第二、班田「あがちた」受授の法を制し、人ごとに口分田「くふんでん」を給すること。

古、人民六歲に至れば各田地を賜ひ、力作して租を出し、その餘を以て自ら養はしむるの制度にして、其の身死すれば公に收む。

田令義解。凡給口分田者。男二段女減三分之一。五年以下不給其地。有寬狹者從鄕土法。（謂。受田足二段者爲寬。不足者爲狹也。言依上文。男女口分既有定法。若鄕土少田者不可必滿其數。故云。從鄕土法。即雖寬博而有餘亦依二段法。不須過越也）易田倍給。（謂。易田者。其地薄瘠隔歲耕種也。倍給者。假令應給二段者。即給四段之類也）給訖具錄町段及四至。（謂。田之四面所至表定に容易ならしむべき出典は極めて稀れなり。

班田收授。孝德天皇の時制定せられたる法制。人民の財產を平等にする爲、土地を私有することを禁じ、口分田として一家の人口男女に應じ、男子に水田二段（今の二段四畝）女子に其の三分の二を給す、之を班田といひ、人死亡すれば其田を官に還附す、之を收授といふ。而して其田より年毎に稻百束（今の二石二升九合）を蒐、四束四把（今の八升九合餘）を田租として官に納めしむ。

四、公　營　田

私營田あるが故に公營田の稱あり。公・私の區別を詳述するに左記の引用書を以てす。

田制篇。營田とは田地を營種することにて、公私の別あり。公營田とは、諸國の公田は賃租（公田參照）する例なるを、弘仁十四年に大貳小野峯守の上表により、太宰府管内諸國をして、公營田を佃らしむ。此法たるや官に於て其の益少からざるのみならず百姓も亦これが爲に生計を得て、調庸の輸貢を闕かず以て究乏飢餓を免るゝことを得るなり。私營田といふは、荒廢の地、空閑の地を官に請ひて、私に營種するをいふ即ち墾田なり（但京中には、水田を營種することを聽さず）

軍防令義解。凡公私田荒廢。（謂。位田賜田及口分田墾田等頴。是爲私田。自餘者皆爲公田也）三年以上有能借佃者經官司判借之。雖隔越亦聽。（謂。假如甲郡人欲佃乙郡田者聽也）私田三年還主。公田六年還官。（謂。雖頴田年未滿限者。不合收。其限内者輸租。限外者輸地子也）限滿之日。所借人口分未足者。公田即聽充口分。（謂。不持頴年。即授也）私田不合。其官人於所部界内。有空閑地願佃者任聽營種。（謂。國司若以土人任爲國司並郡司。及百姓等營種者即永爲私田）替解之日還公。

田令義解。凡絲東邊北邊諸郡人居。皆於城堡内安置。其營門之所。唯置莊舍。至農時堪營作者。出就莊田。（謂。張壯者出就田舍。老少者留在堡内也。收歛訖勒還。（謂。要勒而還於城堡也。其城堡崩頹者。從當處居戶。隨閑修理。（謂。堡者高土以爲堡。障防賊也。此非守固之城。故役居戶修理。上條城隍崩頹者是守固之。故役兵士修理。彼此不同。仍立兩條也。

第二項　田制改廢

一、大化の制令